

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第135集

寄居町

^ひ樋 ^{した}ノ下 遺跡

埼玉県住宅供給公社リバーサイド玉淀建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

(第1分冊)

1994

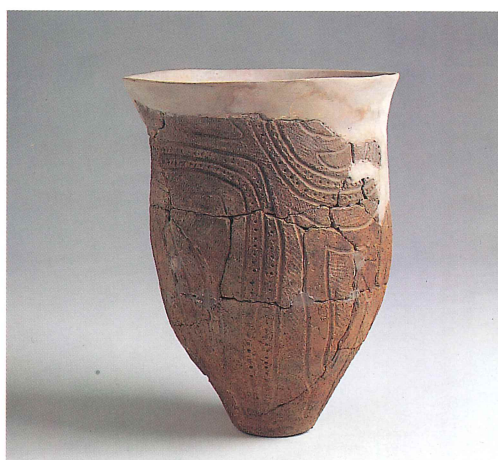
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



第30・31号住居跡全景



第30号住居跡出土 1号埋甕



第30号住居跡出土 2号埋甕



第28号住居跡全景



第6号土壙遺物出土状況



第6号土壙出土土器



第21号土壙出土土器

序

埼玉県北西部にある寄居町は、国指定史跡である鉢形城が築かれたように、歴史遺跡の多い町として、また交通の要衝として古くから栄えてまいりました。景勝地玉淀でも知られるように、秩父連山を背に自然環境にも恵まれた地でもあります。

このように伝統ある町のさらなる飛躍と発展のために再開発事業が計画され、その一環として、寄居地内にリバーサイド玉淀が建設されることとなりました。事業地内には、遺跡の存在が確認されたために、その取り扱いについて埼玉県住宅供給公社と埼玉県教育委員会との間で慎重に協議が重ねられてまいりました。

その結果、事業地内に所在する遺跡については、当事業団が埼玉県住宅供給公社の委託を受けて発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査の結果、縄文時代から古墳時代、さらには平安時代にかけての良好な遺跡であることが判りました。とくに縄文時代では、敷石住居と呼ばれ、床一面に石を敷き詰めた特徴的な住居が数多く発見されました。後期の敷石住居跡としては県内でも最も型の整った例といえましょう。

本書は、その発掘調査報告書であります。本書が学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及・啓蒙および教育機関の参考資料として広く御活用いただけることを願って止みません。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで多大な御協力を賜りました埼玉県住宅供給公社、寄居町教育委員会、花園町教育委員会ならびに地元関係者各位、発掘整理作業に携われた方々に対しまして、厚く御礼を申しあげます。

平成6年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井 桂

例 言

1. 本書は埼玉県大里郡寄居町大字寄居字樋ノ下697-1番地他に所在する樋ノ下遺跡の発掘調査報告書である。

文化庁指示通知は以下のとおりである。

樋ノ下遺跡 平成3年7月4日付け委保第5-964号

平成4年4月13日付け委保第5-122号

平成5年1月7日付け委保第5-1154号

遺跡の略号は以下のとおりである。遺物の注記はこの略号を用いた。

樋ノ下遺跡：HNST

2. 発掘調査は、リバーサイド玉淀建設事業に伴うものであり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県住宅供給公社の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書作成作業も引き続き、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託し、実施した。
3. 発掘調査は、平成3年4月1日から平成4年9月30日まで実施し、平成3年9月までは黒坂禎二・岩田明広が担当し、利根川章彦・村田章人の協力があつた。平成3年10月以降は、細田 勝岩田明広が担当した。整理・報告書作成作業は、平成4年度に岩田が、平成5年度に細田が担当した。なお、発掘調査・整理作業の組織は2ページに示した。
4. 出土遺物の実測および作図は、古墳・平安時代を岩田が、縄文時代を細田が担当した。
5. 発掘調査の写真撮影は黒坂・岩田・細田が行ない、縄文時代の遺物撮影を細田が、古墳・平安時代の遺物を岩田が行なった。
6. 報告書は第1冊分に縄文時代を、第2冊分に古墳時代以降を掲載した。
7. 本書で使用した地形の呼称は、「寄居町の自然」『寄居町史資料集』地学編に従った。
8. 本書の執筆は、Ⅰ-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、Ⅰ-2～Ⅳを細田が、Ⅴ～Ⅶを岩田が担当した。
9. 本書の編集は、資料部資料整理第1課の細田・岩田があたった。
10. 本書に掲載した資料は、平成6年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
11. 遺物の基準点測量、航空写真・測量、地上写真測量は株式会社中央航業、縄文土器の胎土分析を(株)第四紀地質研究所 井上 巖氏、敷石住居跡の石材鑑定を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課 本間岳史氏、須恵器の胎土分析を奈良教育大学 三辻利一氏、残存脂肪酸分析を帯広畜産大学 中野益夫氏、獣骨鑑定を宮崎重夫氏、人骨鑑定を聖マリアンナ医科大学 森本岩太郎氏、土器のグラビア写真を折原基久氏にそれぞれ委託した。
12. 本書の執筆にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜わった。(敬称略)
荒川 正 今福利恵 奥野麦生 樫村友延 菊池伸之 菊池 実 木下哲夫 小林 茂 鈴木 徳雄 橋本康司 深田芳之 寄居町教育委員会

凡 例

1. 図中の座標は国家標準直角座標第Ⅸ系に基づく座標を表わし、方位は全て座標北を表わす。
2. 遺構の略号は以下のとおりである。

住居跡 SJ 土塋 SK 古墳跡 SS 掘立柱建物跡 SB 溝跡 SD

3. 図の縮尺は下記を基本とした。

全体図 1/600 住居跡実測図（縄文1/80・平安1/60） 古墳実測図1/150 石室実測図1/60
 カマド・貯蔵穴1/40 土塋実測図 1/60 土器実測図 1/4 中～大型石器 1/3 小形石器
 1/2 土器拓影 1/3

4. 図中表示したグリッドはすべて10m メッシュで示しており、北西杭を基準にグリッド名称を示した。

5. 海拔標高は遺構の土層図または断面図の水平表示線に表記した。表記なき場合は、同一標高である。標高が変わる場合は、その都度表記した。

6. 遺構実測図における柱穴中の数字は、上端最高水準点からの深さを示し、cm を単位とする。

7. 遺構実測図中に特に有意な石材については片理構造（片岩系）・粒状組織等（堆積岩系）を表示し、遺構中での利用率・加工状況等について示すように留意した。

8. 土壌の碎屑物の含有量は以下の序列に区分した。

非常に多い＞多量＞多い＞やや多い＞少量＞微量

9. 碎屑物の粒度は国際農業地質協会の基準に従い、粘土・シルト・細粒砂・粗粒砂・礫の分類を採用した。

10. 挿図中におけるスクリーントーンの表示は以下のとおりである。



11. 土器実測図における断面黒塗り須恵器を示す。

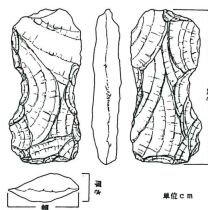
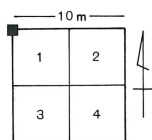
12. 観察表の表記は以下の原則によっている。

法量の単位は cm および g であるが、金属製品については mm を用いた。

胎土の含有碎屑物・鉱物等は次の記号を用いて表記した。

A 石英 B 角閃石 C 雲母 D 片岩 E 酸化鉄等 F ガラス質礫 G その他の礫 H 白針状物質

13. グリッド出土土器・石器実測図、拓影図の端に示した表示は、遺物が出土した当該グリッドを示している。



14. 石器の計測値は右のとおりに測定した。

15. 土器観察表における残存率は百分率で示した。
16. 土層・土器の色調は「新版 標準土識帳」を基準とした。
17. 土器の焼き具合は A 良好 B 良い C やや悪い D 悪いの 4 段階で示した。
18. 残存率は部位における百分率で示した。

目 次

(第1冊分)

巻頭図版 1	第30・31号住居跡	第30号住居跡出土土器
巻頭図版 2	第28号住居跡	第6号土壙遺物出土状況
巻頭図版 3	第6号土壙出土土器	第21号土壙出土土器

序

例言

凡例

I	調査の概要	1
1	調査に至るまでの経過	1
2	調査の経過	2
(1)	発掘調査および報告書刊行事業の組織	2
(2)	発掘調査の方法	3
(3)	整理作業	4
II	遺跡の立地と環境	5
1	縄文時代	7
2	古墳時代以降	10
III	遺跡の概観	13
IV	樋ノ下遺跡の調査	17
1	縄文時代の遺構と遺物	17
(1)	縄文時代前期の住居と出土遺物	17
(2)	縄文時代後期の住居と出土遺物	21
(3)	土壙と出土遺物	83
(4)	グリッド出土の遺物	145
2	小結	176
付 編 1		177
参考文献		218

巻頭図版1 第18号住居跡 第15号住居跡
巻頭図版2 第5号墳石室

V	古墳時代の遺構と遺物	223
1	概要	223
2	古墳跡と出土遺物	227
3	小結	293
VI	平安時代の遺構と遺物	294
1	概要	294
2	住居跡・土坑と出土遺物	294
(1)	寄居面Ⅰに分布する遺構	294
(2)	段丘崖に分布する遺構	308
(3)	寄居面Ⅱに分布する遺構	311
3	小結	382
VII	その他の遺構と遺物	383
1	溝	383
2	護岸工事跡・河川跡	389
3	土坑	391
4	表採・グリッド出土遺物	391
VIII	結	393
付 編2		394
参考文献		429

挿 図 目 次

(第 1 冊分)

第 1 図	埼玉県 の 地形図	5
第 2 図	寄居町周辺 の 地質図	6
第 3 図	周辺遺跡 の 分布図	8
第 4 図	遺跡周辺 の 地形	12
第 5 図	樋ノ下遺跡遺構全体図	13
第 6 図	基準土層	14
第 7 図	第13号住居跡	16
第 8 図	第13号住居跡出土土器	17
第 9 図	第 5 号住居跡	18
第10図	第 5 号住居跡出土土器	18
第11図	第 1 号住居跡	20
第12図	第 1 号住居跡出土土器	21
第13図	第 2 号住居跡	22
第14図	第 2 号住居跡出土土器 (1)	23
第15図	第 2 号住居跡出土土器 (2)	24
第16図	第 2 号住居跡出土土器・土製品	25
第17図	第 2 号住居跡出土土器	25
第18図	第 3 号住居跡	27
第19図	第 3 号住居跡出土土器	28
第20図	第 4 号住居跡	29
第21図	第 4 号住居跡出土土器 (1)	31
第22図	第 4 号住居跡出土土器 (2)	32
第23図	第 4 号住居跡出土土器 (1)	33
第24図	第 4 号住居跡出土土器 (2)	34
第25図	第 4 号住居跡出土土器 (3)	35
第26図	第 4 号住居跡出土土器 (4)	36
第27図	第12号住居跡遺物出土状態	37
第28図	第12号住居跡	38
第29図	第12号住居跡出土土器 (1)	39
第30図	第12号住居跡出土土器 (2)	40
第31図	第27号住居跡敷石面	41
第32図	第27号住居跡掘り方	42
第33図	第27号住居跡出土土器 (1)	44

第34図	第27号住居跡出土土器 (2)	45
第35図	第27号住居跡出土土器	46
第36図	第27号住居跡出土土器 (2)	47
第37図	第28号住居跡敷石面	48
第38図	第28号住居跡・石組み遺構	49
第39図	第28号住居跡出土土棒	49
第40図	第28号住居跡掘り方	50
第41図	第28号住居跡出土土器 (1)	51
第42図	第28号住居跡出土土器 (2)	52
第43図	第28号住居跡出土土器	53
第44図	第29号住居跡敷石面	55
第45図	第29号住居跡掘り方	56
第46図	第29号住居跡出土土器	57
第47図	第29号住居跡出土土器 (1)	58
第48図	第29号住居跡出土土器 (2)	59
第49図	第30・31号住居跡敷石面	61
第50図	第30号住居跡柱穴土層図	62
第51図	第30号住居跡敷石面	63
第52図	第31号住居跡敷石面	64
第53図	第30号住居跡埋甕埋設状態	65
第54図	第30・31号住居跡掘り方	66
第55図	第30号住居跡出土土器 (1)	67
第56図	第30号住居跡出土土器 (2)	68
第57図	第30号住居跡出土土器 (3)	69
第58図	第30号住居跡出土土器	70
第59図	第31号住居跡出土土器	71
第60図	第30号住居跡出土獣骨残存部位	71
第61図	第32号住居跡	72
第62図	第32号住居跡出土土器	73
第63図	第32号住居跡出土土器	73
第64図	第33号住居跡	74
第65図	第33号住居跡出土土器	75
第66図	第34号住居跡敷石面	76
第67図	第34号住居跡掘り方	76

第68図	第34号住居跡出土土器	77	第104図	土壙出土土器(23)	116
第69図	第34号住居跡出土土器(1)	77	第105図	土壙出土土器(24)	117
第70図	第34号住居跡出土土器(2)	78	第106図	土壙位置図(第5面)	118
第71図	第35号住居跡	79	第107図	土壙(5)	119
第72図	第35号住居跡出土土器	80	第108図	土壙位置図(第6面)	120
第73図	第36号住居跡	81	第109図	土壙(6)	121
第74図	土壙位置図(第1面)	82	第110図	土壙位置図(第7面)	122
第75図	土壙(1)	83	第111図	土壙(7)	123
第76図	土壙(2)	84	第112図	土壙(8)	124
第77図	土壙位置図(第2面)	89	第113図	土壙(9)	125
第78図	土壙(3)	90	第114図	土壙位置図(第8面)	126
第79図	土壙位置図(第3面)	91	第115図	土壙(10)	127
第80図	土壙(4)	92	第116図	土壙出土土器(25)	128
第81図	土壙位置図(第4面)	93	第117図	土壙出土土器(26)	129
第82図	土壙出土土器(1)	94	第118図	土壙出土土器(27)	130
第83図	土壙出土土器(2)	95	第119図	土壙出土土器(28)	131
第84図	土壙出土土器(3)	96	第120図	土壙出土土器(29)	132
第85図	土壙出土土器(4)	97	第121図	土壙出土土器(1)	133
第86図	土壙出土土器(5)	98	第122図	土壙出土土器(2)	134
第87図	土壙出土土器(6)	99	第123図	土壙出土土器(3)	135
第88図	土壙出土土器(7)	100	第124図	土壙出土土器(4)	136
第89図	土壙出土土器(8)	101	第125図	土壙出土土器(5)	137
第90図	土壙出土土器(9)	102	第126図	土壙出土土器(6)	138
第91図	土壙出土土器(10)	103	第127図	土壙出土土器(7)	139
第92図	土壙出土土器(11)	104	第128図	土壙出土土器(8)	140
第93図	土壙出土土器(12)	105	第129図	土壙出土土器(9)	141
第94図	土壙出土土器(13)	106	第130図	土壙出土土器(10)	142
第95図	土壙出土土器(14)	107	第131図	グリッド出土土器(1)	148
第96図	土壙出土土器(15)	108	第132図	グリッド出土土器(2)	149
第97図	土壙出土土器(16)	109	第133図	グリッド出土土器(3)	150
第98図	土壙出土土器(17)	110	第134図	グリッド出土土器(4)	151
第99図	土壙出土土器(18)	111	第135図	グリッド出土土器(5)	152
第100図	土壙出土土器(19)	112	第136図	グリッド出土土器(6)	153
第101図	土壙出土土器(20)	113	第137図	グリッド出土土器(7)	154
第102図	土壙出土土器(21)	114	第138図	グリッド出土土器(8)	155
第103図	土壙出土土器(22)	115	第139図	グリッド出土土器(9)	156

第140図	グリッド出土土製品・石製品	157
第141図	グリッド出土石器(1)	158
第142図	グリッド出土石器(2)	159
第143図	グリッド出土石器(3)	160
第144図	グリッド出土石器(4)	161
第145図	グリッド出土石器(5)	162
第146図	グリッド出土石器(6)	163
第147図	グリッド出土石器(7)	164
第148図	グリッド出土石器(8)	165
第149図	グリッド出土石器(9)	166
第150図	グリッド出土石器(10)	167
第151図	三角・菱形ダイヤグラム	177
第152図	樋ノ下遺跡分析資料	181
第153図	大背戸遺跡分析資料	181
第154図	QT-PL 相関図	182
第155図	獣骨出土位置と残存部位	183
第156図	試料採取地点	191
第157図	分析結果	192
第158図	樋ノ下遺跡出土土器変遷図	196
第159図	加曽利 E 系列の変遷	200
第160図	西部関東の一括資料	204
第161図	西部関東の一括資料	205
第162図	東部関東の一括資料	206
第163図	北部関東～南東北の一括資料	207
第164図	南東北の一括資料	208
第165図	南東北の一括資料	209
第166図	住居と土壌の相関図	211
第167図	柄鏡形(敷石)住居跡の分類と類例	214
第168図	敷石住居跡の石材	216
付 図	樋ノ下遺跡縄文時代遺構全測図	
	(第2冊分)	
第169図	樋ノ下遺跡全体図	224
第170図	古墳群全体図	225
第171図	第1号墳および出土遺物	227
第172図	第1号墳土層図	227
第173図	第2号墳	228

第174図	第2号墳土層図	229
第175図	第2号墳遺物出土状態	229
第176図	第2号墳出土遺物	230
第177図	第3号墳	231
第178図	第3号墳土層図	232
第179図	第3号墳遺物出土状態	233
第180図	第3号墳出土遺物	234
第181図	第4号墳	234
第182図	第4号墳石室	235
第183図	第4号墳出土遺物	235
第184図	第5号墳	236
第185図	第5号墳土層図	237
第186図	第5号墳石室	239
第187図	第5号墳石室閉塞施設	240
第188図	第5号墳石室根石	241
第189図	第5号墳遺物出土状態	242
第190図	第5号墳出土遺物	243
第191図	第6号墳	244
第192図	第6号墳土層図	245
第193図	第6号墳石室閉塞施設および 根石	245
第194図	第6号墳石室	246
第195図	第6号墳人骨出土状態	247
第196図	第7号墳	248
第197図	第7号墳土層図	248
第198図	第7号墳石室	249
第199図	第8号墳	251
第200図	第8号墳土層図	252
第201図	第8号墳石室(1)先葬面	253
第202図	第8号墳石室(2)追葬面	254
第203図	第8号墳石室閉塞施設	255
第204図	第8号墳石室根石	256
第205図	第8号墳遺物出土状態(1)	257
第206図	第8号墳遺物出土状態(2)	258
第207図	第8号墳出土遺物	259
第208図	第9号墳	260

第209図	第9号墳出土遺物	261	第245図	平安時代遺構分布図	296
第210図	第10号墳	262	第246図	寄居面Ⅰの遺構分布	297
第211図	第10号墳出土遺物	262	第247図	第6号住居跡	298
第212図	第11号墳	263	第248図	第6号住居跡遺物出土状態	299
第213図	第11号墳石室	264	第249図	第6号住居跡出土遺物	300
第214図	第11号墳石室根石	265	第250図	第7号住居跡	301
第215図	第11号墳遺物出土状態	265	第251図	第7号住居跡出土遺物	302
第216図	第11号墳出土遺物	266	第252図	第8・9号住居跡	303
第217図	第12号墳	267	第253図	第8・9号住居跡遺物出土状態	304
第218図	第12号墳土層図	268	第254図	第8・9号住居跡出土遺物	305
第219図	第12号墳出土遺物	268	第255図	第11号住居跡	306
第220図	第12号墳主体部掘り方	269	第256図	第11号住居跡出土遺物	307
第221図	第13号墳	270	第257図	第12号土坑	307
第222図	第14号墳	271	第258図	段丘崖の遺構分布	308
第223図	第15号墳	273	第259図	第10号住居跡・第24号土坑	309
第224図	第15号墳土層図	274	第260図	段丘崖の土坑	310
第225図	第15号墳石室根石	274	第261図	寄居面Ⅱの遺構分布(1)	311
第226図	第15号墳石室	275	第262図	寄居面Ⅱの遺構分布(2)	312
第227図	第15号墳人骨出土状態	276	第263図	第14号住居跡	314
第228図	第15号墳遺物出土状態	276	第264図	第14号住居跡カマド	315
第229図	第15号墳出土遺物	278	第265図	第14号住居跡遺物出土状態	316
第230図	第16号墳	279	第266図	第14号住居跡出土遺物(1)	317
第231図	第16号墳土層図	280	第267図	第14号住居跡出土遺物(2)	318
第232図	第16号墳石室	280	第268図	第14号住居跡出土遺物(3)	319
第233図	第16号墳遺物出土状態	281	第269図	第15号住居跡	321
第234図	第16号墳出土遺物	281	第270図	第15号住居跡掘り方	322
第235図	第17号墳	283	第271図	第15号住居跡カマド	323
第236図	第17号墳土層図	283	第272図	第15号住居跡貯蔵穴	324
第237図	第17号墳石室	284	第273図	第15号住居跡遺物出土状態	325
第238図	第17号墳石室閉塞施設	285	第274図	第15号住居跡出土遺物(1)	326
第239図	第17号墳石室根石	285	第275図	第15号住居跡出土遺物(2)	327
第240図	第18号墳	287	第276図	第16号住居跡	329
第241図	第18号墳石室	288	第277図	第16号住居跡カマド	330
第242図	第18号墳石室根石	289	第278図	第16号住居跡貯蔵穴	331
第243図	第18号墳遺物出土状態	290	第279図	第16号住居跡遺物出土状態	332
第244図	第18号墳出土遺物	291	第280図	第16号住居跡出土遺物(1)	333

第281図	第16号住居跡出土遺物(2) ……	334	第315図	第1号掘立柱建物跡 ……	372
第282図	第16号住居跡出土遺物(3) ……	335	第316図	第2号掘立柱建物跡 ……	373
第283図	第17号住居跡 ……	337	第317図	寄居面Ⅱの土坑(1) ……	379
第284図	第17号住居跡遺物出土状態・ 出土遺物 ……	338	第318図	寄居面Ⅱの土坑(2) ……	380
第285図	第18号住居跡カマド ……	339	第319図	寄居面Ⅱの土坑出土遺物 ……	381
第286図	第18号住居跡 ……	340	第320図	第1～3号溝 ……	384
第287図	第18号住居跡貯蔵穴 ……	341	第321図	第4・5・8・9号溝 ……	385
第288図	第18号住居跡遺物出土状態 ……	342	第322図	第6号溝 ……	386
第289図	第18号住居跡出土遺物 ……	343	第323図	第7号溝 ……	387
第290図	第19号住居跡 ……	345	第324図	第6号溝出土遺物 ……	388
第291図	第19号住居跡掘り方 ……	346	第325図	第7号溝出土遺物 ……	388
第292図	第19号住居跡カマド ……	347	第326図	護岸工事・河川跡 ……	390
第293図	第19号住居跡遺物出土状態 ……	348	第327図	護岸工事・河川跡土層図 ……	391
第294図	第19号住居跡出土遺物(1) ……	349	第328図	第62・101号土坑 ……	391
第295図	第19号住居跡出土遺物(2) ……	350	第329図	表採・グリッド出土遺物 ……	392
第296図	第20号住居跡 ……	352	第330図	正竜寺窯出土須恵器の Rb-Sr 分布図 ……	401
第297図	第20号住居跡遺物出土状態 ……	353	第331図	末野 A-5窯出土須恵器の Rb-Sr 分布図 ……	401
第298図	第20号住居跡出土遺物 ……	354	第332図	折原窯灰原出土須恵器の Rb-Sr 分布図 ……	401
第299図	第21号住居跡 ……	355	第333図	桜沢1号窯出土須恵器の Rb-Sr 分布図 ……	401
第300図	第21号住居跡カマド ……	356	第334図	桜沢1号窯出土須恵器の K-Ca 分布図 ……	401
第301図	第21号住居跡貯蔵穴 ……	357	第335図	正竜寺窯灰原出土須恵器の Rb-Sr 分布図 ……	401
第302図	第21号住居跡遺物出土状態 ……	358	第336図	末野群と正竜寺群の相互識別 ……	402
第303図	第21号住居跡出土遺物(1) ……	359	第337図	正竜寺群と折原群の相互識別 ……	402
第304図	第21号住居跡出土遺物(2) ……	360	第338図	正竜寺群と桜沢群の相互識別 ……	402
第305図	第22号住居跡 ……	362	第339図	桜沢群と末野群の相互識別 ……	402
第306図	第23号住居跡 ……	362	第340図	桜沢群と折原群の相互識別 ……	403
第307図	第23号住居跡遺物出土状態・ 出土遺物 ……	363	第341図	正竜寺窯灰原出土須恵器の 化学特性 ……	403
第308図	第24号住居跡 ……	364	第342図	樋ノ下遺跡出土須恵器の Rb-Sr 分布図 ……	403
第309図	第25号住居跡 ……	365			
第310図	第26号住居跡 ……	366			
第311図	第26号住居跡カマド ……	367			
第312図	第26号住居跡遺物出土状態 ……	368			
第313図	第26号住居跡出土遺物(1) ……	369			
第314図	第26号住居跡出土遺物(2) ……	370			

第343図	樋ノ下遺跡出土須恵器の K—Ca 分布図	403
第344図	Fe 因子の比較	403
第345図	第4号墳石室構築順序	407
第346図	第16号墳石室構築順序	407
第347図	第5号墳石室構築順序	408
第348図	第6号墳石室構築順序	410
第349図	第7号墳石室構築順序	411

第350図	第8号墳石室構築順序	412
第351図	第11号墳石室構築順序	413
第352図	第15号墳石室構築順序	414
第353図	第17号墳石室構築順序	415
第354図	第18号墳石室構築順序	416
第355図	古墳および構築法編年表	422
付 図	樋ノ下遺跡古墳時代以降遺構全測図	

表 目 次

	(第1冊分)	
第1表	土器観察表	170
第2表	石器観察表	171
第3表	土壌一覧表	175
第4表	胎土性状表	184
第5表	土壌試料の残存脂肪抽出量	188
第6表	土壌試料に分布するコレステロール とシトステロールの割合	188
	(第2冊分)	
第7表	古墳一覧	226
第8表	平安時代住居・建物跡一覧	295
第9表	第6号住居跡出土遺物	301
第10表	第7号住居跡出土遺物	302
第11表	第8号住居跡出土遺物	306
第12表	第9号住居跡出土遺物	306
第13表	第11号住居跡出土遺物	307
第14表	第14号住居跡出土遺物	313

第15表	第15号住居跡出土遺物	324
第16表	第16号住居跡出土遺物	332
第17表	第17号住居跡出土遺物	339
第18表	第18号住居跡出土遺物	344
第19表	第19号住居跡出土遺物	348
第20表	第20号住居跡出土遺物	353
第21表	第21号住居跡出土遺物	361
第22表	第23号住居跡出土遺物	364
第23表	第26号住居跡出土遺物	367
第24表	土坑出土遺物	381
第25表	第6号溝出土遺物	388
第26表	第7号溝出土遺物	389
第27表	表採・グリッド出土遺物	392
第28表	埼玉県内窯跡および樋ノ下遺跡 出土須恵器等の分析値	399
第29表	樋ノ下遺跡出土須恵器の 産地推定表	400

写 真 図 版 目 次

	(第1冊分)
図版1	遺跡周辺の景観 調査以前の地形
図版2	遺跡の航空写真 遺構全景

図版3	遺構群全景(西から) 遺構群全景(南から)
図版4	第13号住居跡全景 第5号住居跡全景
図版5	第1号住居跡全景

第2号住居跡全景
図版6 第3号住居跡全景(東から)
第3号住居跡全景(南から)
図版7 第3号住居跡全景(北から)
第3号住居跡埋甕出土状況
図版8 第4号住居跡全景
第12号住居跡全景
図版9 第27号住居跡全景(東から)
第27号住居跡全景(南から)
図版10 第27号住居跡遺物出土状況
第27号住居跡掘り方全景(南から)
図版11 第28号住居跡全景(東から)
第28号住居跡全景(北から)
図版12 第28号住居炉跡内遺物出土状況
第28号住居石組み遺構全景
図版13 第28号住居炉跡全景
第28号住居石組み遺構掘り方全景
図版14 第28号住居跡掘り方全景
第28号住居跡張り出し部全景
図版15 第29号住居跡全景(東から)
第29号住居跡掘り方全景(南から)
図版16 第30・31号住居跡全景(北から)
第30・31号住居跡全景(南から)
図版17 第30号住居跡壁検出状況
第30号住居跡張り出し部埋甕検出状況
図版18 第30号住居跡1号埋甕半截状況
第30号住居跡2号埋甕半截状況
図版19 第31号住居跡全景(南から)
第31号住居跡張り出し部拡大(北から)
図版20 第31号住居跡張り出し部全景(北から)
第31号住居跡張り出し部壁検出状況
図版21 第30・31号住居跡壁石検出状況
第30・31号住居跡掘り方全景
図版22 第32号住居跡全景(南から)
第32号住居跡埋甕検出状況
図版23 第33号住居跡全景(北から)

第33号住居跡遺物出土状況
図版24 第34号住居跡全景(東から)
第34号住居跡掘り方全景(東から)
図版25 第34号住居跡遺物出土状況
第34号住居跡遺物出土状況
図版26 第35号住居跡全景(南から)
第89号土壙全景
図版27 第21号土壙全景
第3号・9号土壙全景
第7号・8号土壙全景
図版28 第18号・22号土壙全景
第15号・16号土壙全景
第13号・59号・60号土壙全景
第1号・5号土壙全景
図版29 第4号土壙検出状況・同半截状況
第6号・11号土壙全景
第19号全景・53号半截状況
第54号・55号土壙半截状況
図版30 第63号・79号土壙
第86号・12号土壙全景
第61号・67号土壙全景
第64号・68号土壙全景
図版31 第20号・73号土壙全景
第70号・74号土壙全景
第80～83・90～91号土壙全景(西から)
図版32 第80～83・90～91号土壙全景(南から)
同土壙掘り方全景
図版33 土壙全景
図版34 調査区南東端部土壙群検出状況
第100～101号土壙全景
図版35 第2号住居跡出土土器
第12号住居跡出土土器
第13号・27号住居跡出土土器
図版36 第27号・28号住居跡出土土器
第28号住居跡出土土器
第29号住居跡出土土器

図版37 第29号・33号住居跡出土土器
第30号住居跡出土土器
第34号・35号住居跡出土土器
図版38 第89号土壙出土土器
図版39 第1号・11号土壙出土土器
第4号・6号土壙出土土器
第5号・21号土壙出土土器
図版40 第21号土壙出土土器
第53号・84号土壙出土土器
第75号・86号土壙出土土器
図版41 第5号住居跡出土土器
第1号住居跡出土土器
図版42 第4号住居跡出土土器
第4号住居跡出土土器
図版43 第4号住居跡出土土器
第4号住居跡出土土器
図版44 第12号住居跡出土土器
第28号住居跡出土土器
図版45 第30号住居跡出土土器
第30号住居跡出土土器
図版46 第21号土壙出土土器
第23号土壙出土土器
図版47 第89号土壙出土土器
第89号土壙出土土器
図版48 第89号土壙出土土器(突起類)
第89号土壙出土土器
図版49 第89号土壙出土土器
第89号土壙出土土器
図版50 第89号土壙出土土器
第89号土壙出土土器
図版51 第4号住居跡出土石器
第27号住居跡出土石器
図版52 第28号住居跡出土石器
第29号住居跡出土石器
図版53 第34号住居跡出土石器
第89号土壙出土石器

図版54 第89号土壙出土石器
図版55 グリッド出土土器
図版56 グリッド出土土器
図版57 グリッド出土土製品
グリッド出土石器
図版58 グリッド出土石器
図版59 グリッド出土石器
住居跡出土獣骨
図版60 土器断面・電子顕微鏡写真
図版61 土器断面・電子顕微鏡写真

(第2冊分)

図版62 樋ノ下遺跡全景、第5～8号墳
図版63 第1号墳、第2号墳
図版64 第3号墳
図版65 第4号墳
図版66 第5号墳
図版67 第5号墳
図版68 第6号墳
図版69 第6号墳
図版70 第7号墳
図版71 第7号墳、第8号墳
図版72 第8号墳
図版73 第8号墳、第9号墳
図版74 第10号墳、第11号墳
図版75 第11号墳
図版76 第12号墳
図版77 第12号墳、第13号墳
図版78 第14号墳、第15号墳
図版79 第15号墳
図版80 第15号墳、第16号墳
図版81 第16号墳、第17号墳
図版82 第17号墳
図版83 第18号墳
図版84 第18号墳、古墳群と荒川(第5・8・
18号墳)
図版85 第6号住居跡

- | | | |
|-------|--|---|
| 図版86 | 第7号住居跡、第8・9号住居跡 | 土坑、第65号土坑、第85号土坑 |
| 図版87 | 第8号住居跡、第9号住居跡、第10号住居跡と第24号土坑、第11号住居跡、第14号住居跡 | 図版101 第6号溝、第7号溝 |
| 図版88 | 第14号住居跡、第15号住居跡 | 図版102 護岸工事跡(北側) |
| 図版89 | 第15号住居跡、第16号住居跡 | 図版103 護岸工事跡(南側)、樋ノ下遺跡遠景 |
| 図版90 | 第16号住居跡 | 図版104 第3・5・8・15号墳出土遺物 |
| 図版91 | 第17号住居跡、第18号住居跡 | 図版105 第8・9・11・16・18号墳出土遺物 |
| 図版92 | 第18号住居跡、第19号住居跡と第57号土坑 | 図版106 第2・3・4・5・10・12・15号墳出土遺物 |
| 図版93 | 第19号住居跡、第20号住居跡 | 図版107 古墳出土装身具類、古墳出土鉄製品 |
| 図版94 | 第21号住居跡と第56号土坑 | 図版108 第6・7・9号住居跡出土遺物 |
| 図版95 | 第22号住居跡、第23号住居跡、第24号住居跡、第25号住居跡、第26号住居跡 | 図版109 第14・15号住居跡出土遺物 |
| 図版96 | 第26号住居跡、第1・2号掘立柱建物跡 | 図版110 第16号住居跡出土遺物 |
| 図版97 | 第12号土坑、第25号土坑、第26号坑、第27号土坑、第28号土坑、第29号土坑、第30号土坑、第32号土坑 | 図版111 第16号住居跡出土遺物 |
| 図版98 | 第33号土坑、第34号土坑、第35号土坑、第36号土坑、第37号土坑、第38号土坑、第39号土坑、第40・41号土坑 | 図版112 第16・18・19号住居跡出土遺物 |
| 図版99 | 第42号土坑、第43号土坑、第44号土坑、第45号土坑、第46・47号土坑、第48号土坑、第49号土坑、第50号土坑 | 図版113 第19・20・21号住居跡出土遺物 |
| 図版100 | 第51号土坑、第52号土坑、第56号土坑、第58号土坑、第61号土坑、第64号 | 図版114 第21・26号住居跡出土遺物 |
| | | 図版115 第21号住居跡出土遺物(羽口)、平安時代住居跡出土鉄製品 |
| | | 図版116 平安時代住居跡出土紡錘車、平安時代住居跡出土石器 |
| | | 図版117 平安時代住居跡出土石器 |
| | | 図版118 平安時代住居跡出土石器 |
| | | 図版119 平安時代住居跡出土石器、第25・39号土坑・第7号溝・グリッド出土遺物 |
| | | 図版120 溝跡出土遺物、表採・グリッド出土遺物 |
| | | 図版121 古墳出土人骨 |

I 調査の概要

1 発掘調査に至る経過

本県は、東京都に隣接するという位置的な関係から、首都圏への業務機能等の集中とそれに伴う人口流入により急激な都市化を経験しており、とりわけ住宅や環境上の不満が多い。こうした状況に対応し、県では各種の住宅政策、都市・土地政策を実施しており、住宅建設もその一環として位置付けられている。県教育局生涯学習部文化財保護課では、こうした公共開発事業に対応するために、国・県の開発関係部局や公社・公団等と事前協議を実施し、文化財の保護について遺漏のないように調整を進めているところである。

大里郡寄居町大字樋ノ下地内に計画された寄居団地については、平成2年12月3日付け2埼玉公企第124号で埼玉県住宅供給公社理事長から埼玉県教育委員会教育長あて「事業予定地内（寄居地区）における埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて」照会があった。文化財保護課では、同事業予定地内には周知の埋蔵文化財は所在しないが、周辺の埋蔵文化財の状況からその存在が予想されたため所在確認調査を実施することとした。

所在確認調査は平成3年1月29日から30日の2日間実施した。その結果、縄文時代を中心とする遺構・遺物が検出されたため、平成3年2月4日付け教文第1051-1号をもって、埼玉県教育委員会教育長から埼玉県住宅供給公社理事長あて、次のとおり回答した。

- 1 事業予定地内（寄居地区）には埋蔵文化財包蔵地が所在する。
- 2 上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむをえず現状を変更しようとする場合は、事前に当課と協議すること。

その後、埼玉県住宅供給公社と文化財保護課との間で埋蔵文化財の保存について協議を重ねたが、その事業の主旨・必要性等から記録保存するための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と埼玉県住宅供給公社、文化財保護課の三者により、調査方法、調査期間、調査経費等について協議を重ね、平成3年4月1日から調査を開始することが決定された。

その後、埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から文化財保護法第57条1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が平成3年3月30日付け財埋文第970号で文化庁長官あて提出され、文化庁から平成3年7月4日付け委保第5-964号で受理通知があった。なお、発掘調査の進展による遺跡範囲の増補変更に伴い、埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から文化庁長官あての埋蔵文化財発掘調査届が平成3年9月30日付け財埋文第679号及び平成4年3月31日付け財埋文第962号で提出され、文化庁からはそれぞれ平成4年4月13日付け委保第5-122号、平成5年1月7日付け委保第5-1154号による受理通知があった。
(文化財保護課)

2 調査の経過

(1) 発掘調査および報告書刊行事業の組織

1. 発掘調査 (平成3年度)

理 事 長	荒 井 修 二
副 理 事 長	早 川 智 明
常務理事兼 管 理 部 長	倉 持 悦 夫
理 事 兼 調 査 部 長	栗 原 文 蔵
庶 務 経 理	
庶 務 課 長	高 田 弘 義
主 査	松 本 晋
主 事	長 滝 美智子
経 理 課 長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 事	福 田 昭 美
主 事	腰 塚 雄 二
主 事	菊 池 久
発 掘	
理 事 兼 調 査 部 長	栗 原 文 蔵
調査副部長	梅 沢 太久夫
調 査 第 1 課 長	宮 崎 朝 雄
主任調査員	黒 坂 禎 二
主任調査員	細 田 勝
調 査 員	岩 田 明 広

3. 整理 (平成4年度)

理 事 長	荒 井 修 二
副 理 事 長	早 川 智 明
常務理事兼 管 理 部 長	倉 持 悦 夫
理 事 兼 調 査 部 長	栗 原 文 蔵
庶 務 経 理	
庶 務 課 長	萩 原 和 夫
主 任	賛 田 清
主 事	菊 池 久

2. 発掘調査 (平成4年度)

理 事 長	荒 井 修 二
副 理 事 長	早 川 智 明
常務理事兼 管 理 部 長	倉 持 悦 夫
理 事 兼 管 理 部 長	栗 原 文 蔵
庶 務 経 理	
庶 務 課 長	萩 原 和 夫
主 査	賛 田 清
主 事	菊 池 久
経 理 課 長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 事	長 滝 美智子
主 事	福 田 昭 美
主 事	腰 塚 雄 二
発 掘	
理 事 兼 調 査 部 長	栗 原 文 蔵
調査副部長	梅 沢 太久夫
調 査 第 1 課 長	宮 崎 朝 雄
主任調査員	細 田 勝
調 査 員	岩 田 明 広

4. 整理 (平成5年度)

理 事 長	荒 井 桂
専 務 理 事	横 川 好 富
副 理 事 長	富 田 真 也
常務理事兼 管 理 部 長	柴 崎 光 生
理 事 兼 調 査 部 長	中 島 利 治
庶 務 経 理	
庶 務 課 長	萩 原 和 夫
主 査	賛 田 清

経理課長	関野栄一	主事	菊池久
主任	江田和美	経理課長	関野栄一
主事	長滝美智子	主任	江田和美
主事	福田昭美	主事	長滝美智子
主事	腰塚雄二	主事	福田昭美
整理		主事	腰塚雄二
資料部長	栗原文蔵	整理	
資料部副部長兼 資料整理第1課長	増田逸朗	資料部長	小川良祐
調査員	岩田明広	資料部副部長兼 資料整理第1課長	谷井彪
		主任調査員	細田勝

(2) 発掘調査の方法

樋ノ下遺跡の調査は、平成3年4月1日から平成4年9月30日まで実施された。調査は上位段丘面（寄居面Ⅰー以下上位面と略述）から開始した。国家座標第Ⅸ系の座標に沿って1辺が10mの大グリッドを設定した。グリッドは南北にA～T、東西に0～19の大グリッドに区分され、北西杭を基準とした。大グリッドはさらに2m間隔にa～yに区分し、大グリッドと同様に北西杭を基準とした。遺構の調査はすべてこのグリッドに従って実施した。

4月初旬より遺構確認を開始したが、地山が砂層であり表土の堆積が浅く、また後世に著しい攪乱を受けていたために、遺構の遺存状態は良好とはいえなかった。4月下旬に上位面（寄居面Ⅰー以下下位面と略述）の確認が終了した。調査区北東から遺構番号を付け、順次掘りはじめた。遺構は、調査区北東隅で縄文時代後期の住居跡・土壌が、北西では縄文時代の土壌と平安時代の住居跡・土壌が検出された。

5月からは下位段丘面（寄居面Ⅱー以下下位面と略述）の遺構確認を開始した。下位面は、上位面と約3mの比高差があり、盛土されていたため、遺構確認にはかなりの時間を費やした。6月中旬に遺構確認が終了したが、この時点で古墳跡が18基検出され、また平安時代の住居も調査区の西側に広がっていることが判明した。

6月以降、上位面と平行して、下位面の古墳の調査を実施した。上位面の遺構は縄文時代の住居跡7軒、土壌13基で、平安時代の住居3軒、土壌2基であった。近世の石垣状遺構の調査も含め、上位面の調査は9月初旬で終了した。9月中旬に航空写真撮影・測量を実施した。

9月以降、調査の主力は下位面の古墳に集中した。古墳は下位面のG列から調査を開始し、遺構確認に従って順次番号を付した。古墳の調査は11月までに1号～13号までが終了した。

11月以降は、玉淀水天宮の西側、Q～T-4～8グリッド調査を開始した。この調査区では、平安時代の住居跡8軒、土壌20基、溝1条が検出された。この地区の調査を平成4年2月初旬に終了し、同月中旬に航空写真撮影・測量を実施した。引き続いて調査対象地区を水天宮北側、N～P-7～10グリッドに移した。この地区でも平安時代の住居跡3軒、土壌15基、掘立柱建物跡2棟が検

出された。この地区の調査は、平成4年3月に終了した。この間に、未調査であった第15～18号墳の調査に一部着手した。

平成4年度

平成4年度は第15号～18号古墳および、古墳下に埋没している縄文時代の遺構の調査が主体となった。古墳は平成4年5月下旬に調査が終了し、6月以降は縄文時代の以降調査が主体となった。古墳の調査が終了した6月下旬に航空写真撮影・測量を実施した。

縄文時代の遺構調査は下位面の調査区中央部から開始し、順次東側に調査を進めた。遺構は、古墳検出面から20cm程度埋没していたが、古墳築造に際して攪乱を受けており、遺存状態は良好とは言い難かった。南北15列以東では攪乱も少なく、良好な状態で遺構が検出された。

7月以降は南北15列以東を調査対象とした。良好な敷石住居跡が検出され、石材鑑定と平行して調査を進めた。7月からは第30・31号住居に調査を集中した。敷石住居跡は敷石住居跡の全容が検出された状況で、8月初旬に現地説明会を実施した。

現地説明会終了後に、遺存状態が良好な第28号、第30・31号住居跡の地上写真測量を実施した。8月以降、第27～31号住居跡の敷石除去・掘り方の調査および土壌の調査を行なった。同月下旬に機材を撤収し、樋ノ下遺跡の調査を全て終了した。

(3) 整理作業

樋ノ下遺跡の整理作業は、平成4年10月1日から平成6年3月31日まで実施された。平成4年度は古墳から平安時代の遺構・遺物を、平成5年度では縄文時代の遺構・遺物を対象として作業が進められた。

平成4年度

10月1日から整理作業が開始された。作業は二次原図作成と平行して、遺物接合・復元作業を行なった。二次原図の作成と平行して、順次遺構のトレースを実施し、12月初旬には遺構の版組みを終了した。遺物は10月下旬に接合。復元作業が終了次第、順次トレースを行ない、11月下旬に版組みを終了した。11月中旬以降拓影図の作成とともに、版組みの修正を実施した。12月中旬以降は本文の割り付けと原稿執筆を開始するとともに遺物写真撮影を実施した。平成5年3月には原稿執筆が終了した。

平成5年度

平成5年4月から縄文時代の整理作業を開始した。二次原図の作成と平行して、土器の接合・復元作業を行なった。二次原図が終了した以降から順次トレース作業に入り、8月初旬には遺構のトレースが終了した。土器は接合が終了次第順次実測を開始し、平行してトレースを行なった。

7月下旬に遺物の選別を行ない、8月以降、新たに土器の拓本取りを実施した。9月中旬には接合・復元および拓本取りの作業が終了したため、石器の実測を開始した。

10月下旬には、遺構および土器実測図のトレースが終了し、図版組みと石器の実測に集中した。11月下旬には石器の実測が終了し、版組みを行なった。また、それら作業と平行して、遺物の写真撮影、割り付け・原稿執筆を開始した。

平成6年1月には原稿執筆を終了し前年度作成分の原稿と併せ、報告書の印刷に入った。3月末に印刷を完了して報告書を刊行した。

Ⅱ 遺跡の立地と環境

地 形

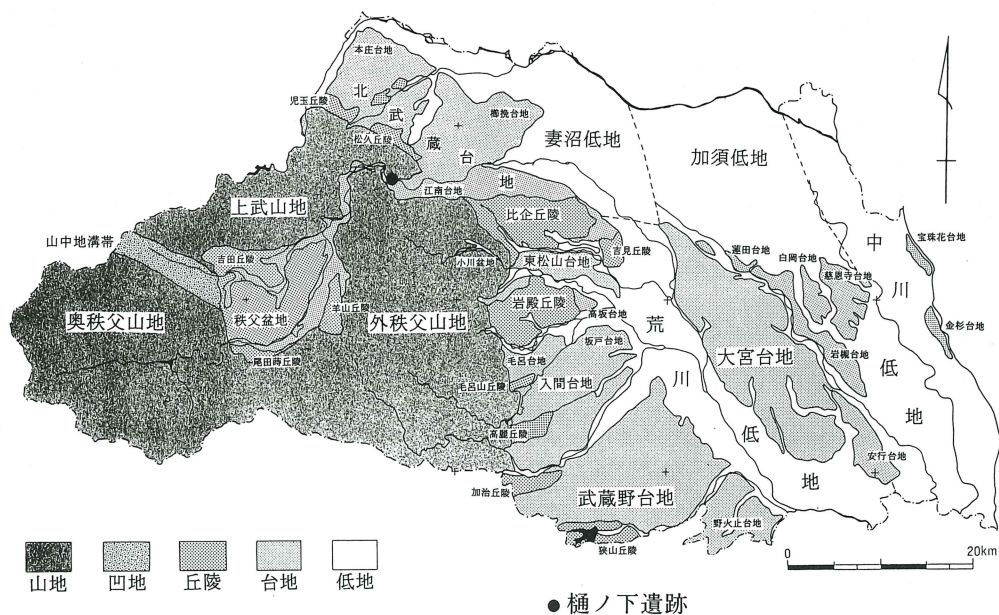
遺跡の南を流れる荒川は、埼玉・山梨・長野三県の県境にある甲武信岳に源をもつ。急峻な奥秩父の山地を抜けた荒川は秩父盆地を経て、遺跡の位置する寄居町周辺で山地に分かれを告げる。寄居町から下流では、両岸に河岸段丘を形成しながら、埼玉県のはほぼ中央部を貫流している。

樋ノ下遺跡は、景勝地として知られる寄居町玉淀に所在する。荒川は、遺跡周辺で大きく蛇行し、遺跡の位置する左岸側では、南に大きく張り出た舌状の地形が形成されている。

地形区分（第2図）によると、荒川によって形成された河岸段丘は大きく3段に区分されており、上位の面からそれぞれ、寄居面Ⅰ、寄居面Ⅱ、下耕地面と呼称されている。

寄居面Ⅰは荒川左岸で特に発達しており、寄居町の西方境の波久礼付近から花園町に続く広大な面積を占めている。地形は東に緩く傾斜し、波久礼付近で110m、樋ノ下遺跡から花園町付近では90m程度の標高をもっている。現在見られる寄居市街地はこの面上に位置している。住宅密集地はまた最も日照時間が長い地域でもあり、縄文時代に集落を営むにも絶好の地形であったことが容易に想像されよう。

寄居面Ⅱは、寄居面Ⅰよりも標高が約2～5m程度低く、荒川の両岸に散在している。樋ノ下遺跡で検出された高低2面の地形は、寄居面ⅠとⅡに相当することは明らかである。樋ノ下遺跡では明瞭な段丘崖が検出されており、比高差は2.8mであった。荒川右岸では、寄居面Ⅰに続いて櫛挽面、江南面を経て山地にいたる地形が観察される。右岸では末野周辺に江南面が見られるが、多く



第1図 埼玉県の地形図

は寄居面Ⅰから山地へと至る地形が観察される。

第3図では、鐘撞堂山から樋ノ下遺跡を経て、小川町に至る約4.7Kmの直線上の地形断面図であるが、右岸での山地から段丘面にいたる地形変化と、樋ノ下遺跡の占地とが明瞭に観察される。

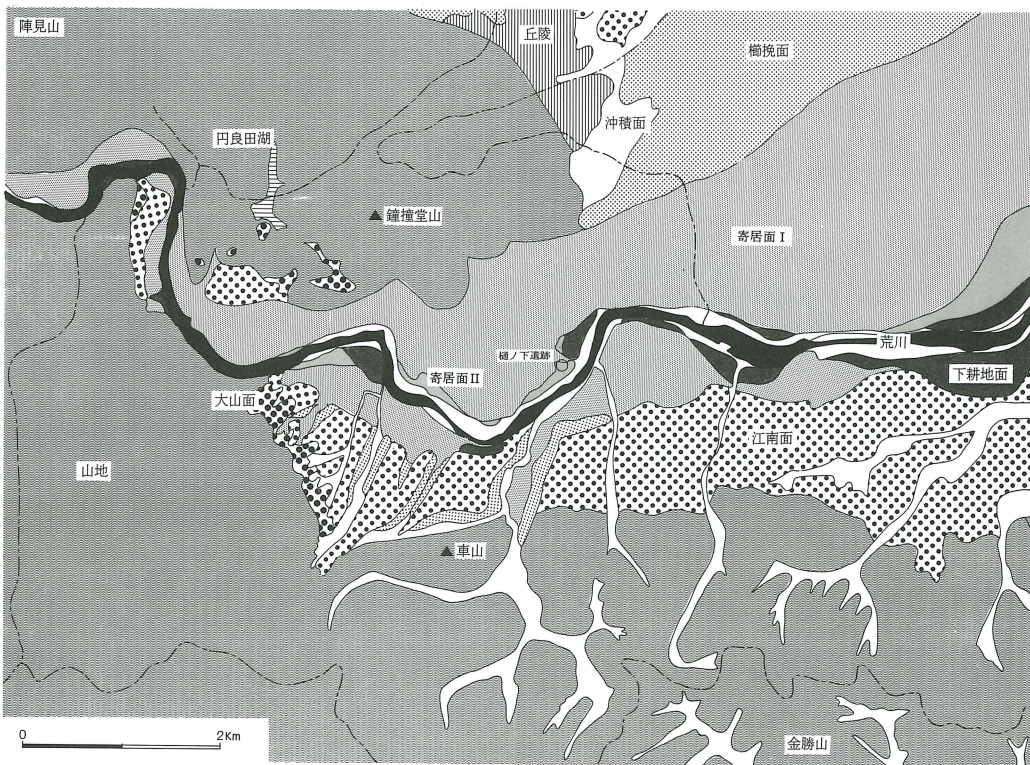
遺跡の分布

樋ノ下遺跡の周辺には、現在までに数多くの遺跡が発見されており、また、調査報告された遺跡数も多い。

第3図に樋ノ下遺跡を中心として、寄居町から川本町にかけての遺跡分布を示した。同図と第2図を比較すると、遺跡の立地状況を明瞭に把握することができる。周辺地域の遺跡は、荒川によって形成された河岸段丘上に濃密に分布しており、左岸では、鐘撞堂山の東から南側にかけて、山地裾野から丘陵、河岸段丘上に特に濃密な分布の傾向が窺える。

荒川右岸でも、左岸とはほぼ同様な傾向を示している。右岸では、荒川に注ぐ支流筋を明確に観察することができ、樋ノ下遺跡の対岸では特に開析された段丘の縁辺部に遺跡の形成が盛んであるように思われる。荒川は寄居町で山地から平地へと流れ、花園町あたりから下流では、広い段丘を形成するようになる。この地域では、段丘上ー寄居面・江南面ーに数多くの遺跡が形成されている。

樋ノ下遺跡では、縄文時代前期から晩期、さらに古墳～平安時代・中近世までの多彩な時代の遺構・遺物が調査された。古墳時代以降の概略については第2冊分に詳細が述べられており、ここでは、旧石器時代から縄文時代にかかわる周辺遺跡について、その概略に触れることとする。



第2図 寄居町周辺の地質図

旧石器時代

旧石器時代の遺跡には、寄居町内では稲荷窪・牛無具利の両遺跡が知られていたが、現在調査中の末野地区に所在する城見上遺跡において、局部磨製石斧が検出された。県内でも調査例が少なく、正式報告が待たれる遺跡である。川本町に所在する白草遺跡（川口1993）は、頁岩製の石器が多量に出土したことで知られている。細石刃を主体に多彩な石器で構成され、石材供給をはじめとして多くの問題が提起されている。

縄文時代

樋ノ下遺跡では、草創期から早期の遺構・遺物を検出することはできなかったが、周辺には概期に関わる良好な遺跡の報告がある。宮林遺跡（宮井1985）からは、爪形文土器や多縄文土器が遺構に伴って出土している。四反歩遺跡（金子1993）では石槍に見るべき資料がある。両遺跡とも早期の遺物が多く出土しており、特に四反歩遺跡では撚糸文系土器や同時期に特徴的なスタンプ形石器が多量に出土した。

縄文時代前期になると、集落遺跡の増加が顕著となる。黒浜式期では、荒川右岸にある南大塚遺跡・甘粕原遺跡（並木1978）が調査されている。両遺跡から出土した土器群は、大型菱形文と呼称されるもので、同様の資料は、群馬県をはじめとする北関東地域からの出土例が多く、この地域との地理的関連をも窺うことができる。

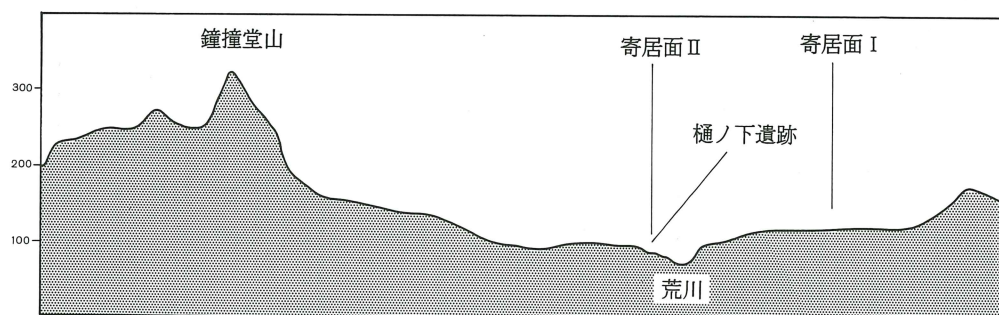
諸磯式期になると、次第に集落の規模も大きくなり、より広い段丘上に遺跡が形成されるようになってくる。樋ノ下遺跡からも住居跡が検出されているが、遺跡の約1.5Km 下流にある塚屋遺跡（市川1983）は、諸磯式期の良好な集落として知られている。諸磯 a 式から b 式にかけて25軒の住居跡が調査され、土器をはじめ多量の遺物が出土した。樋ノ下遺跡から約3 Km 下流には下南原遺跡（鈴木1982）があり、諸磯 b 式の住居跡が調査されている。

諸磯 a 式から b 式期にかけてみられた集落の大規模化は、諸磯 c 式にいたると急速に衰退するようである。この現象はこの地域に限らず、南関東に共通する現象のように思われ、住居を伴わない極めて小規模の遺跡が目立つ。一方、北関東ではこの時期にも大規模な集落の存在が知られている。

樋ノ下遺跡では、この時期の住居跡が1軒検出された。対岸の上郷西遺跡では、2軒の住居跡が検出されているほか、嵐山町尺尻北遺跡（川口1992）でも1軒の住居跡が検出された。塚屋・ゴシン両遺跡からも土壙が検出されているにすぎず、出土土器も断片的である。

中期後半にいたると将監塚遺跡（石塚1986）・古井戸遺跡（宮井1989）のように拠点集落とも呼べるような大規模な集落が営まれるようになる。両遺跡は隣接した環状集落で、近年さらに環状集落が調査されており、総計3つの隣接した環状集落になる可能性が示唆されている。この一方で、比較的小規模な遺跡の増加も著しい。

樋ノ下遺跡の主体である後期には、集落は再び小規模化し、環状構成が衰退する傾向が窺える。また、石材が容易に得られる地域では、敷石住居が盛んに造られるようになってくる。樋ノ下遺跡では、後期の住居跡が13軒検出された。樋ノ下遺跡の約10Km 上流にある皆野町大背戸遺跡（小林



第3図 周辺遺跡の分布図



<寄居町>		22	梅沢遺跡4	44	南大塚遺跡	66	立ヶ瀬古墳群	88	赤浜古墳群	107	長在家遺跡
1	樋ノ下遺跡	23	梅沢遺跡3	45	東国寺遺跡	67	北塚原遺跡	89	牛無貝利遺跡	108	塚原遺跡
2	金尾遺跡	24	梅沢遺跡1	46	道上遺跡	68	塚屋遺跡	90	稲荷窪遺跡	109	沢口遺跡
3	末野第2支群B	25	梅沢遺跡2	47	増善寺遺跡	69	羽毛田遺跡	91	飯塚古墳群	110	大林I遺跡
4	末野第2支群C	26	馬駒の内廬寺	48	東国寺東遺跡	70	日向遺跡	<美里町>		111	大林II遺跡
5	末野第2支群D	27	正龍寺窯跡	49	前耕地遺跡	71	露梨子遺跡	92	一本松古墳	112	見目古墳群
6	末野第2支群E	28	末野第8支群	50	中島遺跡	72	上郷西遺跡	93	猪俣南古墳群	113	川端遺跡
7	末野第1支群	29	藤田古墳群	51	萩和田遺跡	73	上郷A遺跡	94	猪俣北古墳群	114	箱崎遺跡
8	城見上遺跡	30	末野第9支群	52	平倉遺跡	74	旧鉢形中跡遺跡	<嵐山町>		<花園町>	
9	末野第4支群C	31	末野第10支群	53	水川台遺跡	75	西岸谷二遺跡	95	日丸遺跡	115	下南原遺跡
10	末野第4支群B	32	末野第11支群B	54	岩崎遺跡	76	西岸谷遺跡	96	宮下遺跡	116	宮林遺跡
11	末野第4支群A	33	末野第11支群A	55	東遺跡	77	むじな塚遺跡	97	神山遺跡	117	宮台遺跡I
12	末野第6支群C	34	上宿遺跡	56	愛宕山北遺跡	78	上郷古墳群	<川本町>		118	宮台遺跡II
13	末野第6支群B	35	高城遺跡	57	愛宕山東遺跡	79	東原遺跡	98	美ヶ丘遺跡	119	下南原遺跡
14	末野第6支群D	36	金狐遺跡	58	八幡台遺跡	80	小園古墳群	99	焼谷遺跡	120	台耕地遺跡
15	末野第6支群E	37	末野第12支群	59	上の原遺跡	81	常楽寺南遺跡	100	梅現堂遺跡	121	黒田古墳群
16	末野第6支群A	38	末野第13支群	60	平林遺跡	82	昌国寺遺跡	101	権現堂北遺跡	122	上南原遺跡
17	末野第7支群C	39	桜沢小西遺跡	61	上の原遺跡	83	伊勢原遺跡	102	上本田遺跡	123	西上遺跡
18	末野第7支群C	40	大塚山遺跡	62	大塚山遺跡	84	伊勢原古墳群	103	上大塚遺跡	124	東大塚古墳群
19	末野第7支群A	41	末野第14支群	63	ゴシン遺跡	85	塚越遺跡	104	円阿弥遺跡	125	東大塚遺跡
20	末野第7支群B	42	秋山遺跡	64	甘粕山遺跡	86	宮の前遺跡	105	北森場北遺跡	126	橋屋遺跡
21	梅沢遺跡5	43	下小路遺跡	65	町田耕地遺跡	87	庚申塚遺跡	106	白草遺跡	127	小前田古墳群

他1987)からは、11軒の住居跡や配石土壇などが検出されており、樋ノ下遺跡とともに、現在のところ、この地域では最も大きな集落といっても良いだろう。大背戸遺跡は、樋ノ下遺跡とほぼ同時期に営まれた集落で、遺跡の立地や検出された遺構・遺物共に、樋ノ下遺跡と酷似しているといっても過言ではない。奥秩父の玄関口である荒川村姥原遺跡(栗島1988)からも中期末葉の敷石住居跡が報告されている。

樋ノ下遺跡の対岸では、露梨子(並木1978)遺跡から柄鏡形住居跡が検出された。出土土器から、樋ノ下遺跡よりもやや古い時期が想定される。露梨子遺跡から約1 Km 南西にある東遺跡(梅沢1973)は、樋ノ下遺跡とほぼ同時期の敷石住居跡が調査され、敷石下から埋甕が出土した。

近年の豊富な調査事例によれば、敷石住居跡は石材が豊富な地域にあってはむしろ普遍的な存在であったようである。

樋ノ下遺跡は、後期初頭から前葉にかけて営まれた集落であるが、以降は後期後半にいたるまで遺構の存在を確認することはできない。再び遺構が形成されたのは曾谷式期に至ってからである。

曾谷式期の遺構は、周辺地域では今のところ確認することはできない。大背戸遺跡では、まとまった土器の報告がある。岡部町原ヶ谷戸遺跡(村田1993)でも多量の遺物が出土しているが、遺構には伴っていない。後期末葉以降では、低地帯に新たな場を求めたためか、この地域における遺跡の形成は急速に衰退するようである。

古墳時代以降

樋ノ下遺跡周辺の歴史的環境と周辺遺跡については、すでに一般国道140号線バイパス建設事業にともなう既刊の3報告(市川1983、黒坂他1985、瀧瀬1986)に詳述されているので、参照願いたい。また、第1分冊においても概観しているので、ここでは樋ノ下遺跡で検出された古墳・平安時代の遺構に関連した周辺の遺跡と近年の発掘成果を中心に概略を示すにとどめたい。

樋ノ下遺跡周辺の荒川中流域は、古墳時代後期において両岸に発達した河岸段丘上に、複数の古墳群が形成された。左岸の寄居面には、寄居町藤田古墳群(寄居町1984)、寄居町から花園町にかかり、かつては90基以上が存在したといわれる小前田古墳群(瀧瀬1986)、花園町黒田古墳群(塩野・小久保1975)、川本町見目古墳群(塩野1981)、熊谷市三ヶ尻古墳群(小久保他1983)などが知られ、古いものでは6世紀前半に造営が開始され、7世紀末まで存続したものといわれている。右岸には、寄居町立ヶ瀬古墳群、上郷古墳群(寄居町1984)、小園古墳群、赤浜古墳群(寄居町1984)、川本町箱崎古墳群、塚原古墳群、鹿島古墳群(塩野他1972)等が存在する。

樋ノ下遺跡周辺には、従来古墳分布はまったく認められておらず、今回の調査でも調査区は完全な平坦地となっており、その存在は予測できなかった。これは寄居地区の荒川流域に、周知されない古墳群が分布する可能性を示しているといえよう。

また、樋ノ下遺跡周辺の左岸に分布する古墳群では、群中に模様積みの石室が混在する例が多いが、樋ノ下遺跡では川原石を用いた布積み石室に限られる。また、左岸の古墳群では玉類をはじめとした装身具類の出土が一般的であるのに対して、樋ノ下遺跡では玉類がほとんど検出されなかった。このような様相は、7世紀後半を中心とする右岸の鹿島古墳群にみとめられる。

こうした古墳群の濃密な分布に対して、古墳時代の集落遺跡は調査例が少なく、しかも非常に小規模である。古墳時代後期の集落遺跡では、寄居町内では塚田遺跡・東B地点において3軒の住居跡が検出された（寄居町1984）にとどまり、周辺を概観しても、右岸の江南面において、甘粕原遺跡の1軒、東遺跡の1軒（寄居町1984）などをあげられる程度である。従来、多くの古墳群を成立させる基盤としての大規模集落の存在が予想されてきたが、現在のところ有力な手がかりはなく、古墳群の形成過程を含めて今後に期するところが大きい。

7世紀後半の寄居町には馬騎の内廃寺（寄居町1984、高橋他1982）が建立され、7世紀末から8世紀にいたると末野窯跡群を中心とした大窯業地帯として繁栄する。末野窯跡群は、南比企窯跡群、東金子窯跡群、南多摩窯跡群とならんで武蔵4大窯跡群として著名である。末野窯跡群には、現在のところ91基以上の窯跡の存在が知られており、およそ7世紀末から10世紀代に操業したとされている（寄居町1984）。窯跡の分散期にあたる10世紀には正竜寺窯跡群（寄居町1984）や桜沢窯跡群、右岸の折原窯跡群（寄居町1984）などが操業し、末野窯跡群中心部との関係が問題となろう。末野窯跡群周辺には、城見上遺跡B地点（寄居町1984）において、粘土生地を出土した須恵器工人の居住地と思われる住居跡が検出されている。

近年の調査では、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が平成4年度に調査をおこなった城見上遺跡で多数の粘土採掘坑が検出され（鈴木1993）、同年寄居町が実施した末野遺跡の調査で乾燥中の瓦および粘土の生地を出土した住居跡が検出されるなど（井上・石塚1993）、末野窯跡群の操業の様相が解明されつつある。

奈良・平安時代の集落遺跡は、多くが荒川右岸の台地、用土、末野地区に集中しており、南柏田遺跡、今市遺跡等（寄居町1984）が知られている。10世紀代のその他の集落遺跡では、荒川左岸に位置し製錬炉および多量の鑄造製品を出土した台耕地遺跡などがある。

参考文献

- 町田二郎他 1983「寄居町の自然」『寄居町史資料集』地学編 寄居町教育委員会
川口 潤 1993『白草遺跡Ⅰ・北篠場遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第129集
宮井栄一他 1985『大林Ⅰ・Ⅱ 宮林 下南原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集
金子直行 1993『四反歩遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集
並木 隆他 1978『甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡』 埼玉県遺跡調査会
市川 修 1983『塚屋・北塚屋』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第25集
鈴木敏昭 1982『下南原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第8集
石塚和則 1986『将監塚-縄文時代』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集
宮井栄一 1989『古井戸-縄文時代』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
栗島義明 1988『姥原遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第72集
梅沢太久夫 1973『東遺跡』 寄居町教育委員会
井上 肇・石塚三夫 1993「寄居町末野遺跡の瓦製作工房住居の調査」『第26回遺跡発掘調査報告会発表要旨』
黒坂禎二他 1985『北塚屋（Ⅱ）』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第48集
小久保 徹他 1983『三ヶ尻天王・三ヶ尻林（Ⅰ）』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集
酒井清治 1984『台耕地（Ⅱ）』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集

- 塩野 博ほか 1972『鹿島古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査報告第1集
- 塩野 博・小久保徹 1975『黒田古墳群』
- 塩野 博 1981「見目古墳群とその出土遺物」『埼玉考古』第19集
- 鈴木孝之 1993「寄居町末野遺跡の調査」『第26回遺跡発掘調査報告会発表要旨』
- 高橋一夫ほか 1982「寄居町馬騎の内廃寺」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』 埼玉県立歴史資料館
- 瀧瀬芳之 1986『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集
- 寄居町教育委員会 1984『寄居町史』原始・古代・中世資料編

Ⅲ 遺跡の概観

樋ノ下遺跡は、荒川によって形成された河岸段丘上に位置する遺跡である。遺跡の位置する段丘は、標高が86m から90m で、おおむね2段の段丘面が認められた。遺跡の南側を流れる荒川は、遺跡周辺で大きく蛇行し、舌状の地形を造り出している。遺跡の形成にはまさに絶好の地形であったといえよう。

地質区分図によると、段丘は寄居面Ⅰ・Ⅱに区分されており、遺跡の地形測量の結果と照らし合わせると、遺跡は段丘両面にわたって形成されていたことが明らかとなった。調査範囲での、標高が88～90m を前後する段丘の上位面が寄居面Ⅰに、標高が87m を前後する段丘の低位面が寄居面Ⅱに該当するようである。両面には約2m の段丘崖が形成されており、段丘間にはゆるい窪地状の地調査区の北端では緩やかな傾斜を示していた。

樋ノ下遺跡からは、縄文時代をはじめとして古墳・平安そして中～近世までの遺構・遺物が検出された。縄文時代を除く他の時代については第2冊文に詳細が報告されているので、ここでは縄文時代の遺構の概略について触れることとする。

寄居面Ⅰの遺構

調査区で検出された段丘の上位面である。この面は遺構がシルト質の砂層上に構築されており、後世に著しい攪乱を受けていたことから、遺構の遺存状態は良好とはいえなかった。諸磯b式とc式の住居が各1軒検出された。後期の遺構はD～G-10～14グリッドに集中していた。この地区は寄居面Ⅰから寄居面Ⅱにかけて緩い傾斜を示しており、標高87m の等高線を境に緩い窪地状の地形を呈していた。このためか大きな攪乱を受けておらず、遺構の遺存状態が比較的良好であった。

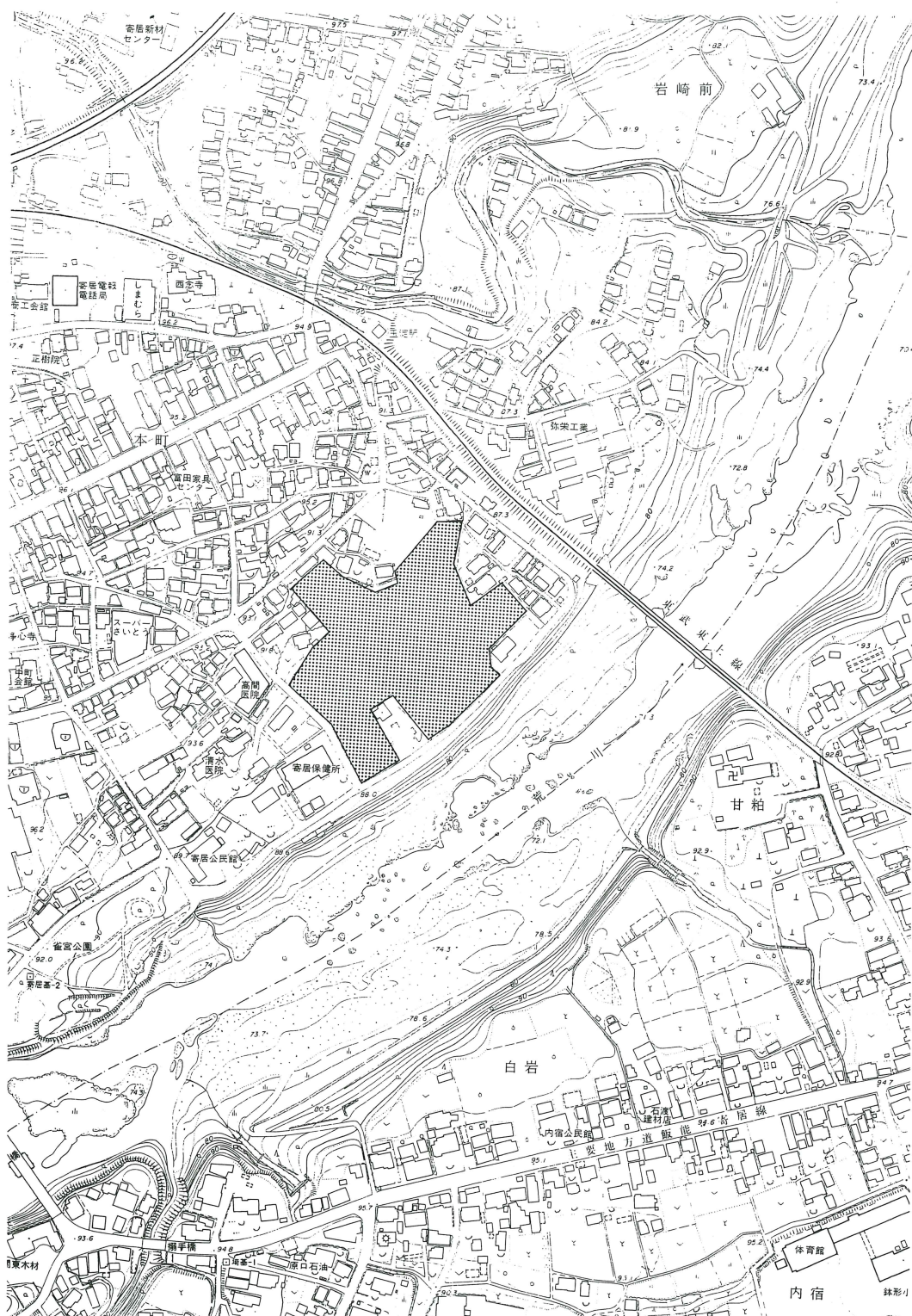
寄居面Ⅰでは、特に南北9列以西では攪乱が極めて広範囲に及んでおり、攪乱が及ばなかった部分では、住居跡が検出される傾向が窺えた。従って、遺構全体図における分布状態は、本来はより密度が高かったことは充分に考えられる。しかしながら、寄居面Ⅱの分布状況からも推察されるように、住居跡、土壇ともにある集中傾向をもって偏在する傾向が窺えるため、寄居面Ⅰにおいても同様の傾向を推定するに無理はないように思われる。北端部でまとまっていた第1号～第4号、及び第89号土壇はこのような傾向を示すものと考えられる。

調査区には、2箇所の台形様に突出した調査箇所がある。この部分も寄居面Ⅰに相当するが、浅い沢筋の痕跡が確認されており、近世の石垣遺構は、この沢筋を改修するために築かれたものとも考えられる。縄文時代中期中葉の土器はG-4～5グリッドでまとまって出土したが、他からは検出することはできなかった。

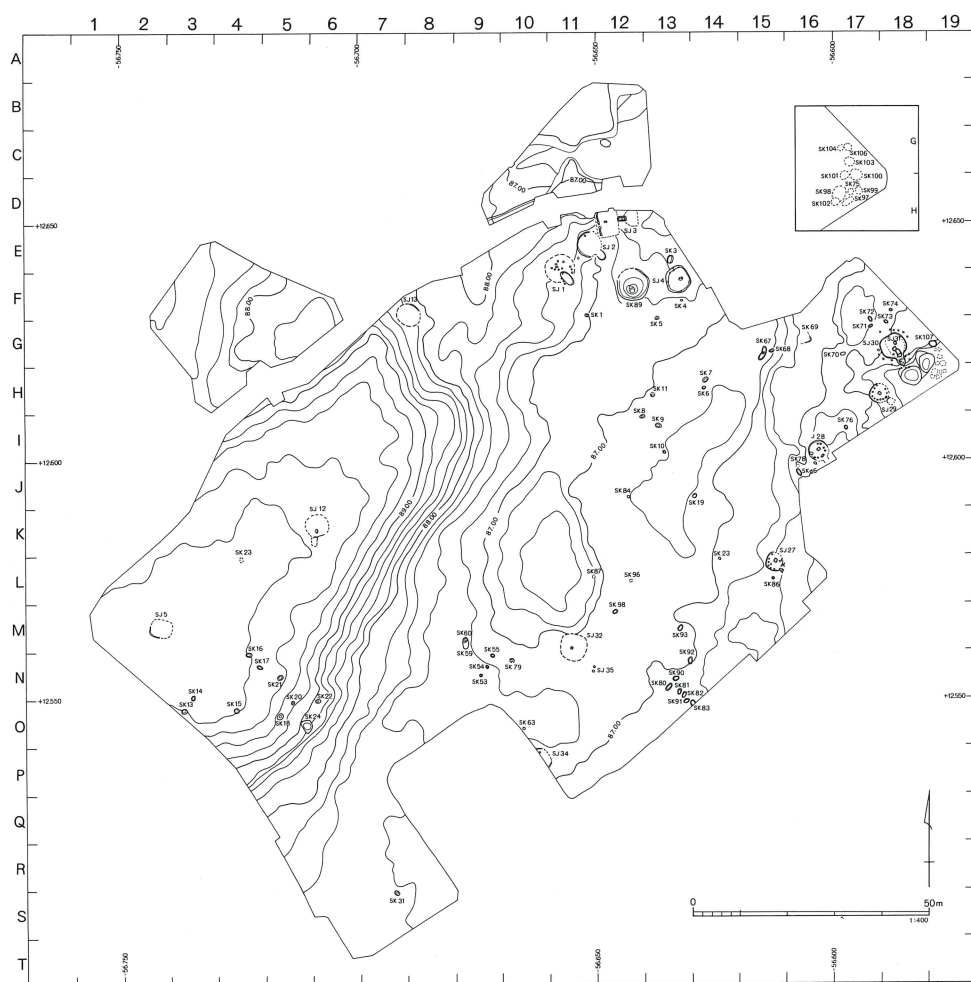
寄居面Ⅰで検出された住居は、4号住居跡を除き堀之内1式であった。また、N-0-3～6グリッドに集中した土壇は、出土土器から後期初頭に位置付けられた。

寄居面Ⅱ

この面では南北15列以東で良好な住居跡が検出された。住居跡は標高が87m を前後する比較的平坦な場に構築されていた。15列以西で住居の検出例が少なかったのは、古墳の築造によって破壊されたことも要因の一つとして挙げられよう。住居跡は、上面と同様にいわゆる「柄鏡形敷石住居



第4図 遺跡周辺の地形



第5図 樋ノ下遺跡遺構全体図

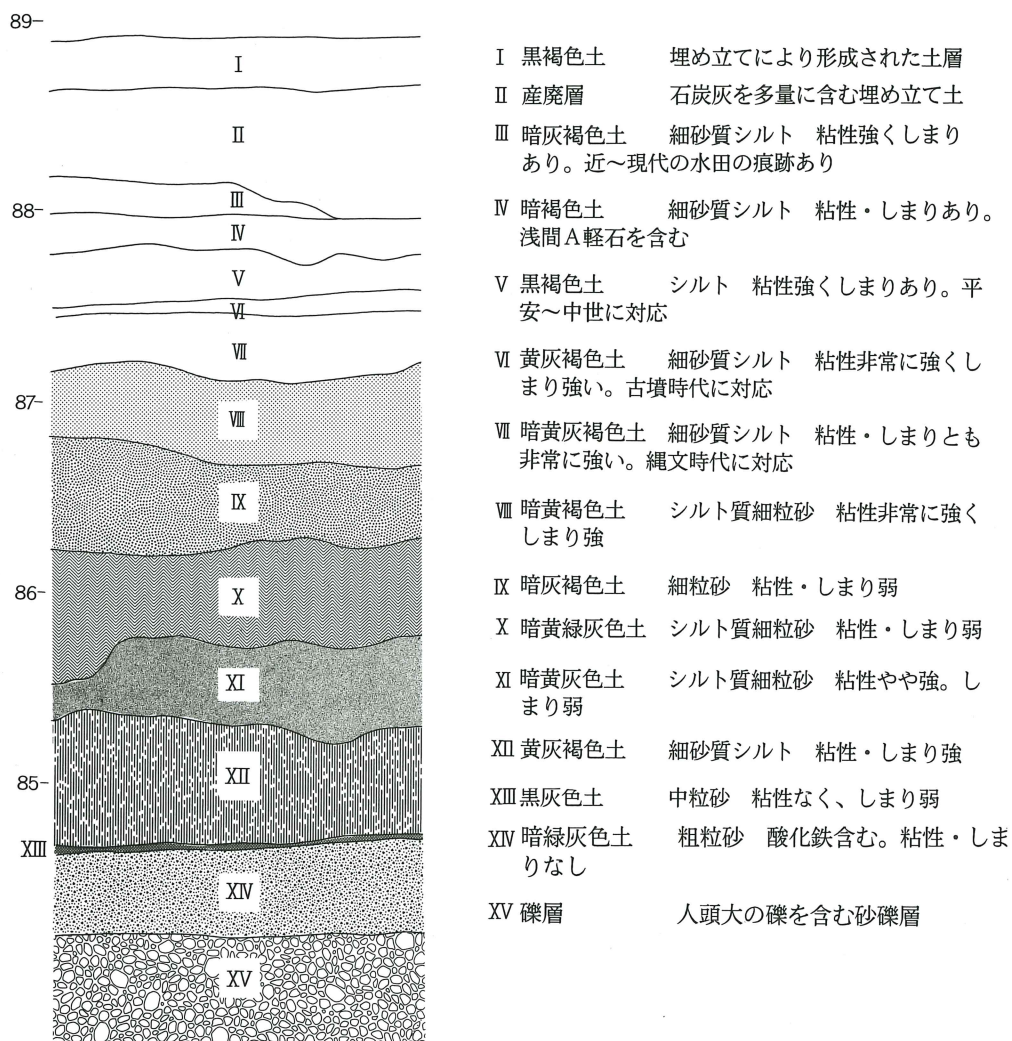
跡」で構成されていた。この面で検出された住居は全てが後期初頭に位置するものであり、上面の住居とは時期差が存在する。

両面の遺構分布に共通することだが、住居と土壙とは殆ど重複することなく、比較的まとまりをもって構築されていた。上面との間には、緩い傾斜をもった窪地が形成されており、この斜面部を中心として寄居面Ⅰとの斜面部にかけて、埋設土居を伴う土壙が検出された。住居跡は土壙の外側をめぐるように構築されていたようである。

配石を伴う土壙群が2地点で検出された。N-13グリッドとF~G-19グリッドの2地点である。前者は住居跡と同様に荒川寄りの緩斜面部にまとまっていた。後者は標高が86.2mで寄居面Ⅱからは一段下がった面に位置していた。この面は礫層に相当し、寄居面Ⅱでの試掘でも、ほぼ同じ標高で礫層が始まることから明らかである。この面がさらに下位の段丘面に相当するか否か定かではない。或いは沢筋の開析作用によるものかもしれない。おそらく本来の礫層の石を利用して遺構を構築したものと推定される。

遺跡は、河岸段丘という制約された地形にありながらも、その地形をうまく利用し、全体として

は環状に近い集落であったと考えられる。



第6図 基準土層

Ⅳ 樋ノ下遺跡の調査

1 縄文時代の遺構と遺物

樋ノ下遺跡からは、縄文時代前期諸磯b式から、曾谷式にかけての住居跡や配石土壇、屋外埋設土器等が検出された。すでに第Ⅱ章でふれたように、遺跡は荒川左岸にひらけた低位の河岸段丘上に立地している。調査区域内で、段丘は上下2段に分かれるが、遺構は両段丘上に構築されている。

総数13軒の縄文時代の住居跡のうち、前期後半諸磯b式とc式期に属するものが各1軒検出されている。同時期の遺構・遺物は下位段丘面には見られない。従って、当時はなお数軒の住居が構築されていた可能性も充分考えられる。

遺跡の中心となる時期は、縄文時代後期初頭から後期前葉堀之内式期にかけてであり、この時期の住居跡は総数13軒が検出された。住居跡は段丘遷移点に形成された、後背地状の地形を挟んで、上下両段丘面に構築されている。また、同時期の土壇・屋外埋設土器なども検出されたが、分布には住居跡と同様にまとまりがあり、住居跡と重複するものは稀である。特に、屋外単独埋設土器は下位段丘面後背地を挟んだ斜面地に構築されている。屋外埋設土器も時的には住居跡と共通し、後期初頭から堀之内1式にかけてが主体である。

曾谷式期の遺構が検出されたことは特筆に値する。この時期の土壇には第86、第89号土壇がある。前者は8号墳の築造によって破壊されているが、配石を伴う土壇であった可能性が高い。後者からは多量の遺物が出土しており、時的にも極めてまとまった資料といえよう。

(1) 前期の住居と遺物

前期の遺構は上位段丘面である寄居面Ⅰの中央部と西端部で確認された、第13号、5号の2軒の住居跡のみである。攪乱が著しかったために失われた遺構があるものと考えられるが、下位面である寄居面Ⅱからは当該期の遺物が検出されなかったことや、遺構の分布状況から見ても、概期の遺構は、後期とは占地をやや異にしていることが想定される。

第13号住居跡 (第7図～第8図)

この住居跡は、F～G-7～8グリッドで検出された。寄居面Ⅰで検出された住居では、調査区のはほぼ中央部に位置している。住居が確認された地点は、周辺部も含めて工場建築によるためか、著しい攪乱を受けていた。住居跡は、標高が88～88.4mの段丘の緩斜面に構築されており、掘り込みが浅かったことも相まって、住居の大半が確認不可能であった。住居跡は東壁から南壁コーナーにかけて床面の中央部までが確認されたにすぎず、炉も失われていた。遺構の残存状態から、隅丸長方形の平面形態が推定される。

住居跡は壁が確認面から10cm程度掘込まれており、床面はほぼ平坦である。壁から20～50cm程度内側からは、床面および床面からやや浮いた状態で、諸磯b2式の深鉢形土器や有孔罌付土器破

片、礫などが出土した。

遺物を取り上げた後に、床面の精査を行なったが、住居跡が構築された地山はシルト質の砂層であり、覆土との同化が進行していたために、柱穴を確認することができなかった。遺存状況から、炉は攪乱によって失われたものと思われる。

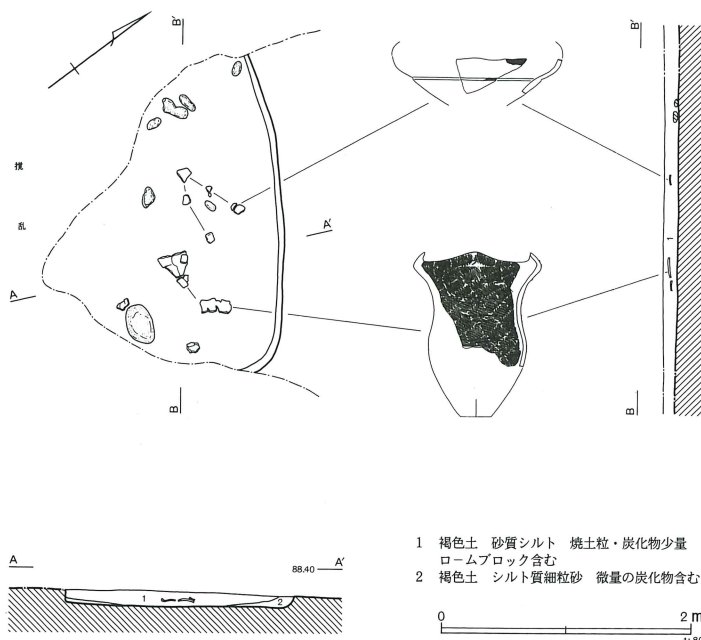
第13号住居跡出土遺物

第13号住居跡からは、器形復原が可能な深鉢形土器と有孔鏝付土器と考えられる大型破片が出土した。第8図1は諸磯b2式新段階の深鉢形土器である。住居のコーナー近くで近接して

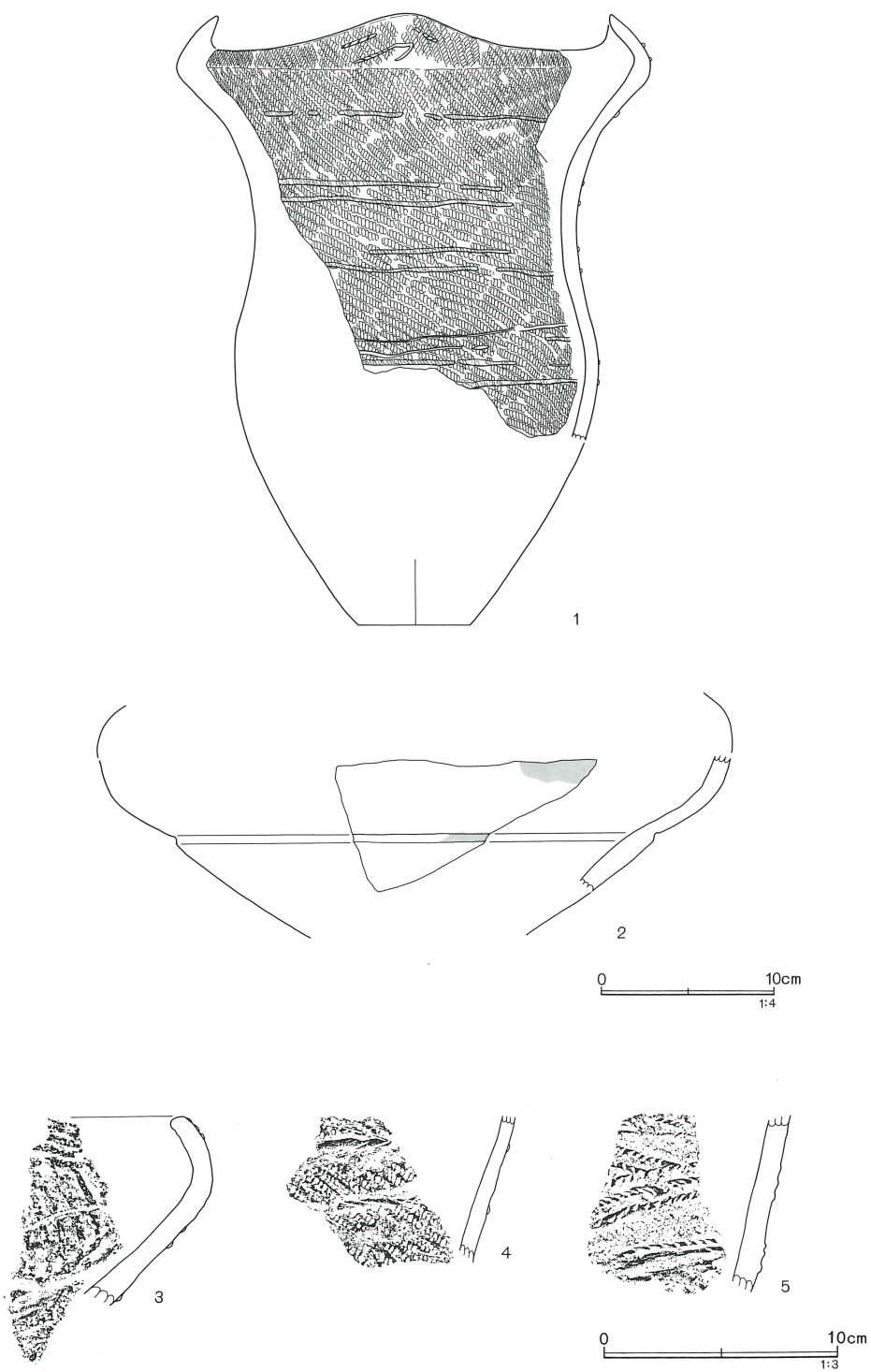
検出された大型破片で、胴下部と器形の約半周が失われていた。器形は胴下部で張り、すばまった頸部から直線的に開く深鉢形土器である。「く」の字状に屈曲する特徴的な口唇部形態をもつが、屈曲部が文様帯として区画されておらず、b2新段階の典型的な構成といえよう。地文には1段3条燃りのRL原体が胴部で斜方向、頸部から口縁部で横方向に施文されている。文様は細い粘土紐による浮線文で、胴部では2条を1単位として器面をめぐる。口縁部文様は、剥離が著しく、把握し難いが、波頂下に蕨手文が構成される典型的な文様と思われる。胴部の浮線文上には地文と同一原体によって、縄文が回転施文されている。口縁部の浮線文上には、刻みが加えられている。口径22.5cm、現存高24.3cm、推定器高32.4cmである。

同図3は口縁が丸味を持ち屈曲が弱く、比較的幅の広い文様帯を持っていることから、諸磯b2古段階の特徴を備えているといえよう。同図4～5も共にb2式古段階の様相が窺える。RLの縄文地上の浮線文には斜方向の刻みが加えられている。蕨手状モチーフ末端の弧線であろう。特に5は暗褐色の器面と灰白色の浮線文との色調が対照的である。

同図2は有孔鏝付土器と考えられる。床面から浮いた状態で出土した。破片であり、器形の約7割が失われている。底部から直線的に開き、段を境に上部が強く内湾している。砂粒が多く含まれるが、精選された胎土であり、暗褐色で小礫を多く含む1とは対照的である。暗灰褐色を呈し、器面は丁寧に磨かれている。部分的に赤彩が残っており、おそらく顔料が全面に塗彩されていたものと推定される。現存高7.5cm、最大径36cmである。



第7図 第13号住居跡



第 8 図 第13号住居跡出土土器

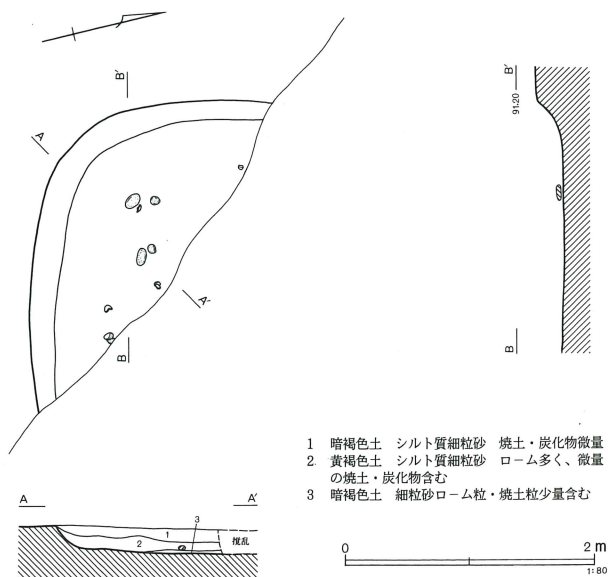
第5号住居跡（第9図～第10図）

調査区の北西端部、M-2
グリッドで検出された諸磯c
式期の住居跡である。住居跡
は、寄居面Ⅱにあり、標高が
89.80mの段丘平坦部に構築
されていた。周辺部を含めて
攪乱が著しく、隅丸と思われ
る住居の西壁コーナー部分が
わずかに残存していたにすぎ
ない。壁面は確認面から約
20cm前後である。

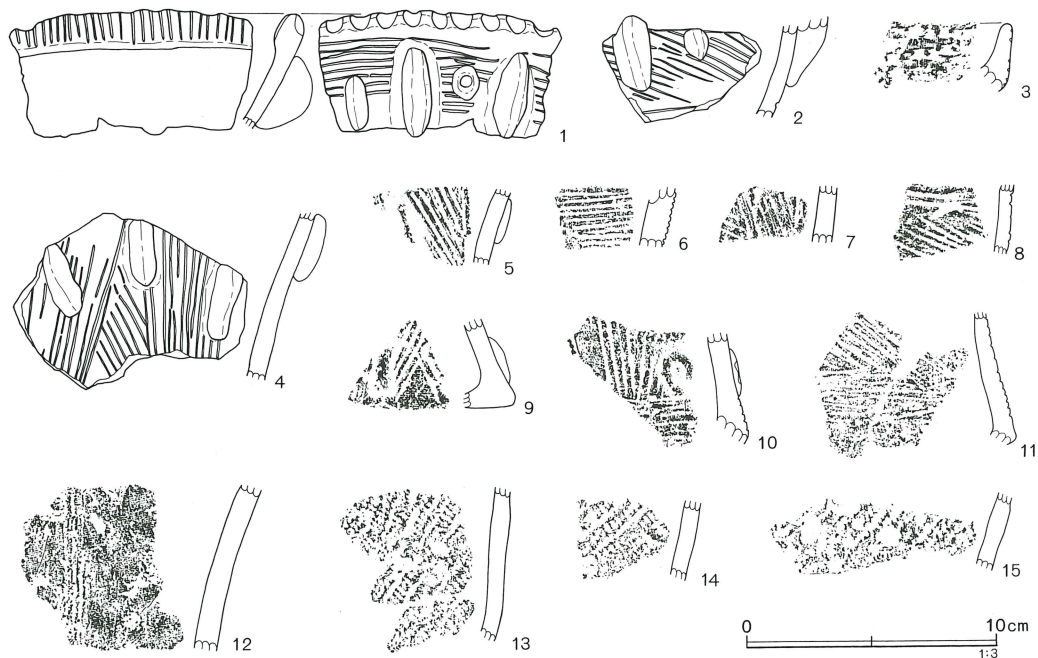
住居跡は砂層上に構築され
ていたために、覆土との混土
が進行し、床面の検出が困難
であっあ。わずかに残された

覆土第3層にはロームと焼土粒混入しており、或いは貼り床が施されていたとも考えられる。第3
層を取り除くと、床面は中央部に向かって緩く傾斜していた。

現存部分を調査後に周辺部分の精査を行なったが、予想以上に攪乱が深く、炉跡・柱穴等は検出



第9図 第5号住居跡



第10図 第5号住居跡出土土器

できなかった。遺物は、床面および覆土内から諸磯c式土器破片が少量出土している。

第5号住居跡出土遺物

第5号住居跡から出土した遺物は、全てが諸磯c式古段階に比定される土器である。口縁部2点を含めて総数18点が出土した。第10図1・3が口縁部である。口唇上に刻みを持ち、肥厚した口唇内面にも縦方向に密な細沈線が加えられている。施文具は文様と考えられる器面の沈線と同一工具である。器面には大小の棒状浮文とボタン状浮文をもち、後者には円形刺突が加えられている。2・4～11も同様の構成をもつ破片で2は口唇直下と思われる。斜行沈線文が施文されている。3は結節沈線が施文された口縁部破片である残存部位が少ないため明確ではないが、諸磯c式のバリエーションであろう。12は多載竹管による縦沈線が施文された胴部破片、13～15は一段三条と考えられるLR縄文が施された胴部破片である。

(2) 後期の住居と遺物

後期の住居跡は、不確実なものも含めると13軒検出された。このうち10軒がいわゆる「柄鏡型敷石住居跡」である。住居跡は寄居面Ⅰ～Ⅱで検出されたが、出土遺物からみると、寄居面Ⅰで検出された住居跡が堀之内1～2式に属し、時期的に新しい。

第1号住居跡（第11図～第12図）

寄居面ⅡのE～F-10～11グリッドで検出された。周囲は著しい攪乱を受けていたため、住居跡の全容を検出することができなかった。また主体部の壁が検出できなかったが、柱穴等は、攪乱が浅かったために遺存していた結果であり、壁は失われていた。攪乱が及ばなかった部分からは、住居跡に伴う柱穴とともに、隅丸長方形を呈する住居の張り出し部が検出された。

柱穴は計16個が確認できた。張り出し部の両側からほぼ円形にめぐっていたものと考えられる。このうち、主柱穴と考えられるP7・P9・P14・P16は、径が50～60cmと、他の柱穴に比較して一回り大型である。深さは確認面から30～50cmで、径の大小による深さの違いはない。

張り出し部の両側に検出された柱穴は、後述する第30号住居跡と同様に、竪穴外柱穴であった可能性も考えられる。主体部では柱穴が二重にめぐっていることから、住居は建て替えあるいは重複していた可能性もある。張り出し部で柱穴に切られた炉が検出されたことから上記の想定が首是されよう。

張り出し部は、径が3.5m×1.3～1.6mの隅丸長方形で、確認面からの深さは平均10cmと極めて浅い。砂岩と結晶変岩の敷石が検出された。敷石は、張り出し部の中央部と南西端部に設けられたピットの部分を避けるように配置されていた。検出状況から、ピットは住居跡に伴うものと考えられた。さらに敷石を除去し、敷石下を調査したところ、掘り込みが検出され、底面から柱穴によって破壊された炉跡が検出された。従って、敷石は新しい時期の住居跡に伴うことが明らかとなった。敷石下の張り出し部の掘り込みは、確認面から最深部で10cmを測り、東西断面形は皿状を呈していた。ほぼ敷石の上端のレベルと一致した深さであるといえよう。底面と敷石間は、暗褐色土1層が堆積しており、新しい住居を構築する際の貼り床と考えられる。



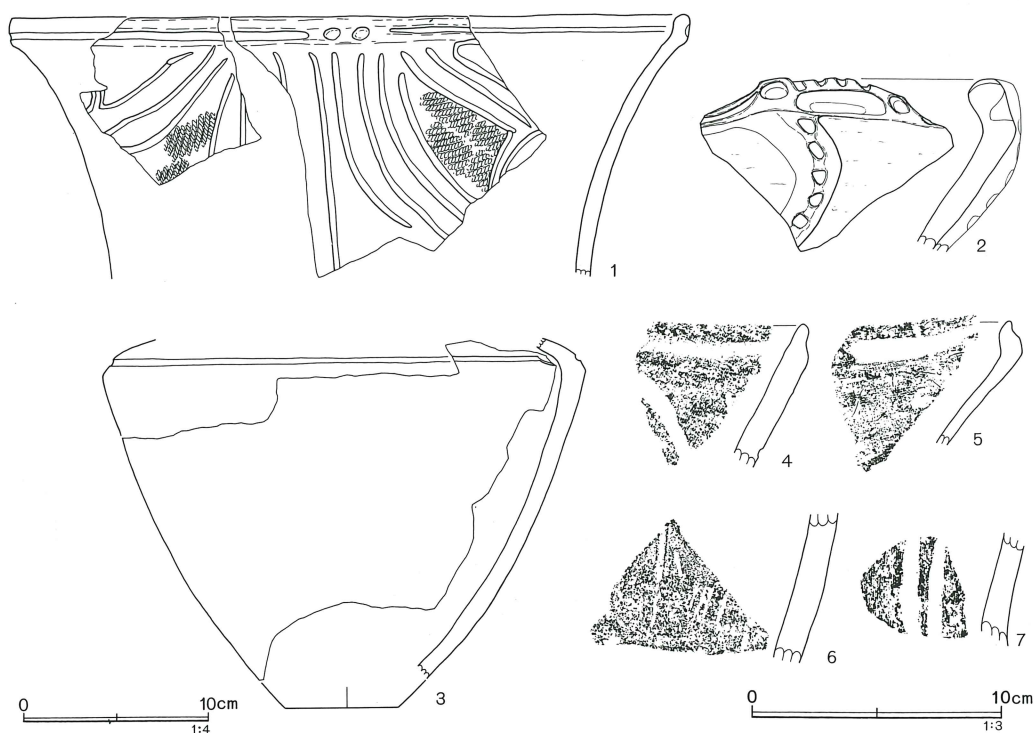
第11図 第1号住居跡

住居主体部のピットの深さは、確認面から50～60cmを測り、住居主体部の柱穴とほぼ一致した深さを備えている。

本住居からは、炉跡と張り出し部から器形復元可能な堀之内1式土器が出土した。主体部からは遺物は出土しなかった。

第1号住居跡出土遺物

第12図1は住居跡張り出し部で出土した大型破片から器形復元した。直立する幅狭い口縁部文様帯を持ち、胴部が外反気味に開く深鉢形土器である。口縁部には1対の円形刺突を挟んで沈線がめぐり、胴部は3条の沈線で縦区画され、区画間には2条を1単位とする密接施文された曲線的な沈線文が施文されている。破片が限定されているため、文様構成は不明である。沈線間にはLR縄文



第12図 第1号住居跡出土土器

が充填施文されている。推定口径36cm、現存高14cmである。

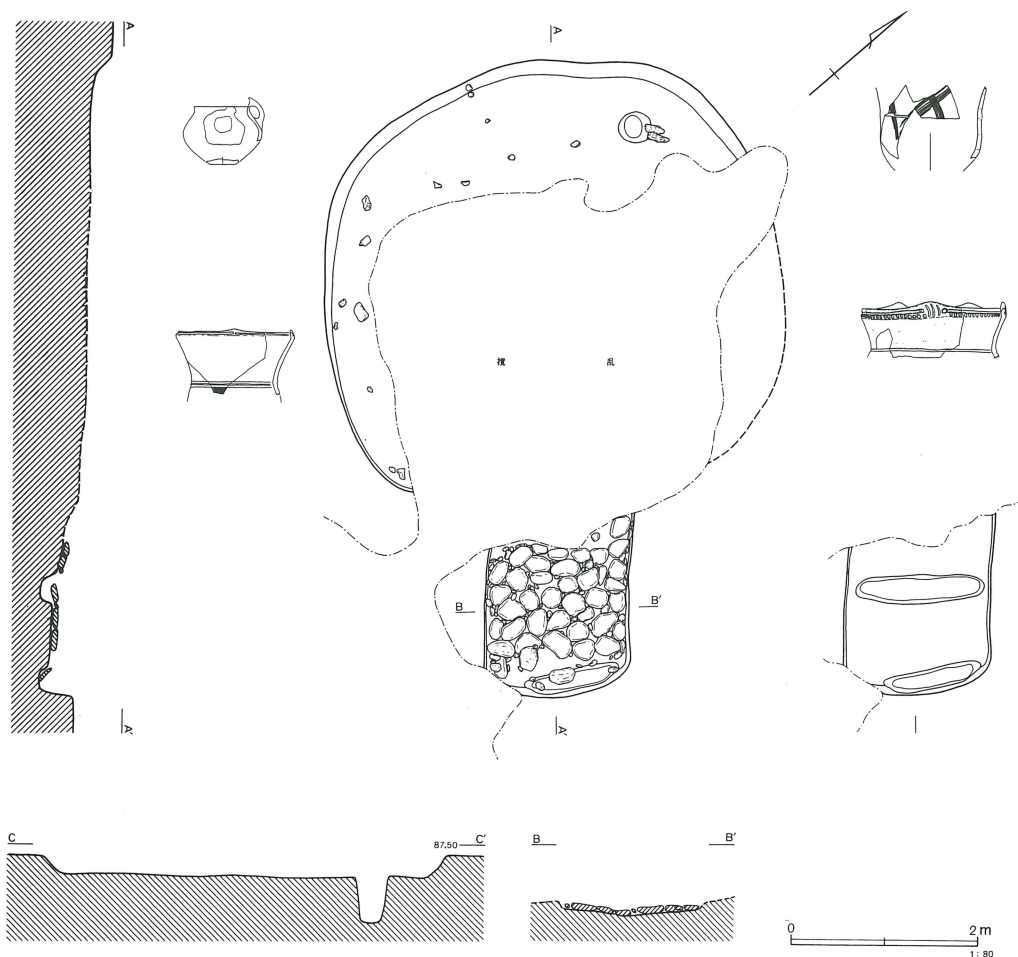
同図2～7は沈線文の土器群である。2は口唇上の突起から頸部無文帯にかけて弧状の隆帯をもつ突起および隆帯上には刺突が付加される。

3はピットによって破壊された炉から出土した。器形の半周が失われている。胴部以下が無文で、屈曲部で器面をめぐる沈線が文様帯を区画しているものと考えられる。沈線を境に頸部が外反する器形が想定される。文様は不明である。現存高18.5cm、最大径26cmである。

4～5は弱い波状口縁を呈する。6～7は同種の胴部に相当し、沈線のみで文様が描かれる土器群である。

第2号住居跡（第13図～第17図）

第2号住居跡は、調査区北東端-E-12グリッドーに位置し、第1号第住居跡の北東側に隣接し、後述する第3号住居跡とは重複関係を有していたと考えられる。住居跡は寄居面Ⅱから寄居面Ⅰにかけての、標高87～87.4mの緩斜面から平坦部に構築されていた。第1号住居跡と同様に、張り出し部が斜面に向かって位置しており、樋ノ下遺跡のみならず、柄鏡形住居跡の特徴であろう。住居跡は、主体部から張り出し部にかけて広範囲に攪乱を受けており、炉跡や柱穴の殆どが失われていた。現存部分を調査した後に攪乱部分を精査したが、予想以上に深く、遺構を検出することができなかった。北壁には緩い屈曲がみられることから、後述する第28号、30号住居跡のように、五



第13図 第2号住居跡

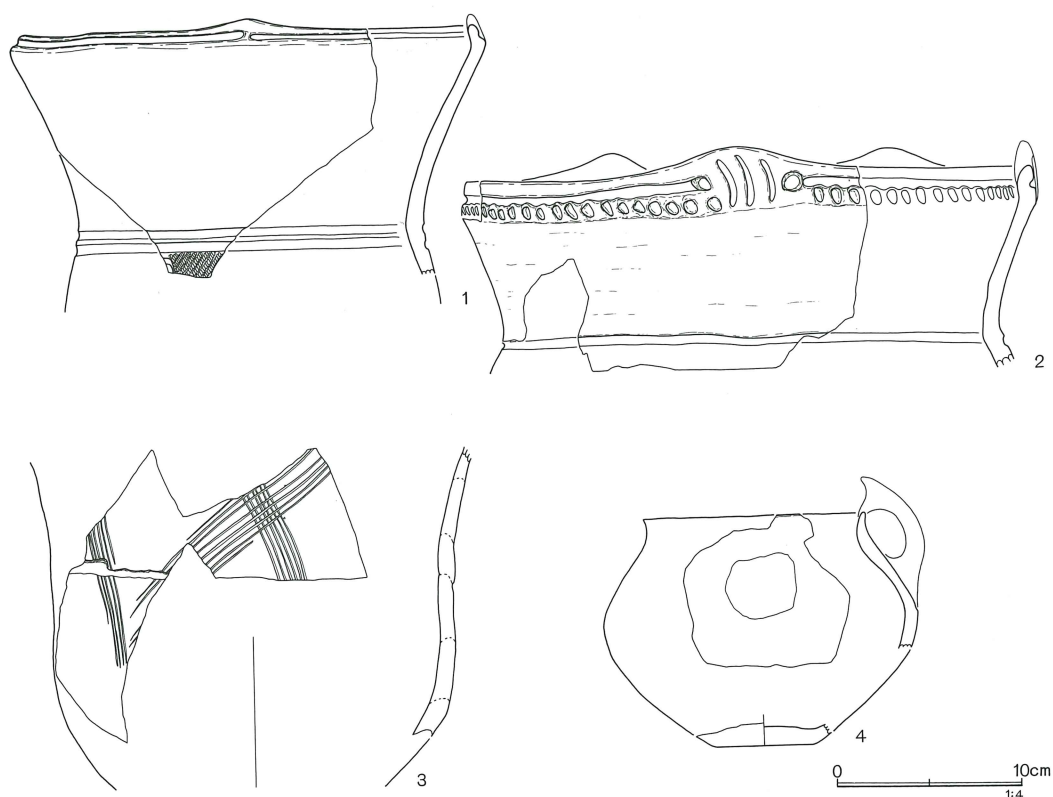
角形を呈する主体部と長方形の張り出し部を持っていたものと思われる。

住居跡主体部は、現存した西壁際では、確認面から20cm程の深さに掘り込まれており、ほぼ平坦な床面をもっていたものと推定される。主体部では、わずかに礫が検出された程度で、敷石を示す痕跡は見られなかった。

張り出し部は壁から中央部にかけて若干落ち込んでおり、扁平な河原石が密に敷かれていた。敷石間は、さらに細かな河原石で丁寧に充填されていた。このような張り出し部の敷石は、第2号住居跡以外にはみられない。

張り出し部先端には、壁に沿って長楕円形の掘り込みが確認されていたために、敷石を除去した後に、掘り方の調査をおこなったところ、張り出し部の中央にも同様の掘り込みが検出された。掘り込み内は暗褐色土が堆積しており、ともに遺物が埋設された状況は確認されなかった。張り出し部は他の住居と同様に、主体部との接続部付近から先端部に向かって緩やかに傾斜している。

遺物は全てが住居主体部から出土したものである。器形復元可能な資料4点を含め、破片も比較的多く土製品も出土しており、堀之内1式のまとまった資料といえる。出土土器の中には、隣接し



第14図 第2号住居跡出土土器（1）

た第3号住居に関連すると思われる堀之内2式から加曽利B式土器が少量混在していた。

第2号住居跡出土遺物

住居跡出土土器は、少量の称名寺式土器（第15図1～7）、加曽利B式土器（第16図3～5・10～11）を除くと、堀之内1式でまとまっている。称名寺・加曽利B式はおそらく流れ込んだものである。

第14図1～2は直線的に外反する頸部と、幅狭い口縁部をもつ深鉢形土器である。いずれも3単位の小波状口縁で、1は口唇直下に沈線がめぐる。2は波頂下の三条一単位の沈線と両側の円形刺突間が沈線によって連結されている。沈線下の屈曲部には刺突が施されている。胴部にはわずかに沈線文が残存し、縄文LRが充填されている。2は幅広の無文頸部と胴部を区画する沈線の一部が残存するのみで文様が不明であるが、或いは沈線文のみで文様構成された土器であろうか。

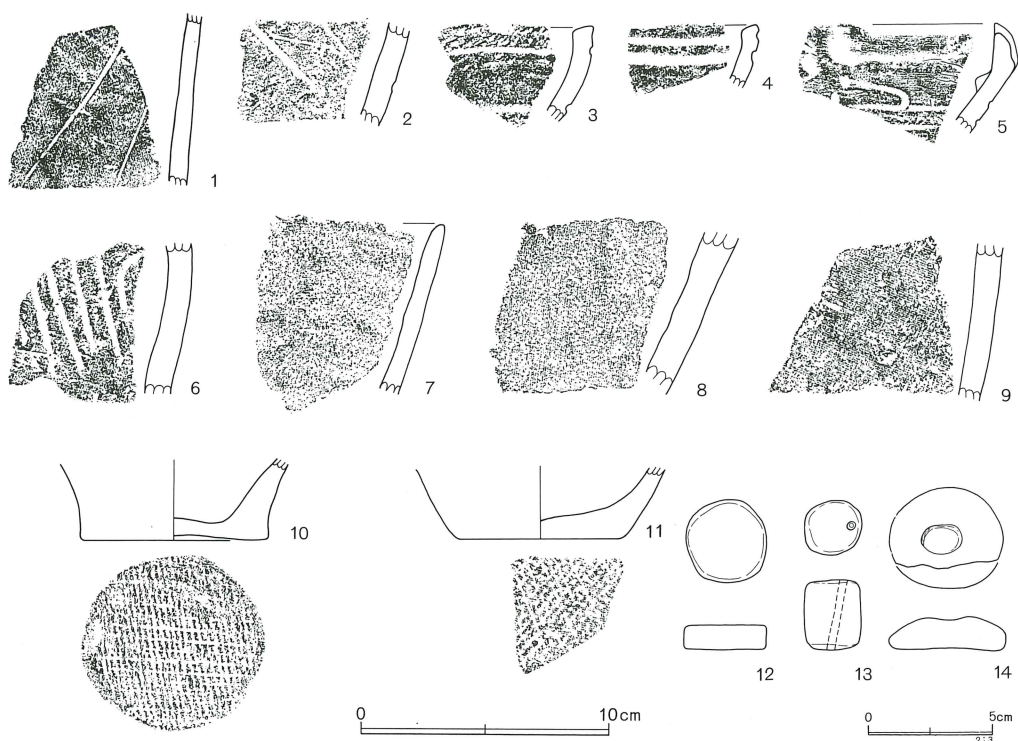
3は櫛歯状工具によって格子目状の沈線文が施文される。器面は光沢を帯び、精選された胎土である。輪積み痕が明瞭に残されている。

4は注口土器と想定される。胴部の一部と底部のみが残存していた。胴剥落部には把手が付されていたようである。現存部分に文様はない。

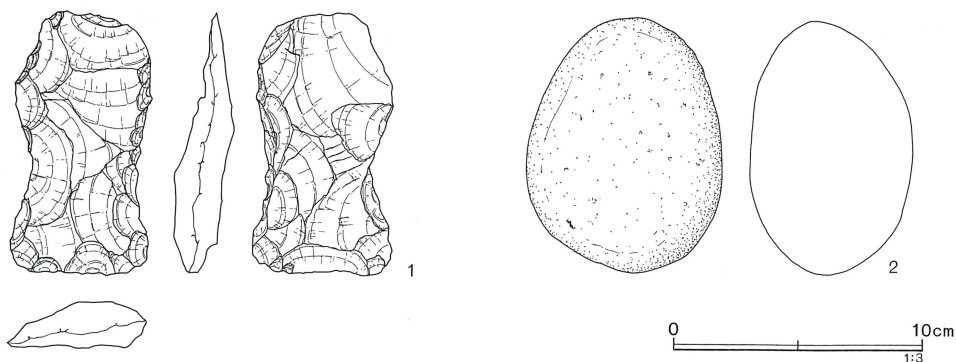
第15図には拓影を図示した。第15図8は波頂直下から縄文地上に蛇行懸垂文が描かれる。同図9～27は無文地上に沈線文をもつ一群である。文様展開は定かでないが、称名寺系譜の文様をもつも



第15图 第2号住居跡出土土器(2)



第16図 第2号住居跡出土土器・土製品



第17図 第2号住居跡出土石器

の (11～13、20～21)、縦区画間に斜行沈線文が描かれるもの (24～25)、鋸歯状構成で末端が渦巻き状となる沈線文 (23、26～27)、格子目状沈線文の土器群 (第16図 1～2) とに大別される。

石器は量的に少なく、図示できる資料は2点にとどまった。1は打製石斧で分銅形を呈する。2は磨石で、特に平坦部分が磨耗している。

土製品は3点出土した。第16図 1・3が土製円盤で、1は土器片利用である。3は中央にくぼみをもつ。2は貫通孔をもつ円柱状の土製品である。

第3号住居跡（第18図～第19図）

D～E-12グリッドに位置する。本住居は、寄居面ⅠからⅡにかけての標高87m 前後の緩斜面部に位置している。近世と考えられる石垣状遺構の築造の際に破壊を受け、住居主体部北側の敷石が外されていた。石垣には、片岩も用いられており、或いは石垣に転用されたものとも考えられる。住居跡の北側が用水路で破壊されており、さらに住居南半では、工場建築に際して攪乱が広範囲に及んでいるため、全容を把握できなかった。

住居は、主体部の敷石が上記の理由によって、殆ど残存しておらず、わずかに結晶片岩を用いた敷石が検出されたにすぎないが、当初は住居全面に敷石が及んだ可能性もある。ほぼ直線的なピット列が検出された。ピットは直径が40cm 程度のものと、60cm を前後するやや大型のものがあり、確認面からの深さは平均40cm で、P1・P2が60cm とやや深い。

張り出し部は河原石を用いて五角形に縁取りし、内部には結晶片岩が敷かれていた。この部分にも石が外された痕跡が窺える。張り出し部の西側にも大型の片岩が敷かれており、おそらく主体部との接続部を構成していたものと考えられる。接続部から張り出し部にかけては、緩やかに傾斜し、先端部の縁石には、浅い掘り込みが伴っていた。

以上の結果から、住居跡は、主体部が方形で五角形の張り出し部は主体部と離れて位置しており、両者が敷石によって連結される形態が考えられる。堀之内2式以降に特徴的な形態で、樋ノ下遺跡では最も新しい時期の住居跡といえよう。他と異なり、住居の主軸が南北に偏っている点も特徴である。張り出し部先端からピット列まで、直線距離で8m である。

ピット列の1.3m 東側には、炉跡と埋設土器を伴う土壌が重複して検出された。土壌は炉跡によって破壊されていた。住居が重複あるいは建て替えられた可能性も考えられる。

炉跡は径60cm 前後で楕円形を呈する。確認面からの深さは約20cm である。土壌もほぼ同様の大きさで、一段深く掘り込まれ、深鉢形土器の胴下半部が埋設されていた。

張り出し部と主体部との接続部にあたる敷石下からは、径が2.6×1.1m、深さ10～14cm の長方形の土壌が検出された。周囲が溝状に掘り込まれ、敷石部分が2箇所、台状に残されていた。覆土は暗褐色土1層のみで、埋め戻された状況が観察された。

住居跡は主体部に掘り込みがなかったため、遺物は殆ど出土しなかった。炉跡から埋設土器が1点出土した以外に、張り出し部覆土からわずかに土器片が出土したに過ぎず、出土遺物からの時期決定はできなかった。

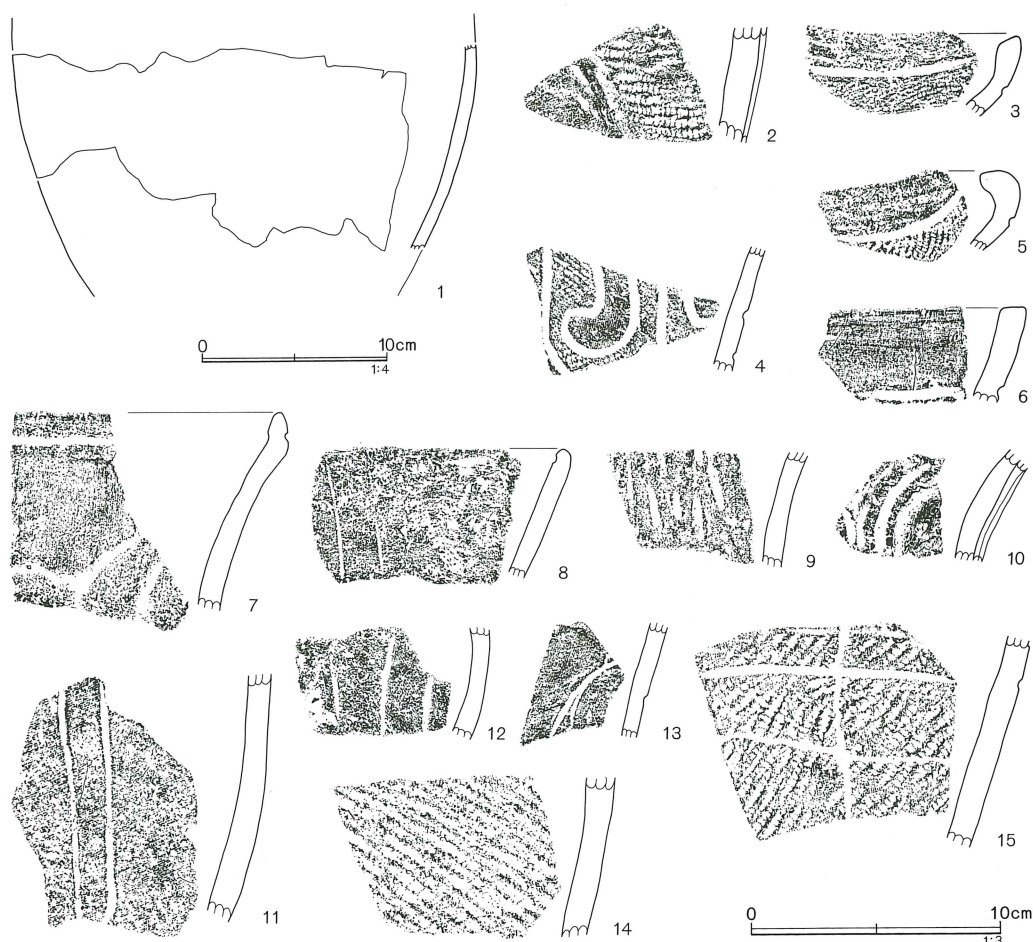
第3号住居跡出土遺物

住居跡からは遺物が殆ど出土しなかったため、遺物からの時期決定はしがたい。第19図1は主体部中央で検出された埋甕である。胴中央部のみの破片で、無文である。ピットと重複したため約半周が失われていた。

同図2～4はいわゆる後期初頭に位置付けられる加曽利E式系統の土器であろう。2は微隆起線による文様描出で、モチーフ間に縄文LRが充填される。3～5は称名寺式で、波状口縁である。7～13は堀之内に属する土器群であるが、まとまりに欠ける。15は加曽利B式あるいは曽谷式に比定される。LR地文上に、沈線が横走する。14は同一個体である。



第18図 第3号住居跡



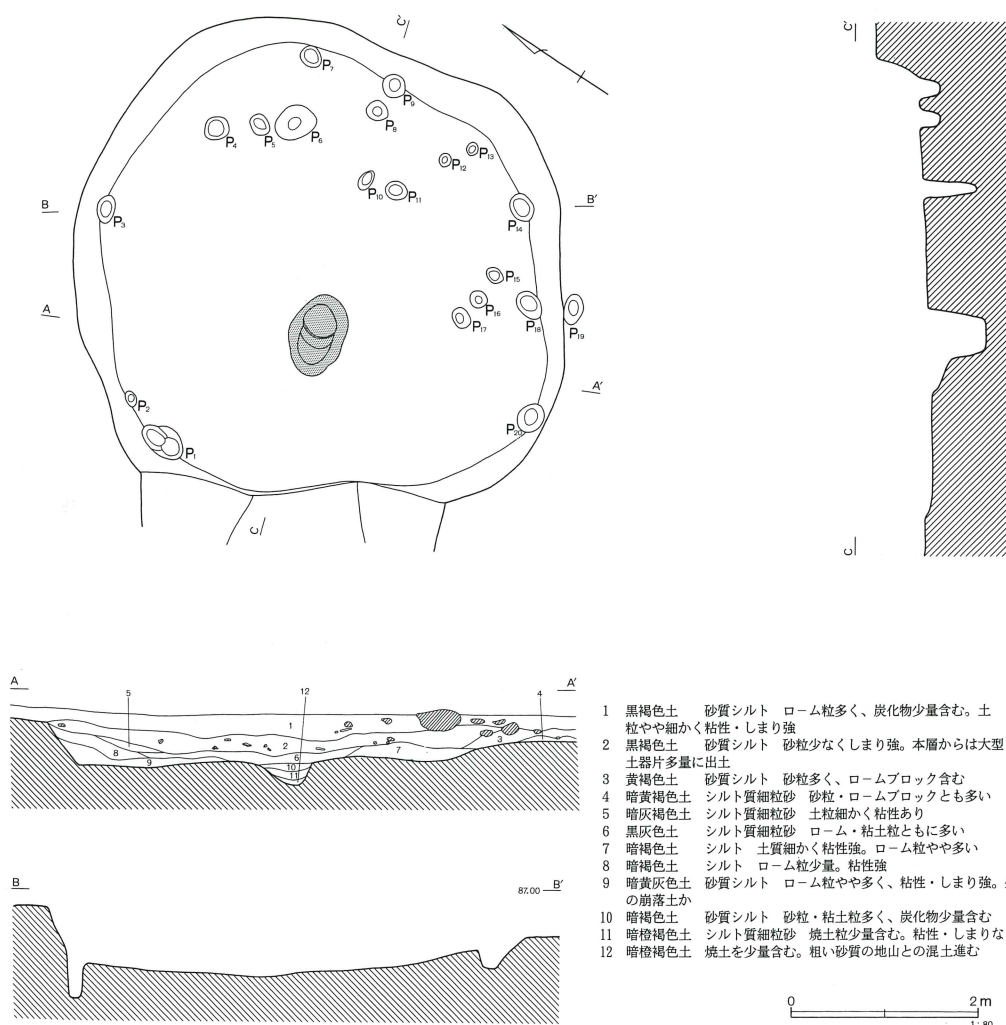
第19図 第3号住居跡出土土器

第4号住居跡（第20図～第26図）

本住居跡は寄居面Ⅰから寄居面Ⅱに移行するテラス状の緩斜面部から平坦部、E～F-13グリッドに位置する。この地点では、後背地状に緩いくぼ地が形成されており、段丘遷移点に特徴的な地形を呈しているといえよう。隣接する第89号土壌とともに、遺構上面には黒色土が広範囲に堆積しており、黒色土を除去したところ、本住居と共に第89号土壌が確認された。また遺構の北端部にはくぼ地状の地形が確認された。本住居跡の北西周囲には3軒の住居が接しており、あたかもくぼ地を取り巻くかのである。この区域は、調査区南東端部とともに、樋ノ下遺跡での遺構集中地点の一つである。

住居跡は南北径が5.5m、東西径が4.5～5.1を測る。東壁側が近世の溝状遺構によって破壊されているため不整形であるが、隅円方形ないしは台形に近い平面形を呈するようである。この部分は周辺に比較してやや標高が低いために、攪乱は遺構確認面にまでは及んでいない。

床面は緩い起伏を持ち、一定していない。北壁側に向かって緩く立ち上っている。壁に沿って8



第20図 第4号住居跡

本の壁柱穴が巡り、その内面にはやや小ぶりの柱穴が巡っている。

炉は床面中央部から東壁寄りで検出された。径が0.9×0.6mの楕円形を呈し、底中央部には一段浅い掘り込みを伴っている。床面からは最深部で約30cmの掘り込みである。覆土には焼土・炭化物の含有も少なく、壁面にはわずかに焼けた痕跡が確認された程度であった。壁の立ち上がり際に支柱穴と思われる掘り込みが検出された。さらに、南壁側にも柱穴様の掘り込みが検出されたが、遺構に伴うものか否か断定できない。

遺構覆土内からは、称名寺式から曽谷式土器が出土しており、時期的なまとまりがない。床面上から出土した遺物はなく、全て覆土中からの出土であった。わずかに曽谷式が他を凌駕している。この出土傾向は隣接する第89号土壇と共通しており、土壇出土土器と接合関係をもつものがある。両遺構とも黒色土に覆われていたことも考え併せると、曽谷式期に主体的に行なわれた第89号土壇への遺物の廃棄と、周辺からの流れ込みとに帰因する遺物が包含されていたと考えられる。住居跡

からは、器形復元可能な大型破片が出土しなかったことも、この裏付けとなろう。

出土石器には打製石斧とともに石剣・礫器など多量の遺物が出土しており、石器組成の点からも第89号土壌との強い関係がうかがえる。

第4号住居跡出土遺物

遺構から出土した土器には、称名寺式から安行3b式までが含まれており、このなかでも曾谷式土器が量的には最も多い。第21図1～4が称名寺式に、5～6が後期初頭段階の微隆起線文をもつ加曾利E系統の土器である。

第21図7～16、20～30・32が曾谷式に比定される土器群である。有文土器には、沈線文の土器群（7～9、12、14～16）、磨消縄文の土器群（10、11、13）に大別され、前者は文様構成によってさらに綾杉状沈線文の土器群（7～9）と平行沈線文間に細沈線が充填される土器群（12、14～16）、とに分類される。有文土器の出土比率が概して少なく、各々の土器群にも量的多寡は認められなかった。

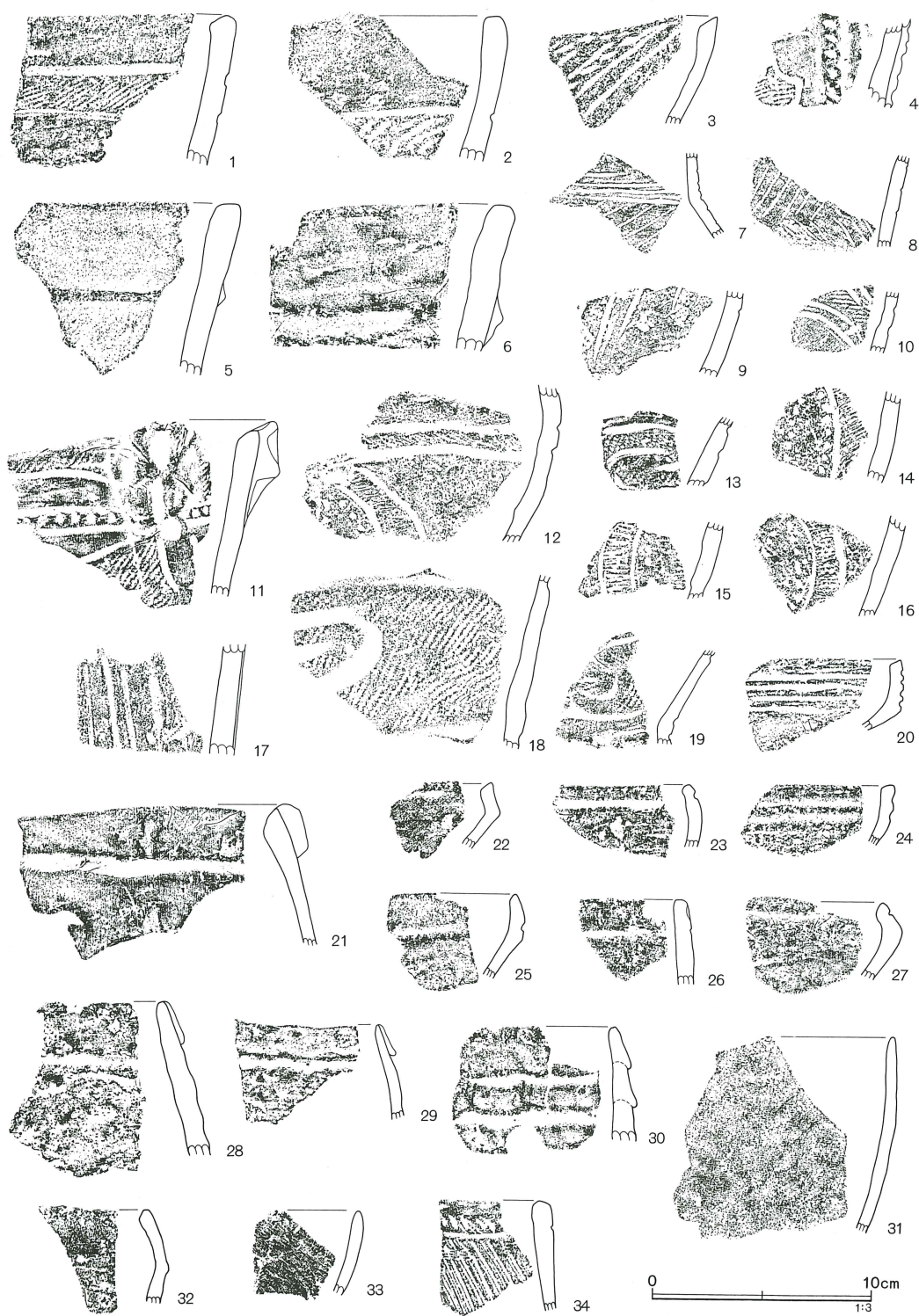
17は口縁部に上下2段のいわゆる豚鼻状の突起をもつ口縁部破片で、突起下にめぐる刻みをもつ。隆帯を境に弧状沈線文が施文される。20・22～25・27が鉢ないしは浅鉢形土器で、屈曲する口縁部には沈線がめぐる。13・18～19は三叉状入り組文をもつ安行3b式土器である。同図34は加曾利B式の粗製紐線文土器である。同図31～33、第23図1～19には粗製土器を一括した。第21図21・26・28～30は口縁が内湾し、胴部に最大径をもつ深鉢形土器である。器面は無文で粗い整形痕をもつ。30には輪積痕が明瞭である。第22図2～7には器面に条線が施されている。8～13は縄文が施文された土器群で、原体はいずれもLRである。14～19は無文の胴下半部破片である。16は器面に凹凸が顕著である。20～22は網代痕をもつ底部である。

石器は総数24点が出土した。第23図には短冊形の打製石斧を一括した。1～2は剝離によって形状を作出した後に、片面にのみ敲打が加えられている。1は蛇紋岩製で、磨製石斧の製作技法をもっており、部分的な敲打以降研磨に至る手順を省略している。或いは磨製石斧として分類すべきかもしれない。検出された石器は全て欠損品であった。

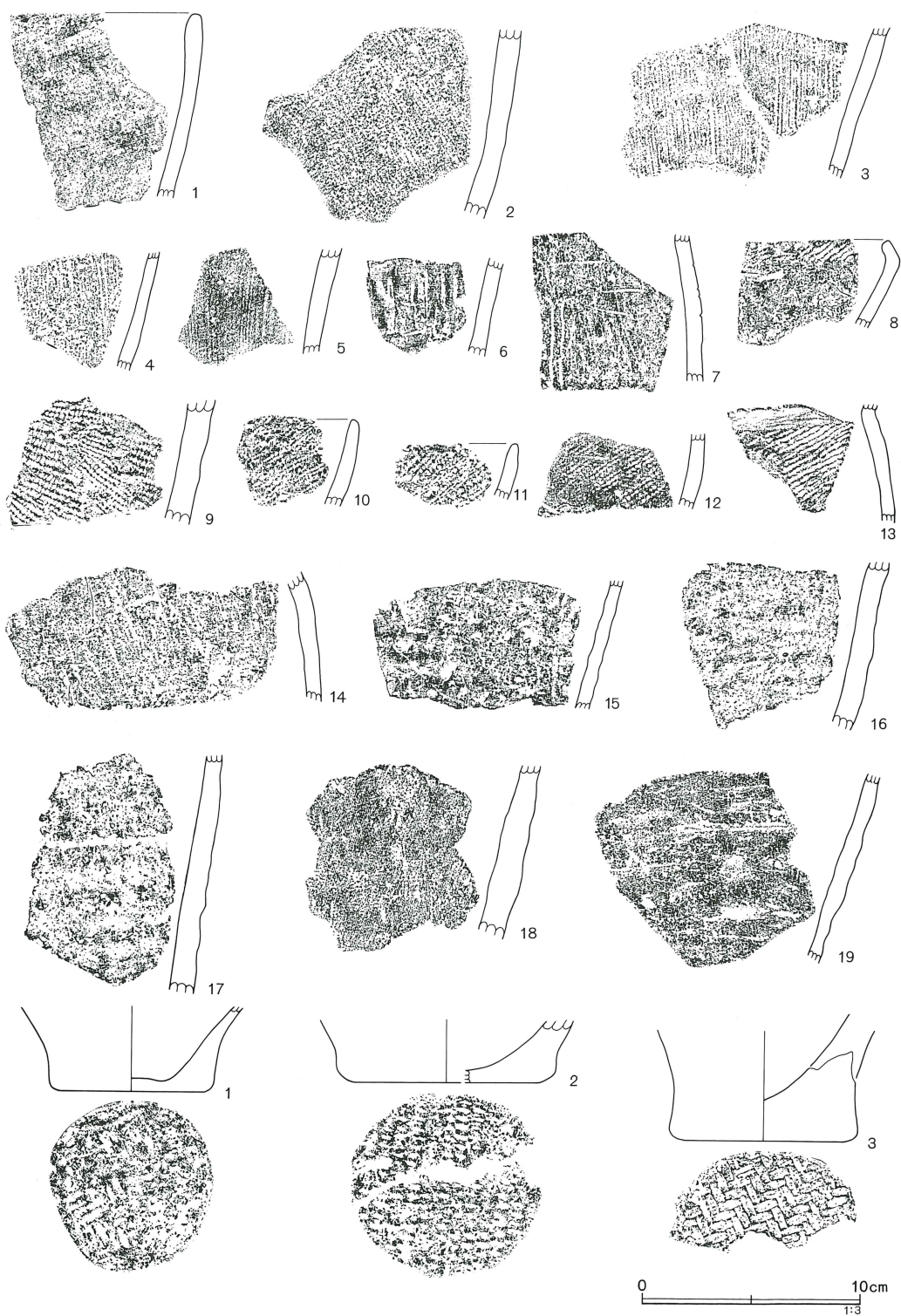
第24図～第25図はいわゆる分銅形の打製石斧である。長さが20cm前後の比較的大型のものと、12cm前後の小形のものとが出土している。この傾向は、第4号住居跡のみならず、樋ノ下遺跡で出土した打製石斧全体の傾向である。また分銅形が主体を占める点も、後期以降の時期的な特徴と考えられる。石斧には片面に自然面を残すものが多く、大型のものでは自然面側に湾曲をもっている。欠損品が多いことも大型石斧の特徴であろうか。両側縁の挟入部には敲打による刃潰し加工が加えられたものとなないものがあり、一定していない。第25図1を除き刃部には明瞭な磨耗跡を残すものはない。石材には砂岩が多く用いられている。

第26図1は片面にはくぼみをもち、この面にのみ石皿としての使用による磨耗が観察される。3は磨石である。1点のみ出土した。

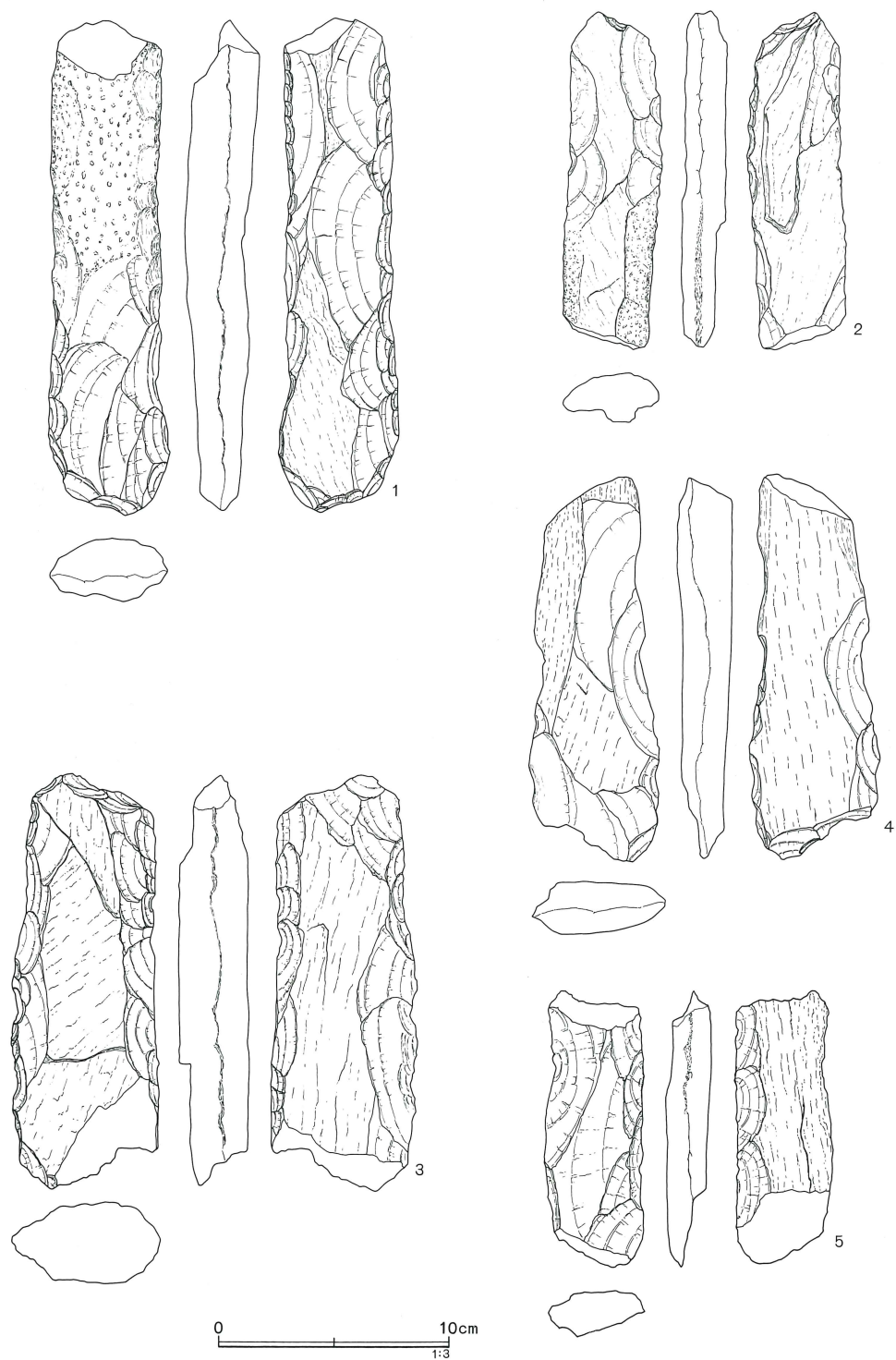
3は樋ノ下遺跡で出土した唯一の独鈷石である。全体に細かく入念な敲打によって整形され、さらに粗く研磨が施されている。使用痕は観察されない。全長14.4cm、最大幅3.3cm、厚さ4.5cmである。4は磨製石斧であろう。欠損品で全容は定かではない。敲打の後に全体に研磨が施されてい



第21图 第4号住居跡出土土器(1)



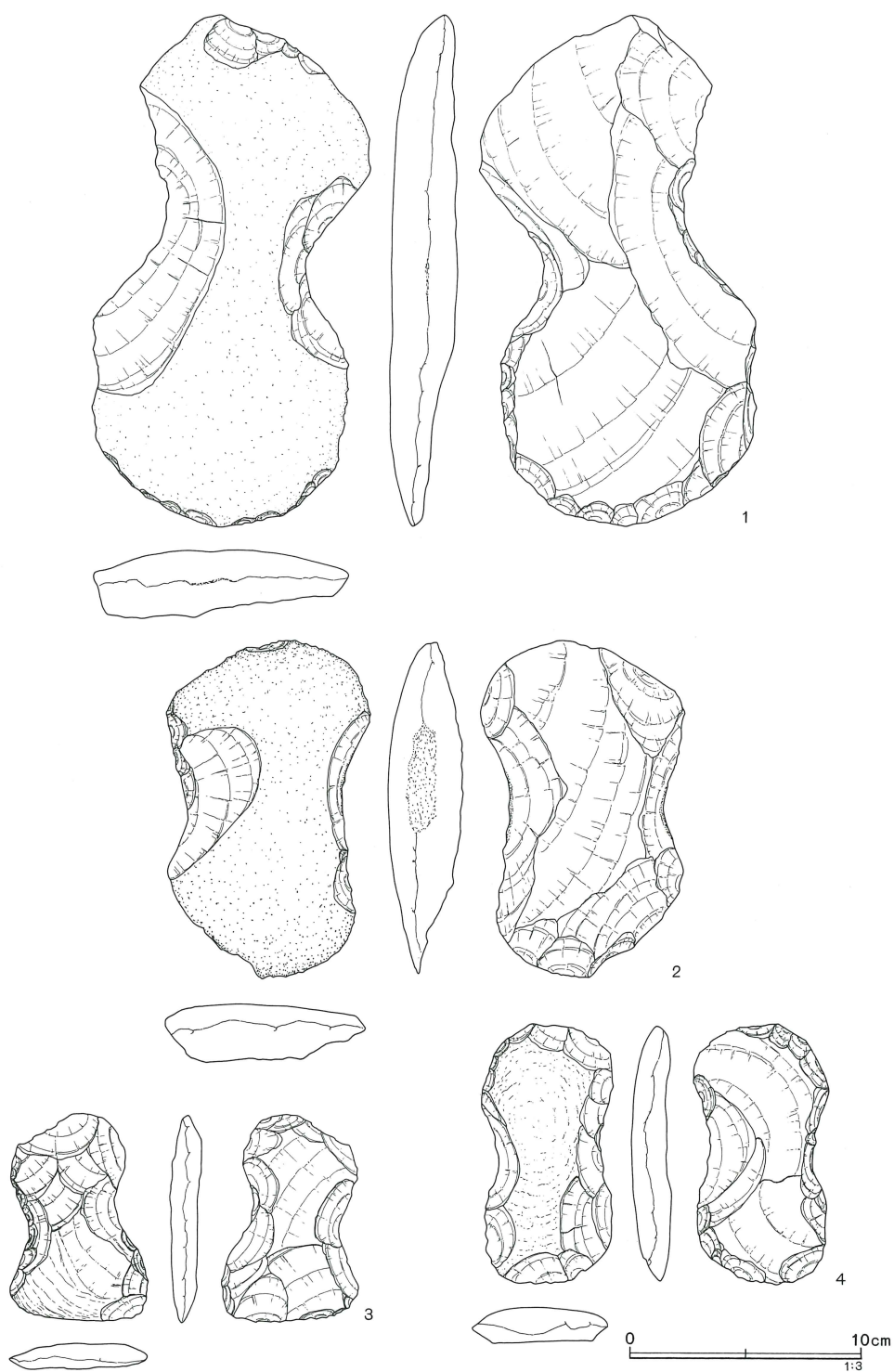
第22图 第4号住居跡出土土器(2)



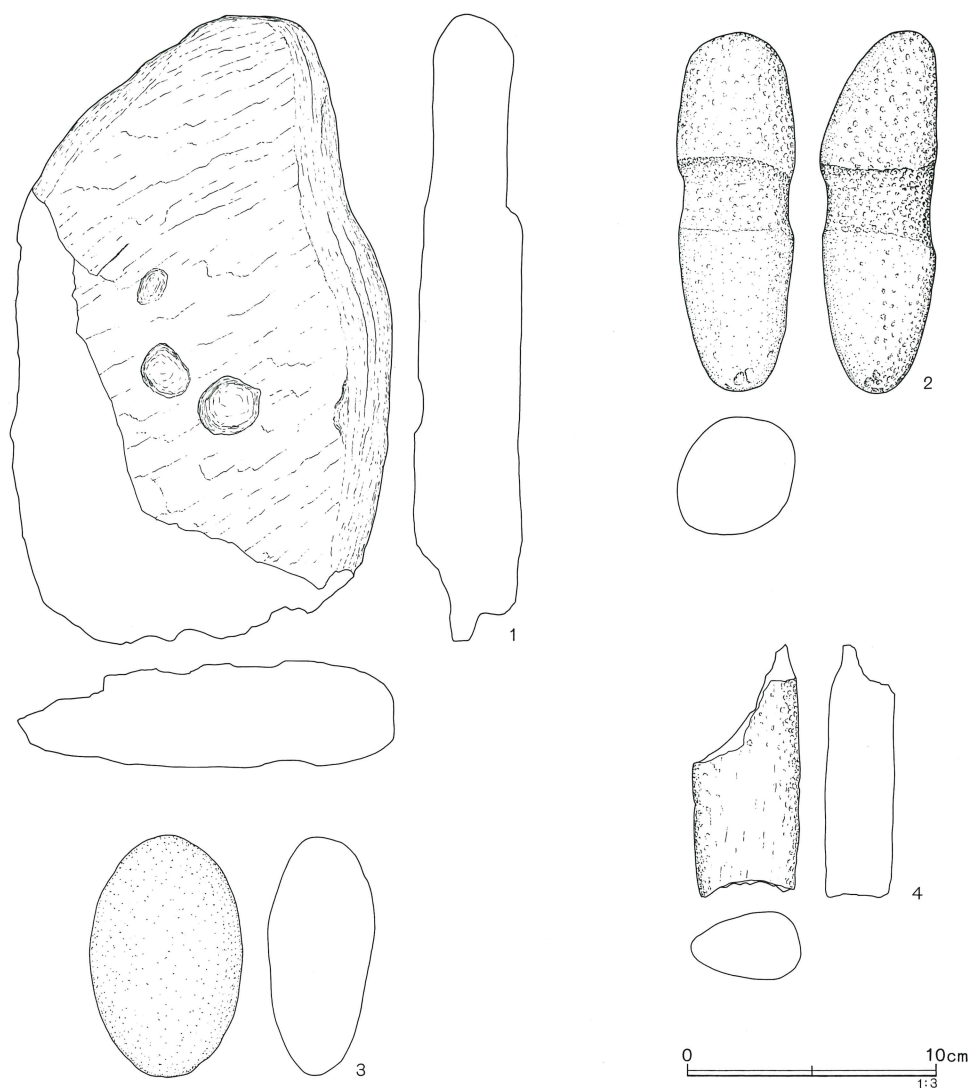
第23图 第4号住居跡出土石器(1)



第24図 第4号住居跡出土石器(2)



第25图 第4号住居跡出土石器(3)



第26図 第4号住居跡出土石器（4）

る。

第12号住居跡（第27図～第30図）

本住居は、K-6グリッドで検出された。住居は寄居面Ⅰにあり、標高89.6～89.8mのほぼ段丘平坦面に構築されていた。住居の南側では急傾斜で寄居面Ⅱに移行し、同面との比高差は約2・6mを測る。住居は周辺部も含めて著しい攪乱を受けており、東壁側の主体部から張り出し部にかけての一部が検出されたに過ぎない。残存部からは全体の形状を推定することは困難であるが、張り出し部は他の住居跡と同様に長方形を呈し、楕円形ないしは多角形の主体部をもつ柄鏡形住居が想定される。

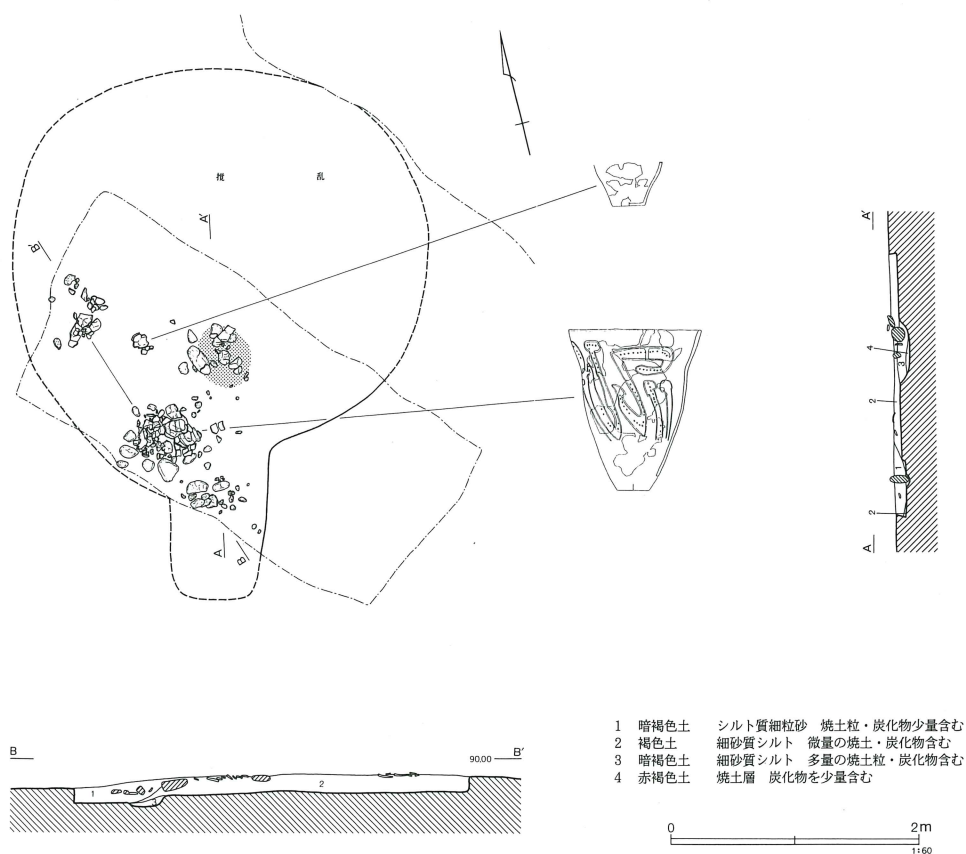
住居跡の床面から張り出し部にかけては、河原石や結晶片岩が散在していたが、まとまりに欠け

ていた。炉の上部と張り出し部寄りに集中する傾向が窺えた。攪乱のために敷石が除去されたことも考えられたが、検出状況から見て住居全体に敷石がなされていたとは考え難い。検出された石は、壁に近い部分であったことから、或いは住居の壁として埋設されていた縁石の可能性が考えられる。

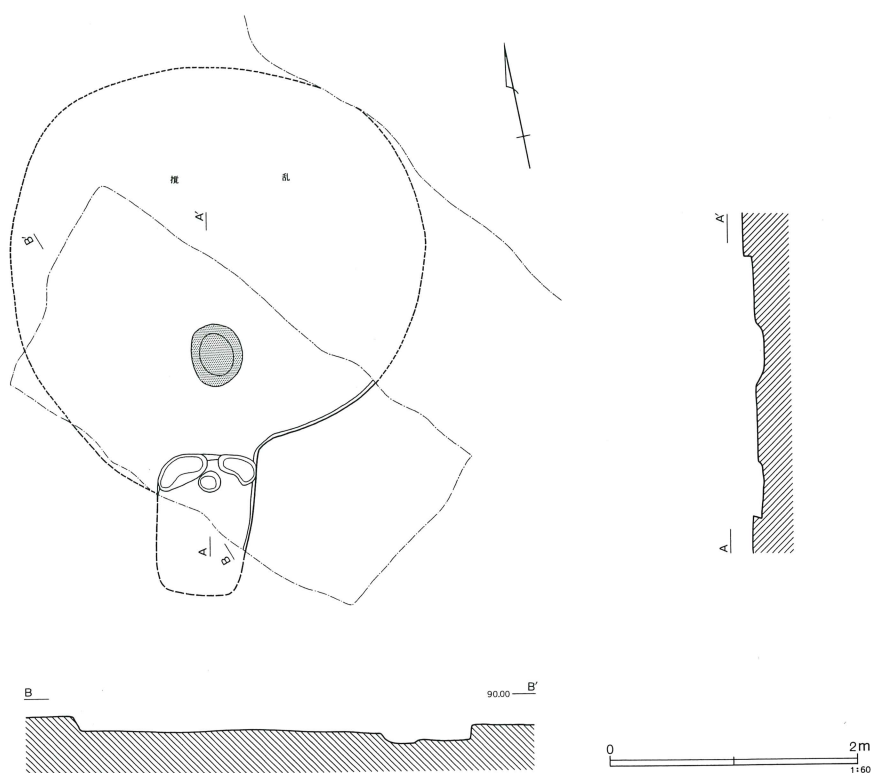
炉は住居の中央部主軸上にあり幾分張り出し部寄りに位置していた。炉跡上面に礫の散布が認められたが、攪乱が及んだためか壁石が抜かれており、精査した結果、隅丸長方形の掘り方のみが検出された。炉は皿状の断面形を呈し、床面からの深さは8cmと極めて浅く、焼土の堆積も底面近くにわずかに認められた程度で貧弱であった。

張り出し部と主体部との接続部際には、不整楕円形を呈する一対の掘り込みが検出された。いわゆる対ピットと称されるこのような掘り込みは第27号住居跡でも確認されており、柱穴と考えるには位置的に困難を伴う。後述する第27号や30号住居跡等で観察されたように、張り出し部と主体部が閉塞するように石が埋設された痕跡が認められたことから、或いはこの住居跡のピットも同様の構造に関わるものとも考えることもできよう。第27号住居跡では、対ピットと縁石の出土状況とに有機的な関連が確認されている。

床面からは大型の深鉢形土器が潰れた状態で2地点から出土した。接合の結果、同一個体で、大



第27図 第12号住居跡遺物出土状態



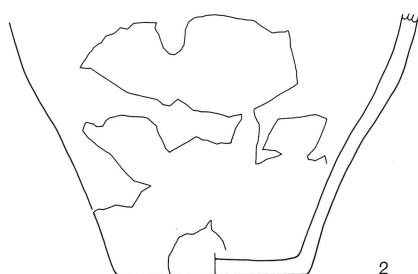
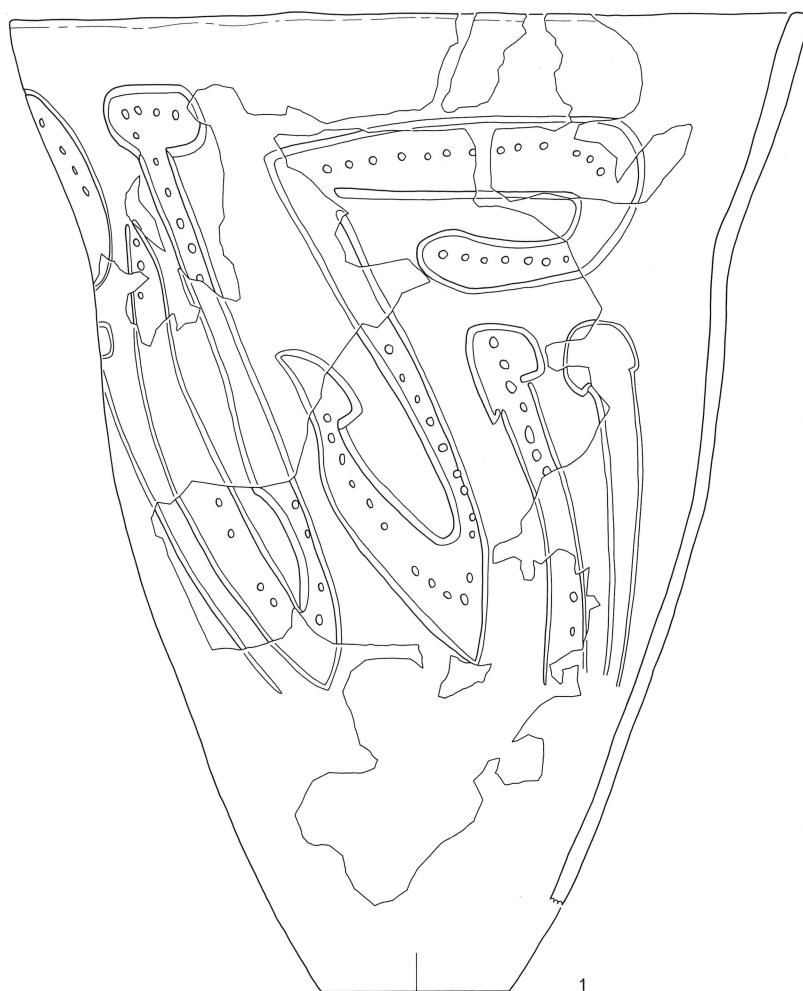
第28図 第12号住居跡

型深鉢形土器であることが判明した。この地点からは、拓影に示した大型の口縁部破片も出土している。近接して底部破片も出土したが、接合せず径も異なることから別個体であろう。

第12号住居跡出土遺物

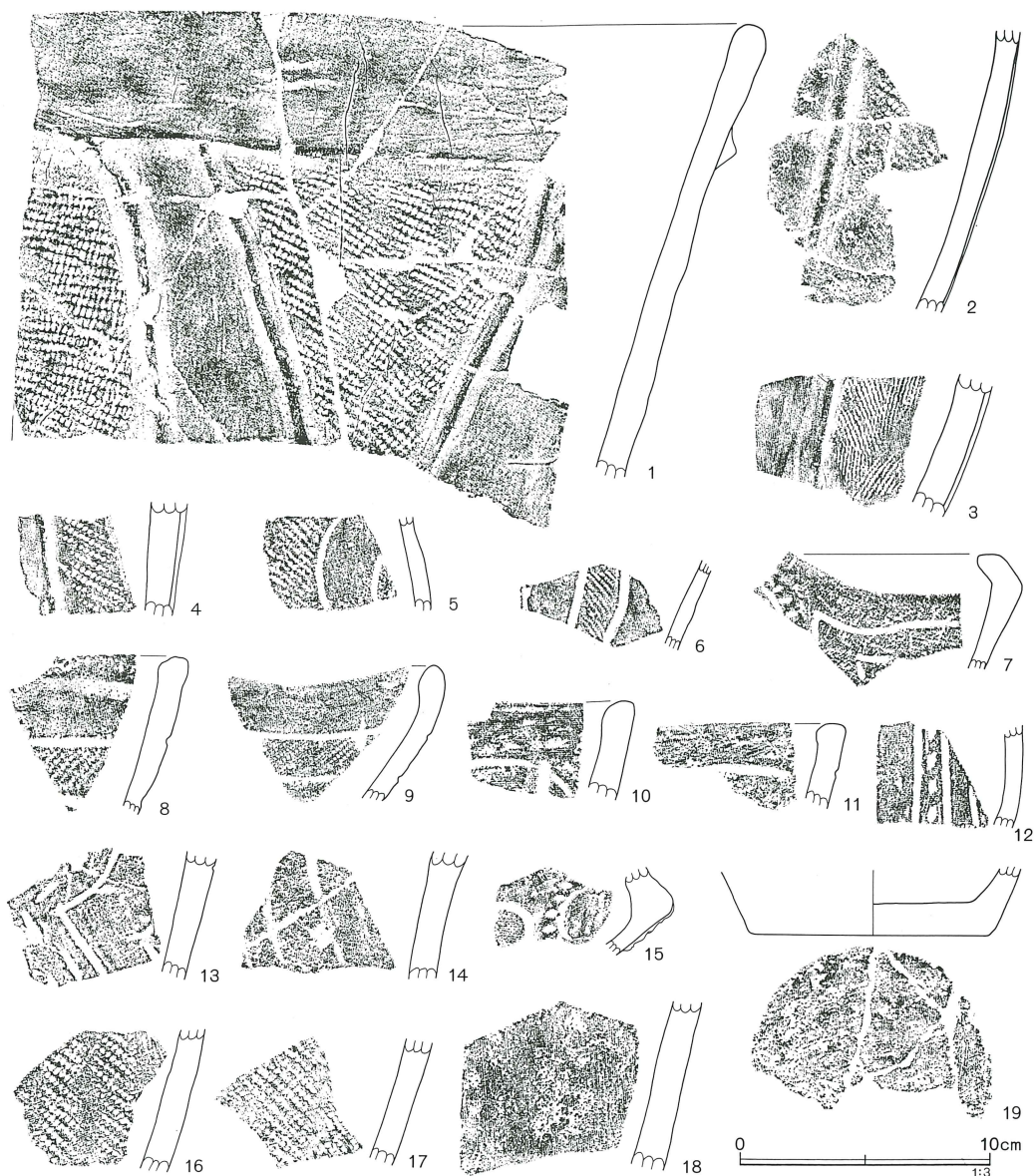
第28図1は床面上から2地点にわたって出土した、称名寺式の大型深鉢形土器である。胴上部でくびれ、やや内湾気味に開く器形である。文様は幅がやや狭い単沈線で、文様としてJ字文とV字状の平行沈線文が4単位に配置されている。J字文の末端は一部でクランク状や隅丸方形となり、V字状文と共に単位文化の傾向が顕著である。文様間には円形の単列列点を加えられており、器形・文様構成と共に称名寺式の終末段階の様相を呈している。口径43cm・現存高48cmである。2は底部で、1との接合関係はなく、別個体であろう。風化が著しく整形等詳細が不明であった。底径10.4cm・現存高14cmである。

第30図1～4は断面三角形の隆起線で文様が描かれる土器群で、加曽利E4式の系統上に位置する土器群である。1は第29図1と接して出土した。現存部分から、文様構成には第27号住居跡出土土器（第34図1）のように、無文帯を画する隆起線に接して、逆U字状文が垂下し、その間にV字或いはX字状のモチーフが配される構成が考えられる。隆帯間にはLR縄文が充填され、さらに隆帯側にはナヅリが加えられている。



0 10cm
1:4

第29図 第12号住居跡出土土器 (1)



第30図 第12号住居跡出土土器（2）

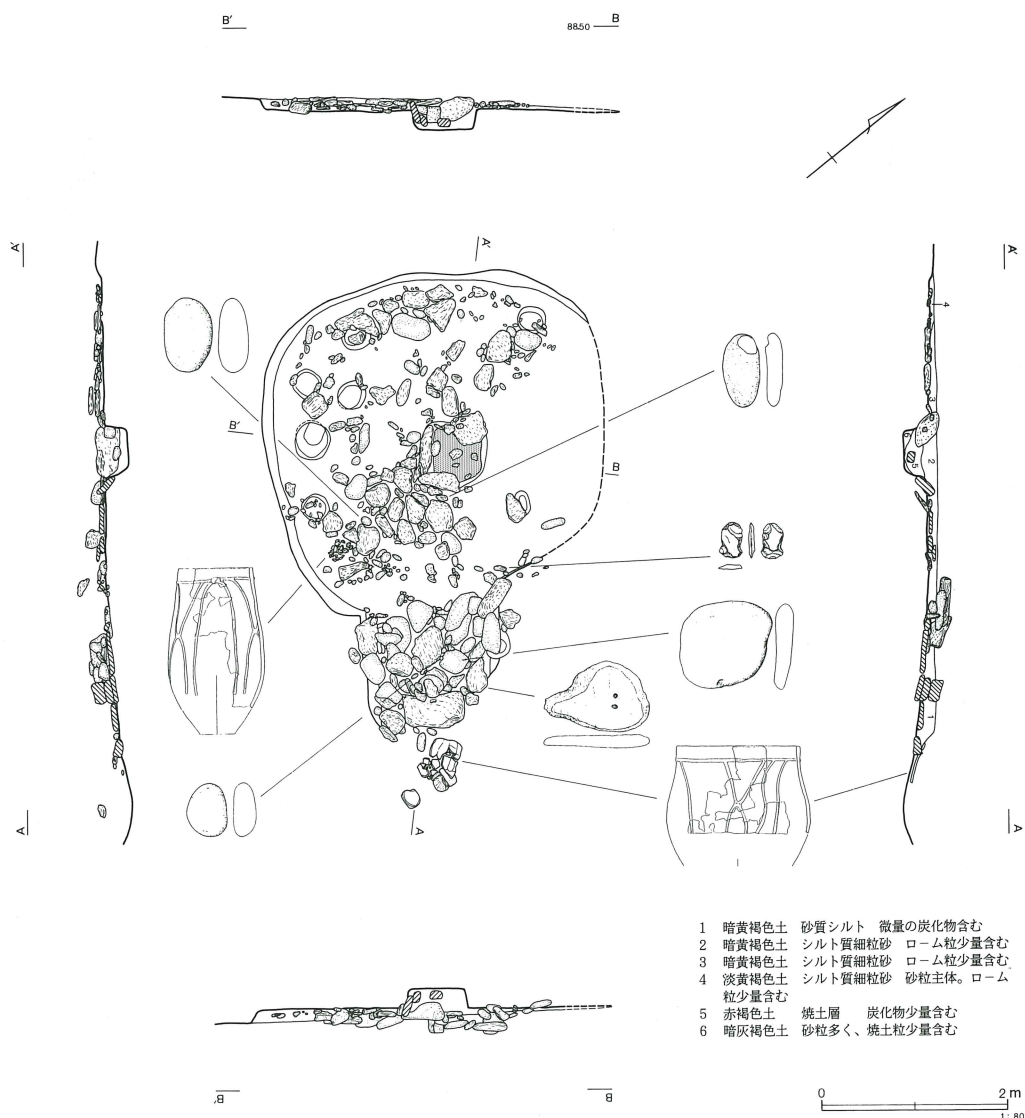
同図5～15には称名寺式土器を一括した。5～9は沈線間に縄文が充填された土器群である。10～14は第29図1と同様に沈線間に列点を加えられる土器群である。列点は長方形で第29図1とは明らかに別個体である。15～16はおそらく加曽利E系の胴部下半の破片と思われる。原体LRが縦回転施文されている。18は称名寺式の胴下半であろう。底部は図示した2点のみ出土した。

第27号住居跡

第27号住居跡は、寄居面ⅡのK～L-15グリッドで検出された。標高は86.80mを測り、この段丘面に形成された自然堤防状の高まりから荒川寄りにかけて緩く傾斜する斜面部に構築されていた住居である。

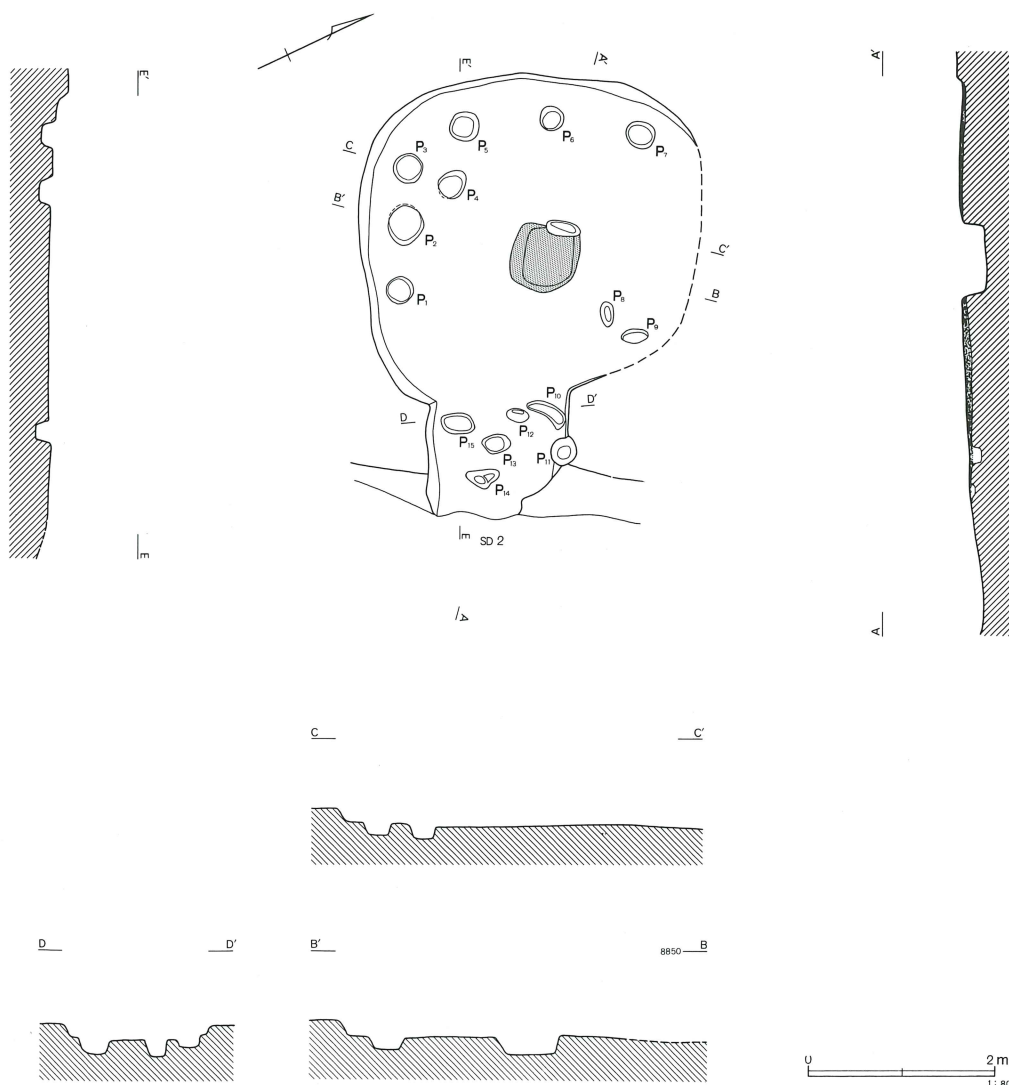
本住居の上面には、七世紀中葉に第8号墳が築造され、さらに近世には、石垣状の遺構構築に伴って6号溝が掘削されたために、住居の主体部中央から北壁側と、張り出し部の先端が失われている。住居跡主体部には、残存部分でも床面近くまで攪乱が及んでいたため、床面上の敷石や炉の壁石にも、原位置の推定が困難なものがあつた。

住居はいわゆる柄鏡型敷石住居跡である。主体部は現存部分で4.1mを測り、隅丸方形と考えら



第31図 第27号住居跡敷石面

れる。床には、扁平な砂岩を主体とした敷石が検出された。敷石は特に炉の南側と北西壁際で遺存状態が良好であり、炉の南側が最も密に敷かれていた。主体部中央から北西壁にかけては、敷石にも空間が多く残されており、攪乱が及んでいなかったことから、或いは抜かれて転用された可能性も考えられる。敷石は様々な形状の石を組み合わせて敷設されており、空白部には砂岩を主体にさらに細かな石が充填されていた。床面の敷石は、壁から約10cm程度内側から始まっており、外側の壁は住居の掘り方であったと考えられる。敷石面を調査していた時点で、敷石の空白部には柱穴が存在することが明らかであった。このため敷石下を精査したところ、さらに柱穴（P6～P7）が検出された。これ以外の柱穴には石が落ち込んでいたが、敷石間で検出されている。後述する28号住居跡とは異なり、生活時に既に敷石が施されていた可能性も高いように考えられる。



第32図 第27号住居跡掘り方

床面のほぼ中央部からは、石囲い炉が検出された。炉は、一辺が約80cmの方形である。底面は平坦で、床面から約30cmほど掘り込まれていた。炉の北東壁は、古墳の周溝を掘る際に炉石が除去されており、発掘時には炉石は南西壁にのみ残存していた。炉石は被熱し白色或いは赤変していた。覆土内には他の住居と比較して焼土の堆積が厚く残されていた。

張り出し部は、先端が6号溝によって失われていた。縁石・敷石ともに主体部よりも一回り大型で長方形を呈する石が選択的に用いられたようである。縁石は張り出し内に落ち込んだ状態で検出されており、石を積み上げて壁を造り出した形跡が認められた。

縁石および床面の敷石を除去し、掘り方の調査を行なった。張り出し部は傾斜をもって掘り込まれており、敷石下にもピットが検出された。いずれも平面形態が不整形であり、断面も一定しておらず、柱穴とは考え難い。P9～P15が該当する。特に主体部との接続部で検出されたピット群は、上部の敷石と位置的に対応関係にあり、石が倒れていた状態から推定すると、石を埋設するための掘り方であった可能性も考えられる。このような状態は、後述する第30号住居跡でも検出された。

住居からは、主体部と張り出し部からそれぞれ復元可能な個体が出土した。主体部では炉の南西部の敷石上から深鉢形土器が出土した。張り出し部で出土した土器は埋甕であったと考えられる。いずれも隆起線文の大型深鉢形土器である。

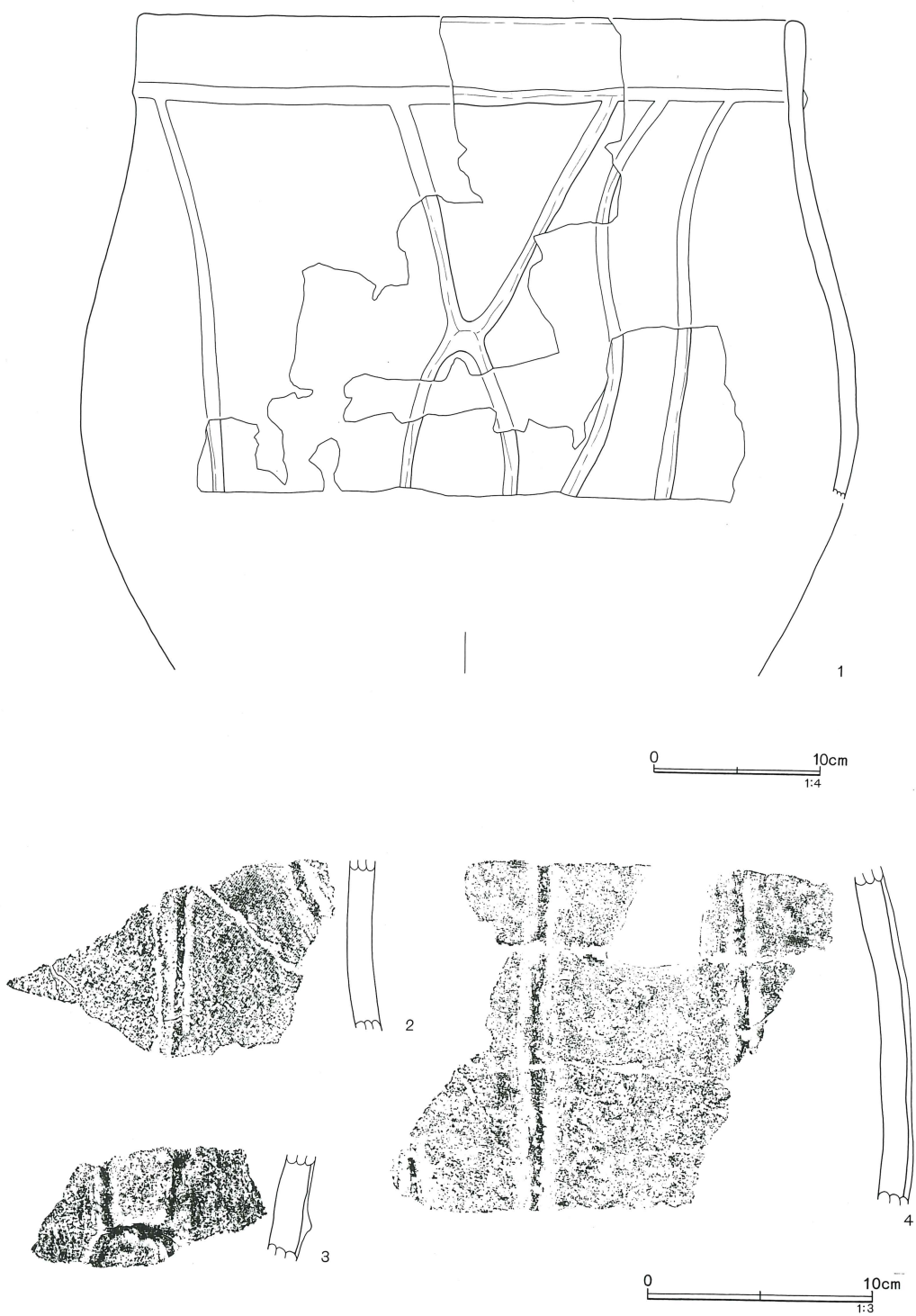
第27号住居跡出土遺物

第33図は住居の張り出し部から出土した。出土状態からみておそらく埋甕であったと考えられる。土器の片面は近世に溝を掘削した際に失われたものと思われる。胴中位に最大径をもち、口縁がすばまる大型深鉢形土器である。文様は胴部に限定され、底部直上に及ぶ幅広い文様帯構成を持っている。文様帯区画・文様ともすべて断面三角形の隆起線によって描かれている。文様は、区画線に接して逆U字状・X状の文様で構成されており、文様の末端は開放されている。文様施文後に器面全体にミガキが施され、さらに隆起線両側が丁寧にナデ整形されている。灰白色を呈し、小礫を多く含む。推定口径40cm・推定胴部最大径46cm・現存高28cmである。第33図の拓影は同一個体を示したものである。

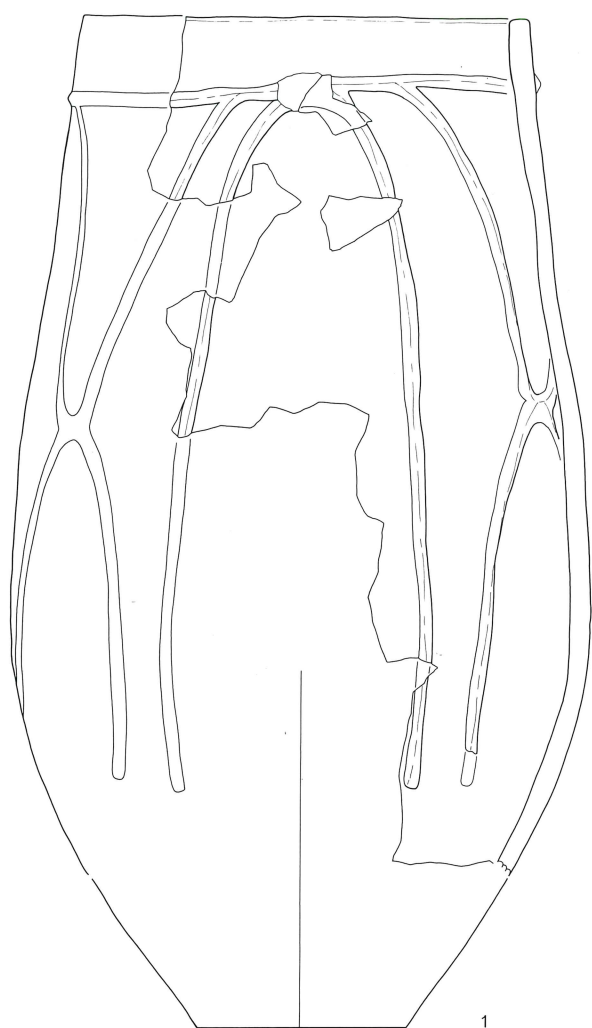
第34図は住居主体部の敷石に密着して出土した。胴下部に最大径をもち、口縁に向かって緩やかにすばまる深鉢形土器である。文様構成は第33図と同様であり、文様末端が開放されている。第33図に比較して長胴で、底部直上に及ぶ幅広い文様帯をもつ。区画の隆起線と接する部分が鐙状に突出するものと考えられるが、この手法は、第53号土壇の埋設土器にも観察され、この時期の特徴の一つに挙げられる。文様施文後に器面が磨かれ、さらに隆起線両側がナデ整形されている。色調・胎土ともに第33図と同様である。推定口径24cm・推定胴部最大径31cm・現存高45.3cmで、推定器高が約60cmと推定される。同図には、同一個体の拓影を掲載した。

同図2～6は、住居主体部覆土内から出土した破片を一括した。2～4は称名寺式土器で、沈線内に縄文LRが充填されている。6は密接する条線が施文されている。5は無文で、1と個体が異なる胴部破片である。

石器は、石皿（第35図1）・凹石（第35図2）・磨石（第36図2～4）・小型打製石斧（第36図1）が出土したが量的には少ない。石皿・磨石はともに住居の張り出し部の縁石と主体部の敷石に転



第33図 第27号住居跡出土土器（1）



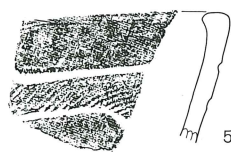
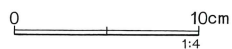
2



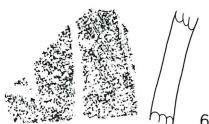
3



4



5



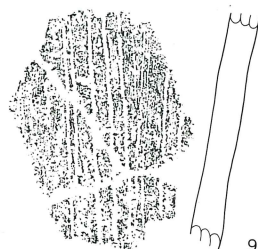
6



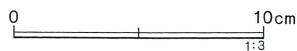
7



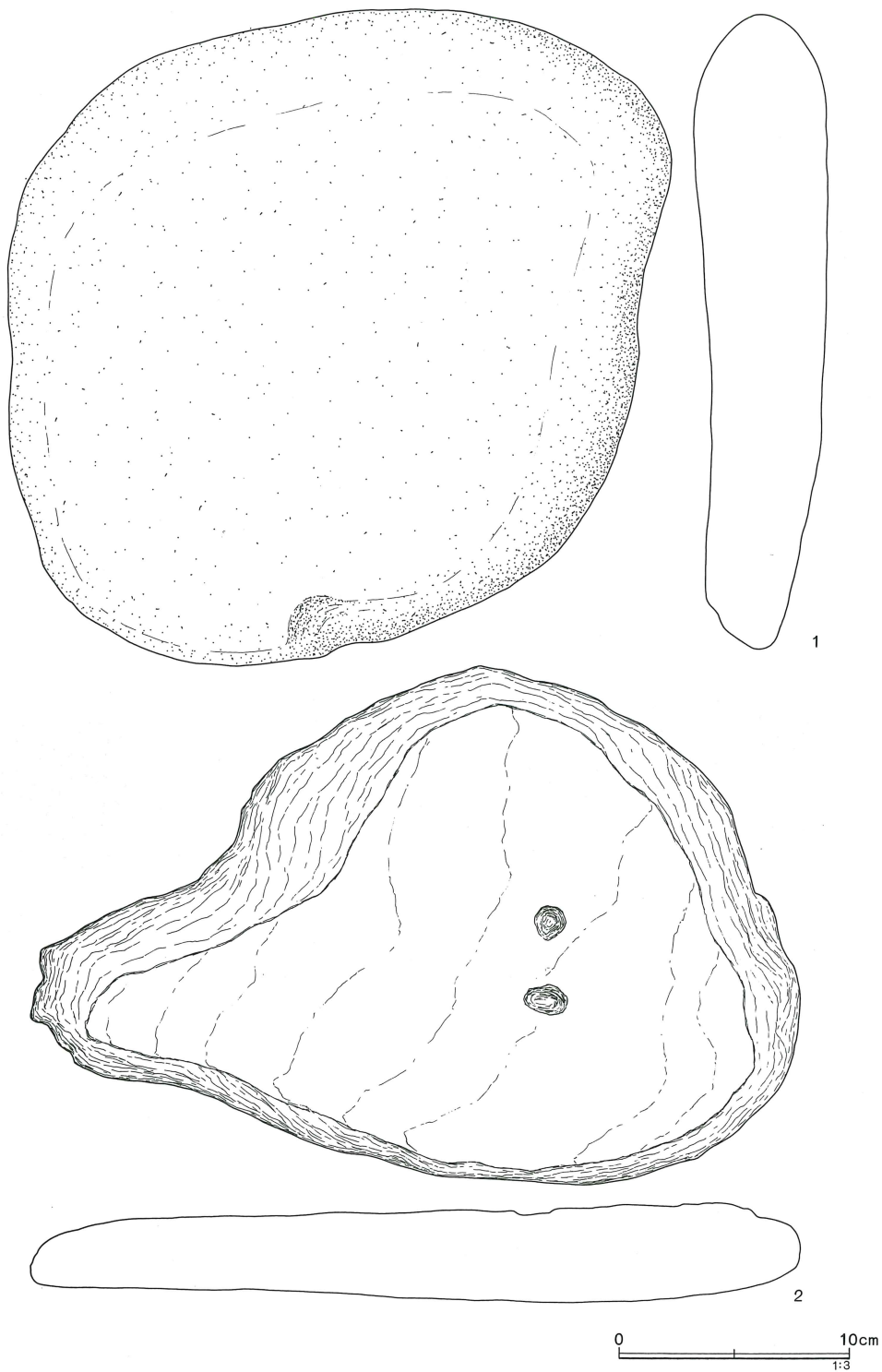
8



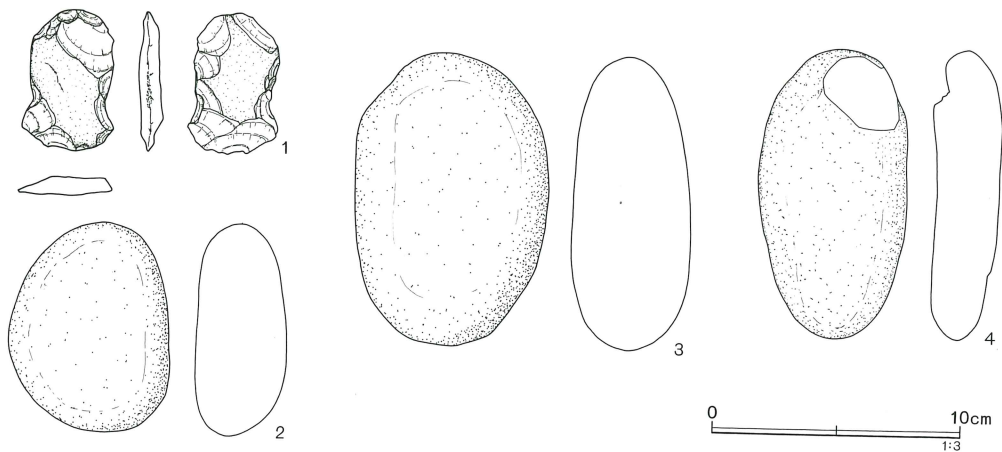
9



第34图 第27号住居跡出土土器 (2)



第35图 第27号住居跡出土石器

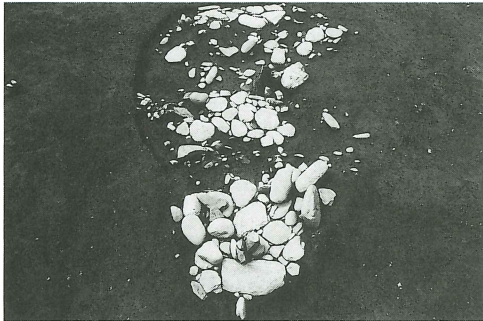


第36図 第27号住居跡出土石器 (2)

用されていた。

第35図 1 は不定形で、使用が片面にのみ限定されている。整形されておらず、自然石をそのまま利用したものであろう。同図 2 は欠損品で、片面にのみ円形のくぼみを持つ。

磨石は住居の縁石に転用されており、いずれも河原石をそのまま用いたものである。石斧は図示した 1 点のみが出土したにすぎない。全長 8.6cm の小型石斧で、挟入部には敲打による刃潰し加工が施され、実用品であったと考えられる。



張り出し部現況



張り出し部復元状況

第28号住居跡 (第27図～第43図)

本住居跡は、I～J-16グリッドで検出された。当該グリッドには第 4 号墳が築造されており、周溝が住居跡の中央部を破壊して掘られていた。従って古墳の調査時において既に縄文時代の敷石住居跡の存在が確認されていた。古墳の周溝は、住居の敷石が障害となったためか、敷石面で留まっていたことも、大幅な破壊を免れた一因であろう。

住居は五角形の主体部をもつ敷石住居である。第 4 号墳の周溝が住居のほぼ中央を貫通しているため、溝幅に相当する敷石が除去されていた。周溝の掘り込みが比較的浅く、炉の南東にある敷石は溝幅を越えていたために、辛うじて残存したのであろう。住居には張り出し部を伴っていたと考えられるが、縁石の一部と考えられる河原石が残されていただけで、住居主体部と同様、第 4 号墳



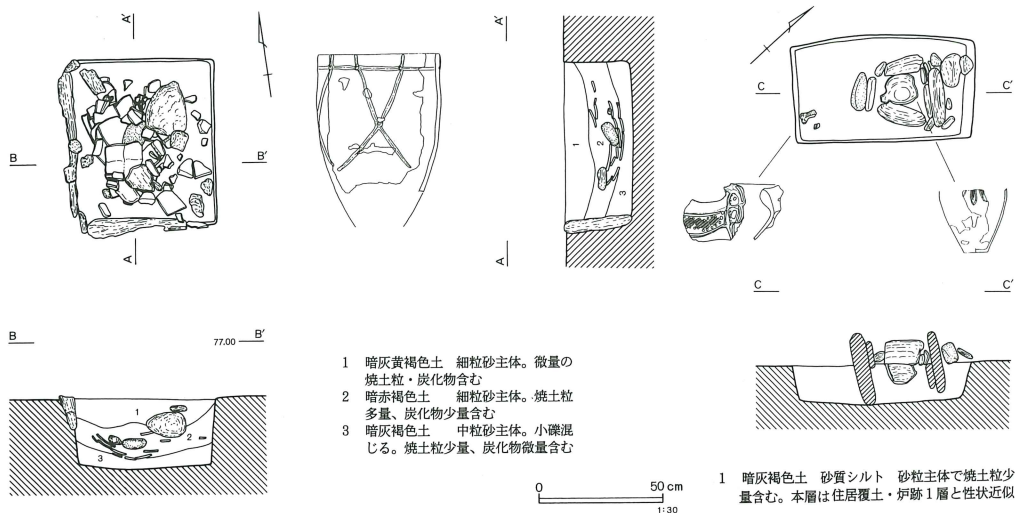
第37図 第28号住居跡敷石面

の周溝によって破壊されていた。従って、本住居も柄鏡形敷石住居とするのが妥当であろう。

住居主体部の径は3.8～3.9mを測る。壁の北西端がやや突出気味で、五角形に近い形態である。後述する第30号住居跡は、五角形の直線部分に張り出し部を有しており、本住居跡とは平面形態に相違が認められる。

住居には、4号墳の周溝によって破壊された部分以外には、床全面に敷石が施されていた。通常敷石住居に用いられた石材には石墨片岩が卓越しているが、第28号住居跡では石墨片岩とともに、緑泥片岩が多く用いられており、他の住居とは大きく異なる点である。空間を充填した砂岩やチャートの小型の河原石を除くと、全石材の6割りを占めている。また、敷設された石材には、樋ノ下遺跡の他の敷石住居と比較しても極めて大型のものが多く、最大75Kgを計る石材があった。

用いられた石材には接合して表裏の関係を有するものもあった。特に、本住居では、石材が被熱し赤変しているものが多く認められた。被熱した部位は、石材の一部・全面・表面のみ・表裏面ともに被熱したものなど様々で一様ではないが、敷石敷設以前に既に被熱していた可能性が極めて高



第38図 第28号住居炉跡・石組み遺構

い。

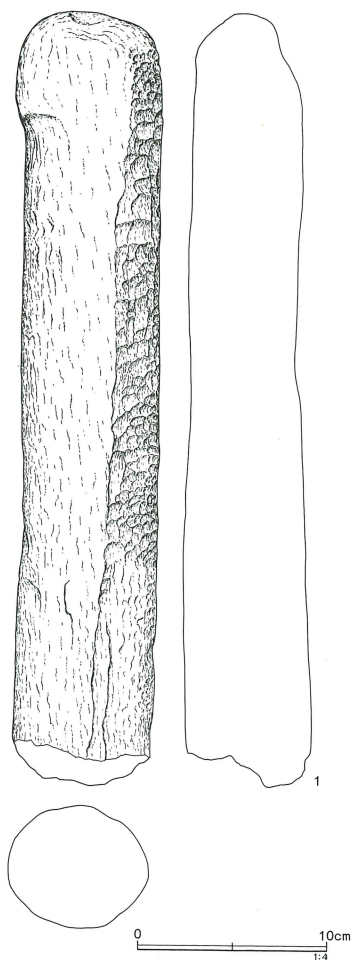
床面の大型石材の敷石間の空白部には、砂岩やチャート等の小型の河原石が目留めのように丁重に充填されており、敷石面にはほとんど空白部位が認められなかった。これは本住居に限らず、全面敷石住居での特徴といえる。

床面の中央部からは、石囲い炉が検出された。炉石は4号墳の周溝によって東・北壁側で壁石が除去されていた。炉は一片が60～67cm でほぼ方形である。敷石除去後の床面からの深さは28cm を測る。炉は覆土が3層に分層された。焼土は第2層に堆積しており、遺物の出土状況から見て、第3層は掘り方の埋土であったと考えられる。

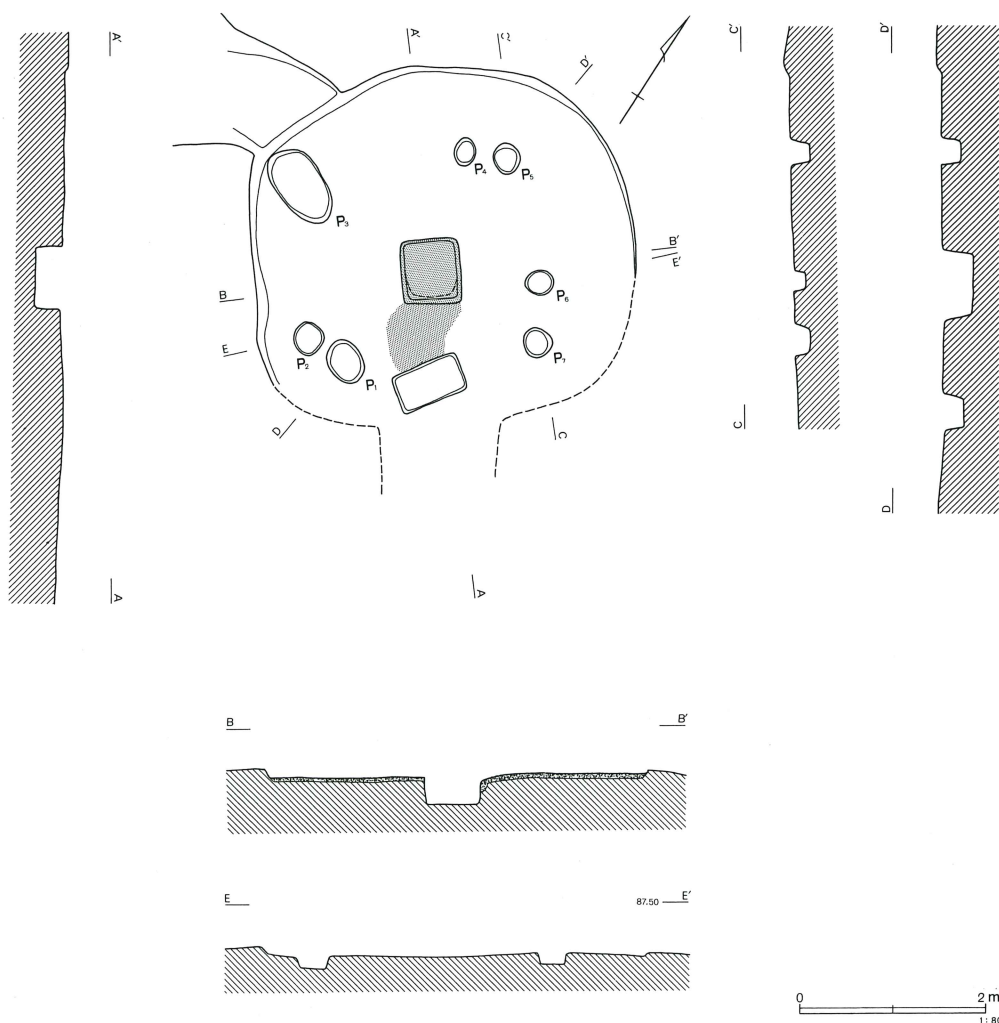
炉からは大型の土器片が多量に出土した。第2層に集中し潰れたような出土状況であった。復元の結果、胴下半を欠失した1個体の深鉢形土器と判明した。おそらく炉体土器として埋設されていたものが、炉外からの礫の転落や堆積した土圧などの原因によって破壊されたものと推察される。

炉の南側では、敷石下から配石を伴う土壌が検出された。掘り方の規模は長径73×短径43×深さ30cm の長方形である。内部には扁平な結晶片岩を方形に組んだ配石を伴っており、配石内部には深鉢形土器の胴下半部器が埋設されていた。

石囲い炉と配石間には石棒（第39図）が検出された。出土状態から、敷石敷設当時は埋設され、直立していたと考えら



第39図 第28号住居跡出土石棒



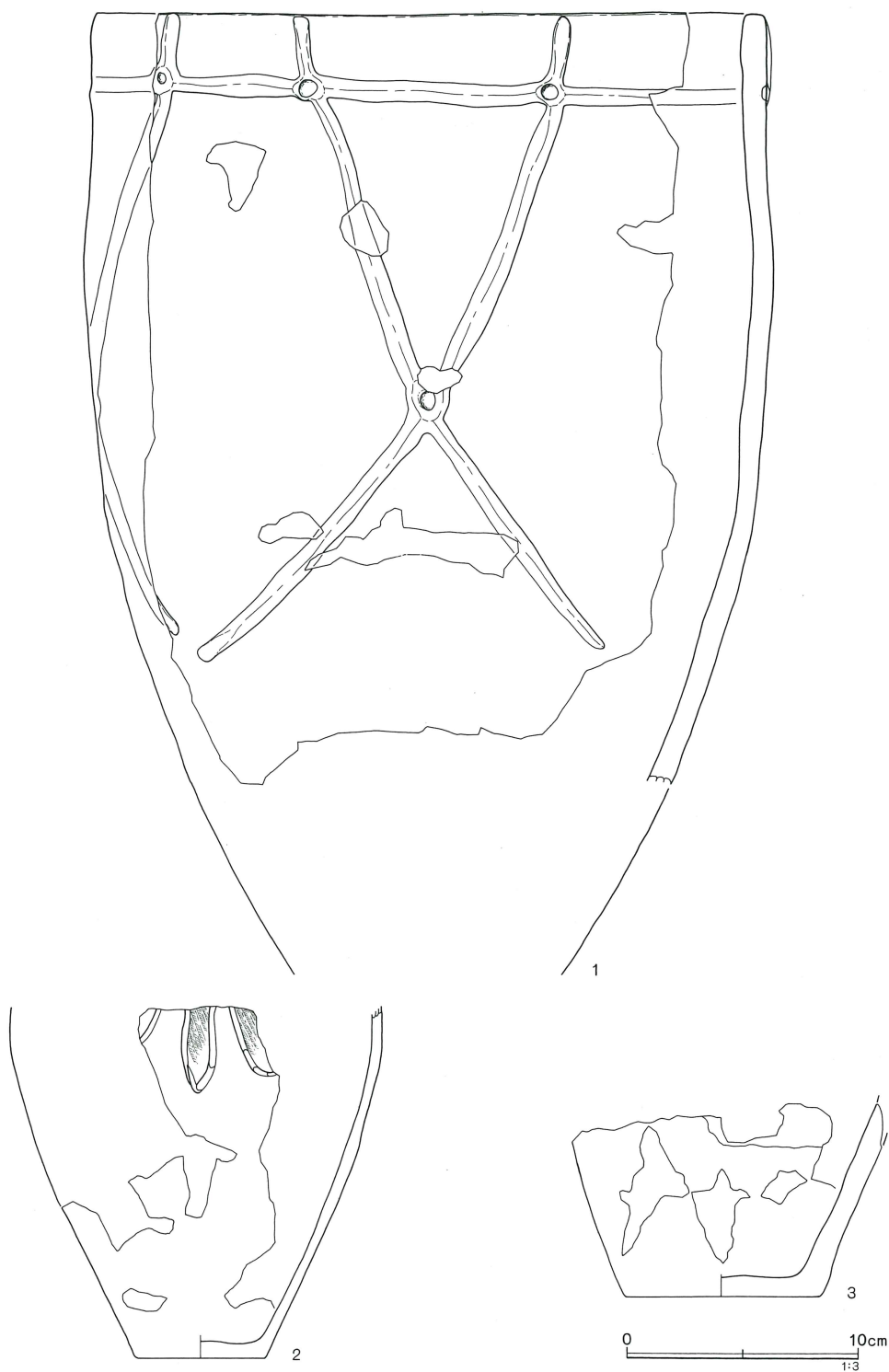
第40図 第28号住居跡掘り方

れる。

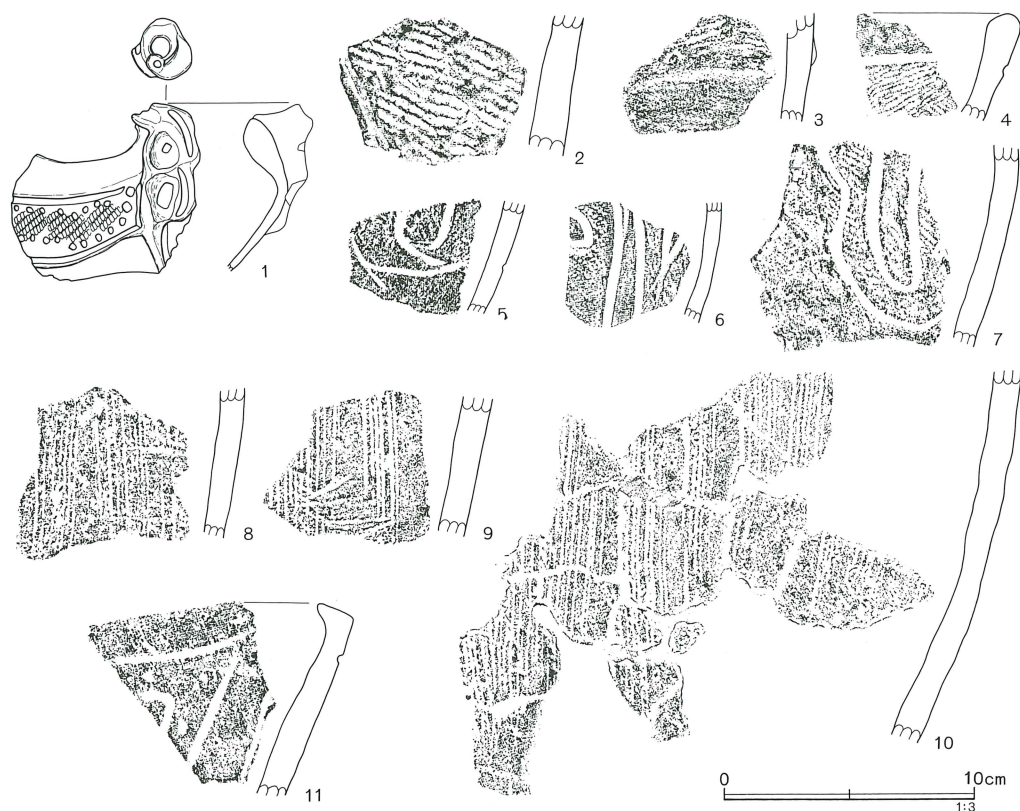
敷石面の調査後に敷石を除去し掘り方の調査を行なった。敷石下には暗褐色土が堆積しており、この土層を掘り下げたところ、柱穴が確認された。柱穴は7基検出され、壁に沿ってめぐっていたが、P3は上面に敷かれた石が被熱し赤変していたため、範囲を広く確認したきらいがある。他の柱穴は明瞭に確認された。柱穴は径が30cm 前後で、確認面からの深さが25cm 前後であった。

炉と石組み遺構の間には焼土の広がり確認されたが、遺構は検出できなかった。以上のことから、敷石下の暗褐色土は敷石に先立つ貼り床であり、敷石以前に住居の床として機能していた可能性が考えられる。

住居跡から出土した土器で器形復元された資料は、炉と石組み遺構内に限られていた。住居の掘り込みが極めて浅かったために、覆土内からは遺物が殆ど出土しなかった。



第41図 第28号住居跡出土土器 (1)



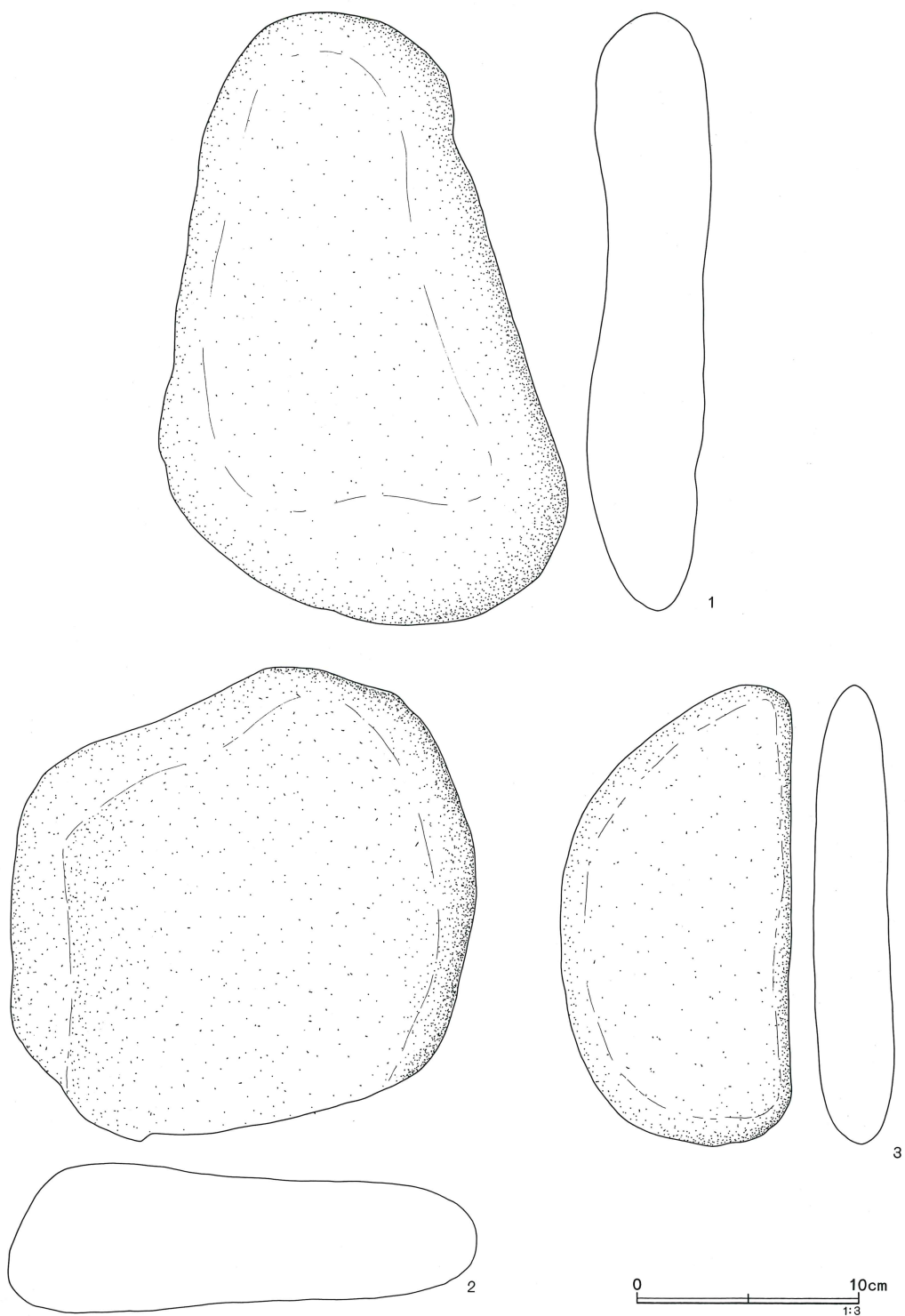
第42図 第28号住居跡出土土器（2）

第28号住居跡出土遺物

第41図1は石囲い炉から出土した大型深鉢形土器である。胴中位に最大径をもち、口縁にかけて緩やかにすばまる。器面は風化が進んでいるが、丁寧に磨きが施されていたと思われる。文様は口縁と胴部の2帯からなり、口縁は無文である。胴部は4単位のX状文様で構成されている。胴部文様は文様帯区画の隆起線と接し、口唇から二条を1単位とする隆起線が垂下している。隆起線の接点には円形刺突が加えられている。推定口径39cm・現存高45cmである。

同図3も石囲い炉から出土したもので、1の底部と考えられるが、接合はできなかった。器面の風化が著しく、整形などの詳細が観察不能であった。

第40図2・第41図1は炉の北側に位置する石組み遺構とその掘り方から出土した土器である。2は胴下半で、文様の末端に位置するため詳細が不明であるが、称名寺式土器と考えられる。石組み内部に安置された出土状況であった。第41図1は、8の字状を呈する突起と微隆起線による区画文で構成される土器である。区画内には刺突と縄文が充填されている。いわゆる「閑沢類型」とされる土器群が想起される。石組み遺構の掘り方から出土した。同図2～11は敷石面から出土した土器群である。2～3は隆起線文系に、4～7は称名寺式に比定される。11は沈線間に列点加えられる土器で、混入であろう。8～10は条線文の土器で、後述する第22号土壇出土土器に近似する資料



第43图 第28号住居跡出土石器

がある。

石器では石皿（第43図）と石棒（第39図）が検出された。石皿は不定形で、いずれも住居の縁石として再利用されていたものである。片面にのみ顕著な使用痕跡が窺える。

石棒は炉と石組み遺構のほぼ中間で検出された。基部が欠損している。粗い剥離のあとで、頭部から基部にかけて、特に片面に丁寧な敲打を加えることにより形状を整えている。計測値は頭部径7.6cm・基部最大径7.5cm・現存高39.6cmである。

第29号住居跡（第44図～第48図）

この住居跡はH-17～18グリッドで検出された。遺構は標高87mの寄居面Ⅱにあり、段丘を開析して流れていたと考えられる沢筋あるいは荒川の旧河道と考えられる低位面に隣接していた。低位面の標高は86.4mであり、比高差は約60cmである。この低位面は、調査区の東端にあり、調査面積が限られていたために、性格を決定することができなかった。この面には黒色土が堆積しており、後期の遺物も若干ではあるが含まれていた。また、河原を利用した配石土壌が検出されたことから、縄文時代後期にはすでに形成されていた地形と考えられる。

住居の上面には7世紀中葉に第4号墳が築造された。周溝は、住居主体部の東壁際を巡っており、このために住居主体部の縁石の一部と張り出し部の大半が破壊されたものと考えられる。従って、調査の結果では、特に張り出し部には床面上の敷石が一部残存するだけで、縁石は確認できなかった。

住居は主体部の径が4.2×4.4mで、張り出し部方向にやや長い楕円形を呈している。先述した第28号住居跡に近い平面形態である。住居跡の主軸上やや張り出し部寄りで石囲い炉が検出された。

第29号住居跡は、扁平な河原石を地山と垂直に埋設することによって壁を造り出している。この構築方法は、第31号住居跡にも採用されており、第30号住居跡の壁の構築方法と共に、敷石住居に特徴的な壁構築法のひとつである。出土土器の型式学的特徴から、際立った時期差を認めることはできない。

住居跡の壁から80～90cm内側には敷石がめぐっており、二重にめぐる敷石が考慮される。従って全面に敷石が施されたとは考え難い。この考えを裏付けるかのように、壁と内面の敷石との間には柱穴が検出された。さらに内面の石が扁平で、長軸が内面に向かって遺存しており、壁とこの間には殆ど敷石が見られなかった。

柱穴は直径が20～30cmの円形ないしは楕円形で、床面からの深さは平均15cm程度である。第29号住居跡では柱穴全面が敷石によって覆われていたものはない。土層の検討では、この部分には第3層が観察され、堆積状態からみて、埋土されていたことが考えられた。

住居に用いられていた石は、砂岩が最も多く、全体の50%を占め、残りは石墨片岩・緑泥石片岩チャートなどが用いられていた。

炉は床面の中央やや張り出し部寄りに位置していた。長径78×短径60cmの長方形で、床面からの深さは約15cmである。炉の主軸方向には復元した住居の主軸と若干のずれが認められる。炉の南から東壁には炉石が残っていたが、他の部位は炉内に崩落していた。炉内には壁際に少量の焼土

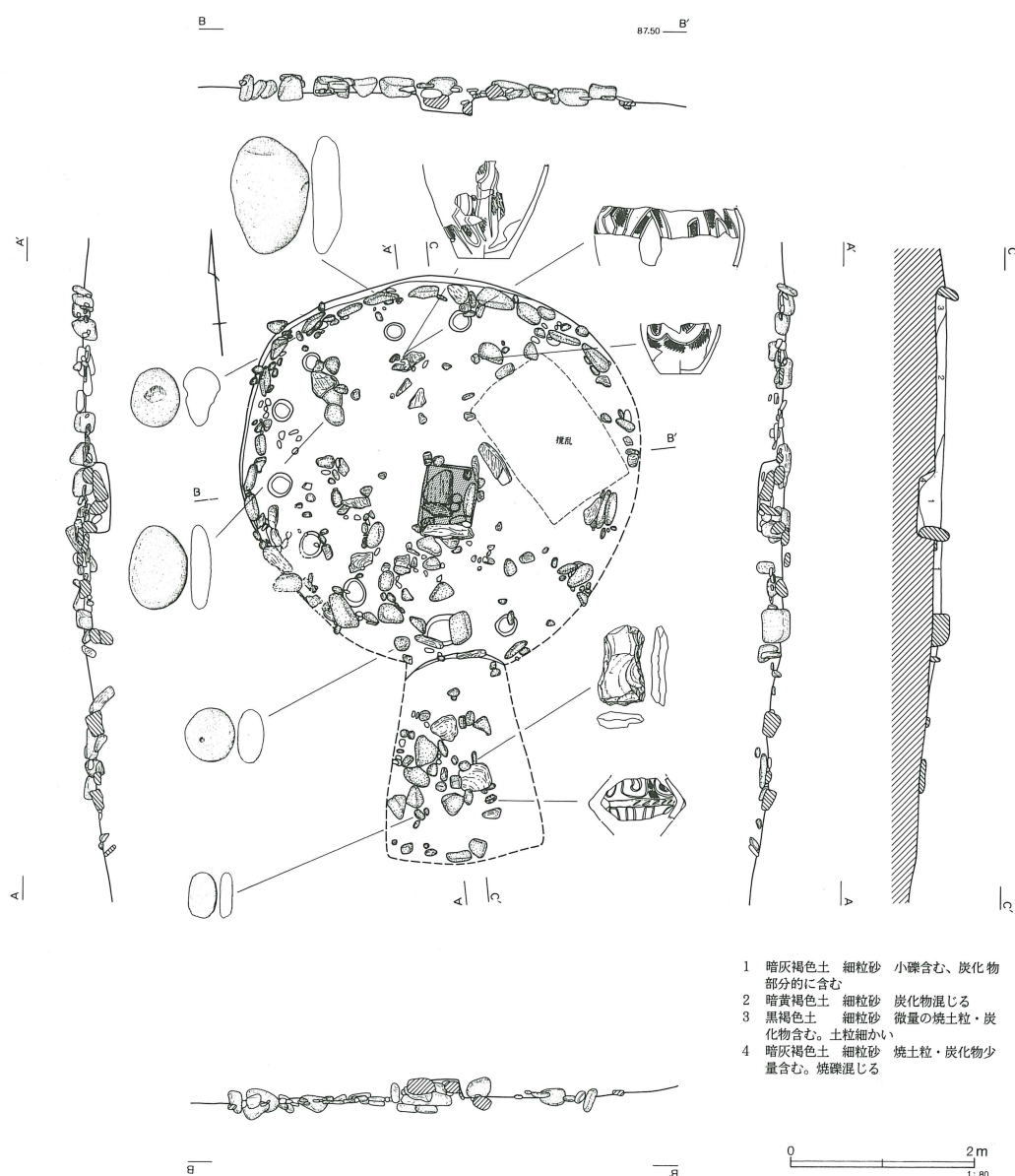
が堆積していたが、覆土の堆積状況と共に自然堆積であった。

遺物は、主体部の壁際と張り出し部敷石面からミニチュア土器が出土した程度で、覆土が貧弱だったため、遺物は量的に少なかった。

第29号住居跡出土遺物

第46～48図が第29号住居跡の出土遺物である。部分的に器形復元可能な土器は4個体出土した。第46図1～2は称名寺式土器で、同一地点から出土した。沈線内に1は縄文LRが、2にはLが充填されている。残存部位が少なく、文様展開が不明であるが、2は文様の末端が開放されている。

3～4はミニチュア土器である。3は連弧状の文様をもち、下端の沈線が文様を区画しているも

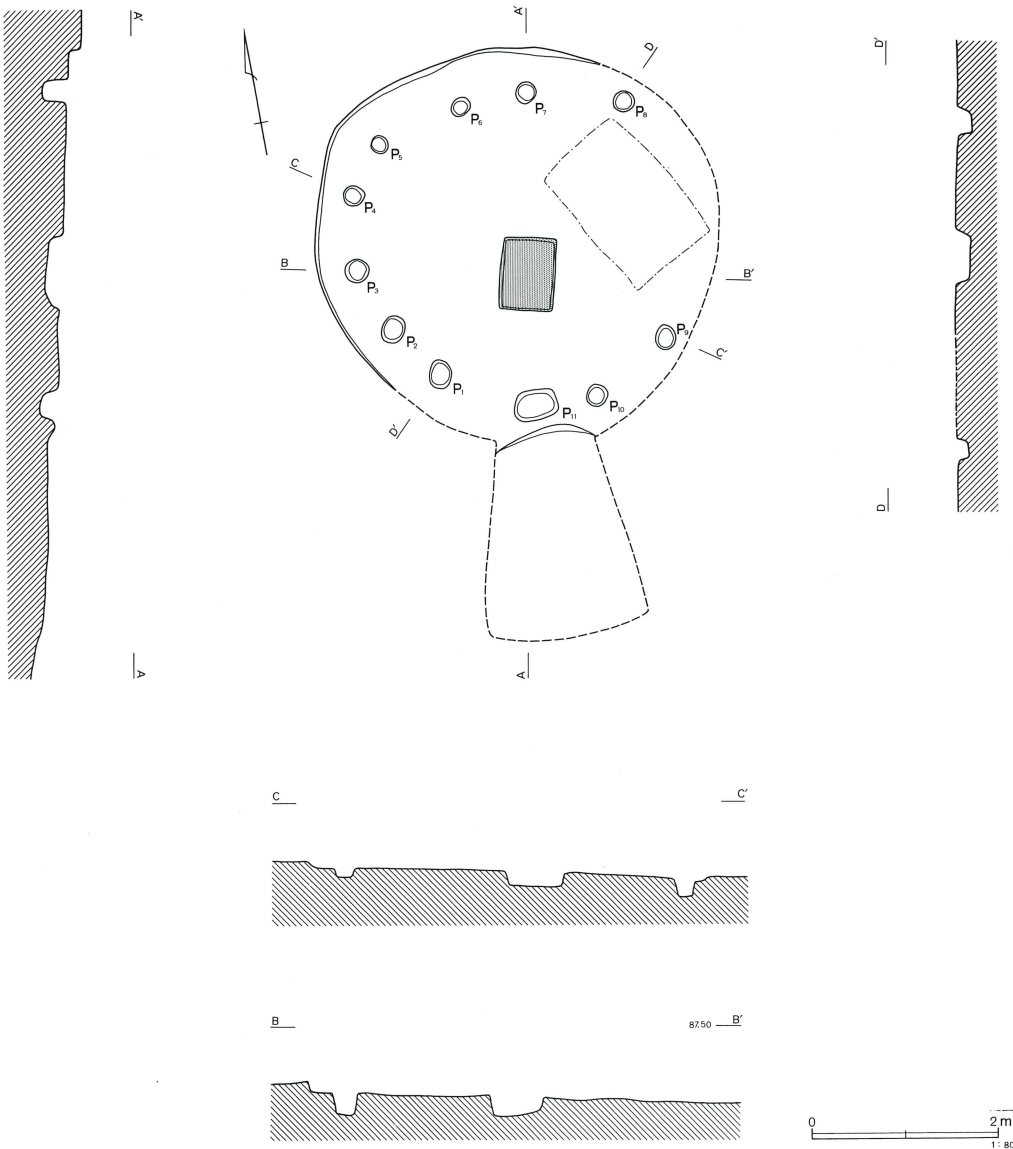


第44図 第29号住居跡敷石面

のと考えられる。沈線間および沈線下には縄文 LR が充填されている。構成は大木10式に近いものがある。1～3は内周する敷石際から出土した。

4は隆帯を境に「く」の字状に屈曲し、算盤玉に近い器形である。文様は沈線で描かれ、押圧ある隆帯を境に、上部には長方形区画内にJ字状モチーフを配した称名寺風の文様が、下部には長方形の文様がそれぞれ多単位に描かれている。全体の構成には3と同様に大木10式の影響が認められる。上部の文様間には縄文 LR が充填されているが、下部は沈線のみである。

同図5～16は主体部覆土中から出土した破片を一括した。5～13が称名寺式に、14～16が堀之内式に比定される。5は波状口縁の深鉢形土器で、文様間に楕円の刺突をもつ隆帯が配されている。



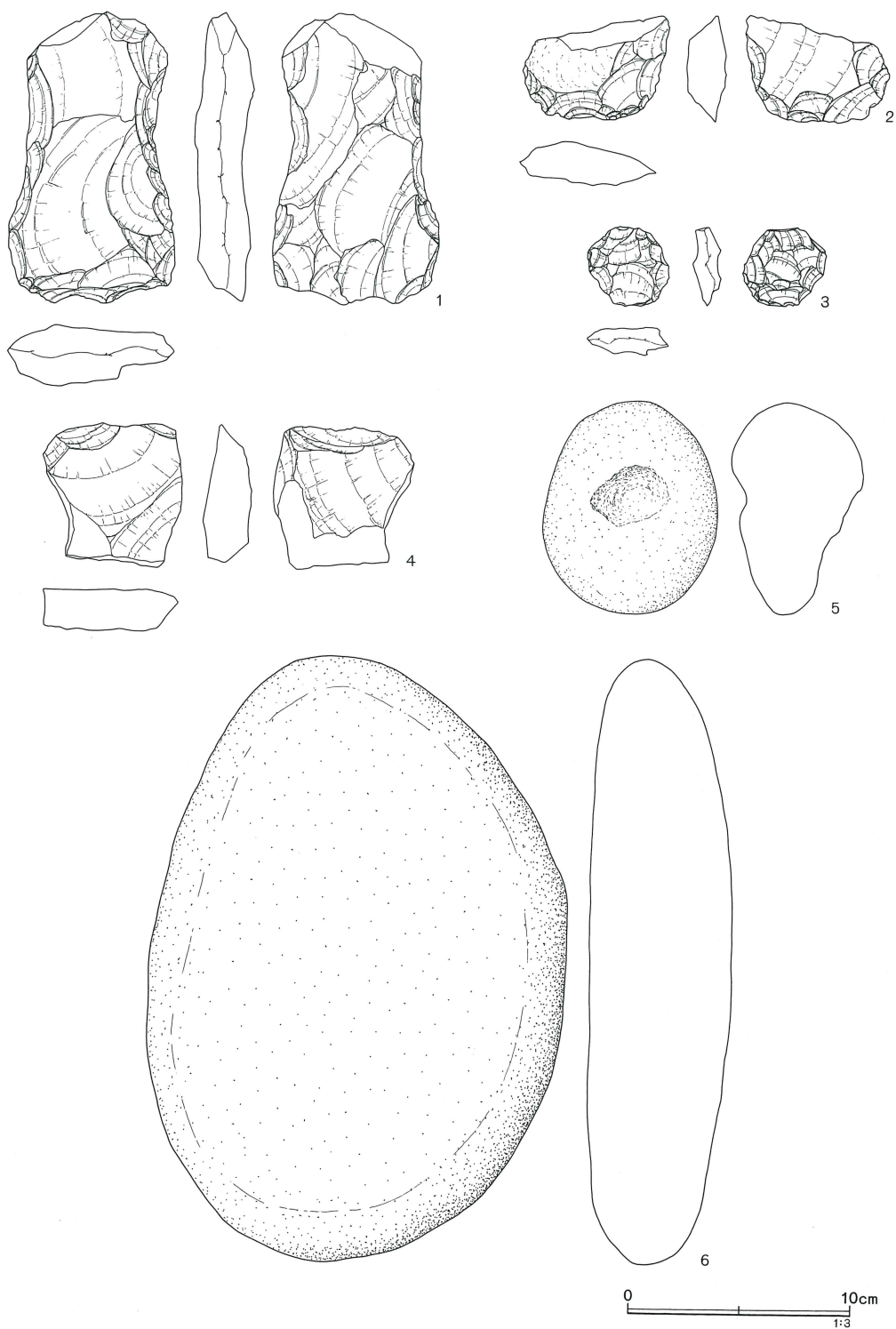
第45図 第29号住居跡掘り方



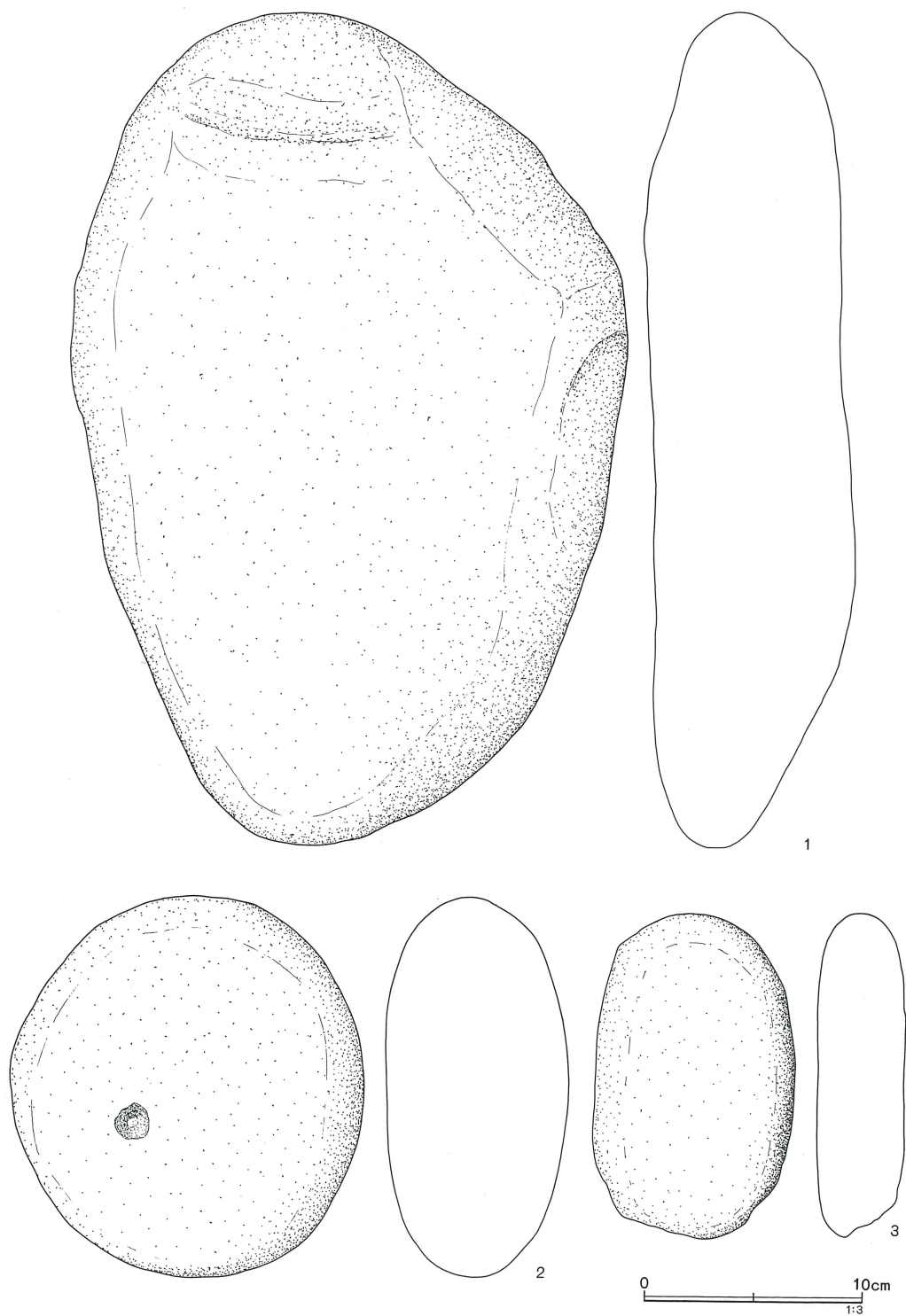
第46図 第29号住居跡出土土器

10・12は同一個体であろう。6は沈線間に縄文が充填された後に、さらに単列の列点が加えており、この段階の称名寺式のに特徴的な資料である。7～8も波状口縁で、8は口唇上の貼付文に接して垂下する隆帯が器面を分割している。充填される縄文は全てLRである。13は沈線間に列点が加えられ、形式的に新しい資料である。

石器は図示した資料が全てである。第47図1～2・4は打製石斧である。1は刃部が欠損した後再生されている。3は側縁に微細な調整加工が施されており、削器と考えられる。5は磨石で、両面に不定形のくぼみをもっている。第47図6～第48図には石皿・磨石を掲載した。全てが住居主体部或いは内周する壁の縁石に転用されていた。いずれも自然石をそのまま用いており、石皿には片面にのみに顕著な使用が認められる。



第47图 第29号住居跡出土石器 (1)



第48図 第29号住居跡出土石器（2）

第30・31号住居跡（第49図～第60図）

第30・31号住居跡はG～H-17～18グリッドで検出された。重複した2軒の柄鏡形敷石住居跡である。外周の大型住居を30号に、内周の住居を31号と命名した。住居は寄居面Ⅱにあり、旧河道に面した標高86.6mから87mの斜面部から平坦部に位置している。寄居面Ⅱには、調査区の南西から北東方向に微高地状の高まりがあり、後期の住居跡は荒川に面した緩斜面部に位置する点で共通性が窺える。旧河道の成因については、第29号住居跡の項目で既に説明した。住居の構築面との比高差は約60cmである。住居張り出し部前方に見られる一対の土壌は、第12号墳の周溝に伴うものである。

張り出し部には、大型の河原石が縁石として用いられており、12号墳の周溝は、張り出し部の縁石を避けるように掘削されていたために、遺存状態が良好であった。

第30号住居跡は、五角形の主体部と、端部が丸味を帯びた長方形の張り出し部をもつ柄鏡形敷石住居跡である。平面形態は第29号住居跡と同様に、五角形の頂部に張り出し部を持つ形態である。

堅穴の周囲には総計17の柱穴がめぐっており、配列から第30号住居跡に伴うものと考えて差し支えあるまい。柱穴は径が30～40cmで、確認面からの深さが主体部周囲で20cm前後、張り出し部周囲ではやや深く、30～60cmを前後している。なお、P6からP7間には攪乱があったため、柱穴は検出できなかった。

第30号住居跡の径は、堅穴主体部で東西5.1m×南北5.5mで、張り出し部を含めた南北の全長は7.8mである。堅穴外の柱穴を含めると、南北11m×東西7.8mをはかり、樋ノ下遺跡で検出された最も大型の住居跡である。

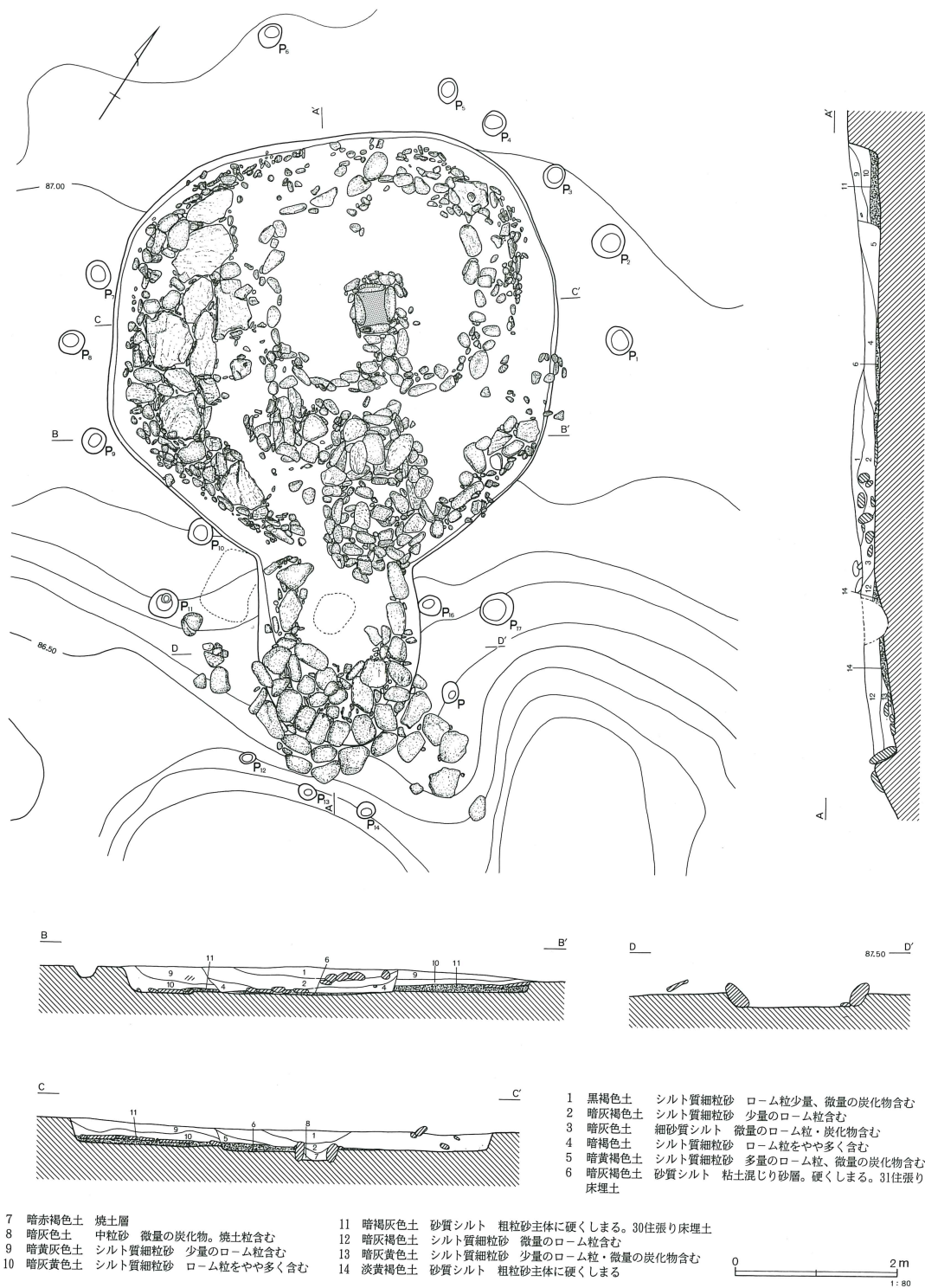
住居跡の敷石面は、主体部ではほぼ平坦であり、張り出し部では南側に緩く傾斜していた。住居跡の敷石は、壁の5～20cm内側から敷設されており、壁と壁石との間は埋土されていた可能性があるが、土層からは明確に確認できなかった。壁は敷石端部に接して構築されており、小型扁平な河原石を積み上げるように、あたかも古墳石室の側壁の如くに壁が造られていた。

主体部の敷石に用いられた石材には、石墨片岩が最も多く、緑泥片岩がそれに続く。大型扁平のこれらの石は主に床上への敷石として丹念に組み合わせられており、空白部には砂岩を主体とする河原石を丹念に充填することによって、すき間のない敷石面を造り出している。

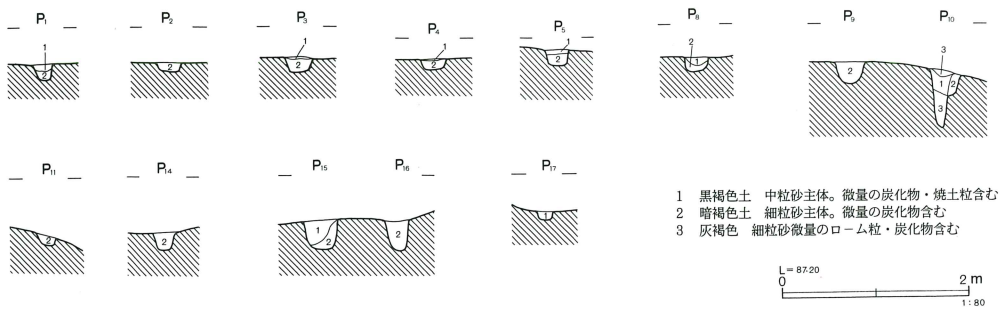
住居の張り出し部の縁石には、特に大型の砂岩やチャートが選択的に用いられていた。先端部の石は、南側斜面に転落したような出土状況を呈しており、構築当初は張り出し部の縁石上に積まれていた可能性がある。

張り出し部には、2個体の深鉢形土器が埋設されていた。いずれも称名寺式土器で、口縁から胴上部を欠失している。1号埋甕は周囲に敷石が敷設されておらず、敷石面から確認が可能であったが、2号埋甕は敷石によって大半が覆われており、この状態で全景を確認できなかった。敷石を除去した後に床面を精査したところ、2個体の埋甕は、張り出し先端部の敷石下で検出された楕円形の掘り込み内に埋設されていた。この掘り込み内には、住居の敷石下で確認された貼り床と思われる硬化面と同様の土層が確認され、土器を埋設した後に貼り床されたことが明らかである。1号埋甕内および掘り込み覆土内からは焼けた微細な骨片も検出された。

炉は主体部の中央に位置しているが、重複した31号住居跡の構築に際して破壊されており、敷石



第49図 第30・31号住居跡敷石面



第50図 第30号住居跡柱穴土層図

面からは詳細を窺うことができなかった。構築当初は石囲い炉であったと考えられる。炉は、31号住居跡の敷石を除去した段階で検出された。覆土内には焼土・炭化物を含んだ暗灰褐色のシルト質細砂層が堆積していた。南壁が31号住居跡の張り出し部掘り方によって破壊されていたが現存部分での計測値は92×80cm、深さ20cmである。

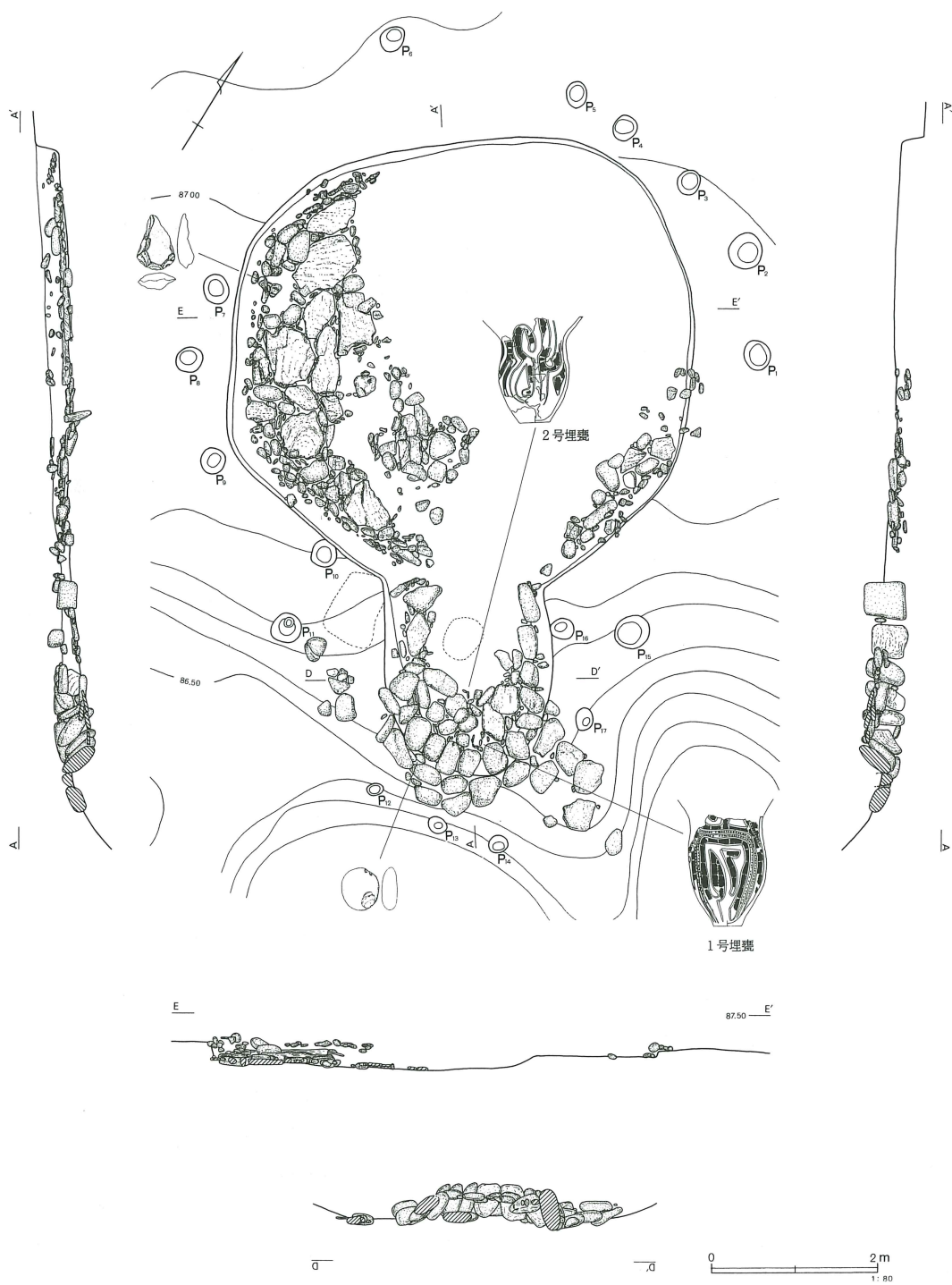
30号住居跡の敷石は、31号住居跡の構築によってその大半が除去されていたが、当初は床全面に石が敷かれていたものと考えられる。

31号住居跡は、30号住居跡内に構築されたもので、覆土の堆積状況や炉・敷石の状態から、30号住居跡が埋没した後に構築されたものと考えられる。31号住居跡の構築に際しては、31号住居跡の敷石を意図的に取り除いたものと考えられる。壁に相当する縁石は、扁平板状の河原石を埋め込んで造られており、29号住居跡と同じ構造である。縁石の検出状況からみて、主体部は隅丸方形を呈していたものと考えられる。埋設された縁石の外側には、細かな河原石がめぐっており、特に東から北壁にかけて遺存状態が良好であった。覆土の堆積状態が不明瞭であるが、内周する壁と外周の壁との間には、30号住居跡と同様に埋土されていた可能性が考えられる。従って、30号住居跡の敷石は、31号住居跡の外周する壁の立ち上がり部分から除去されていたことがわかる。第31号住居跡に柱穴が検出できなかったのは、この部分に柱穴が設けられていたこと、柱穴が浅かったことによるものかも知れない。第31号住居跡では、炉跡の南壁際から張り出し部にかけてのみ敷石が施されており、主体部では本来的に敷石が施されなかったものと考えられる。

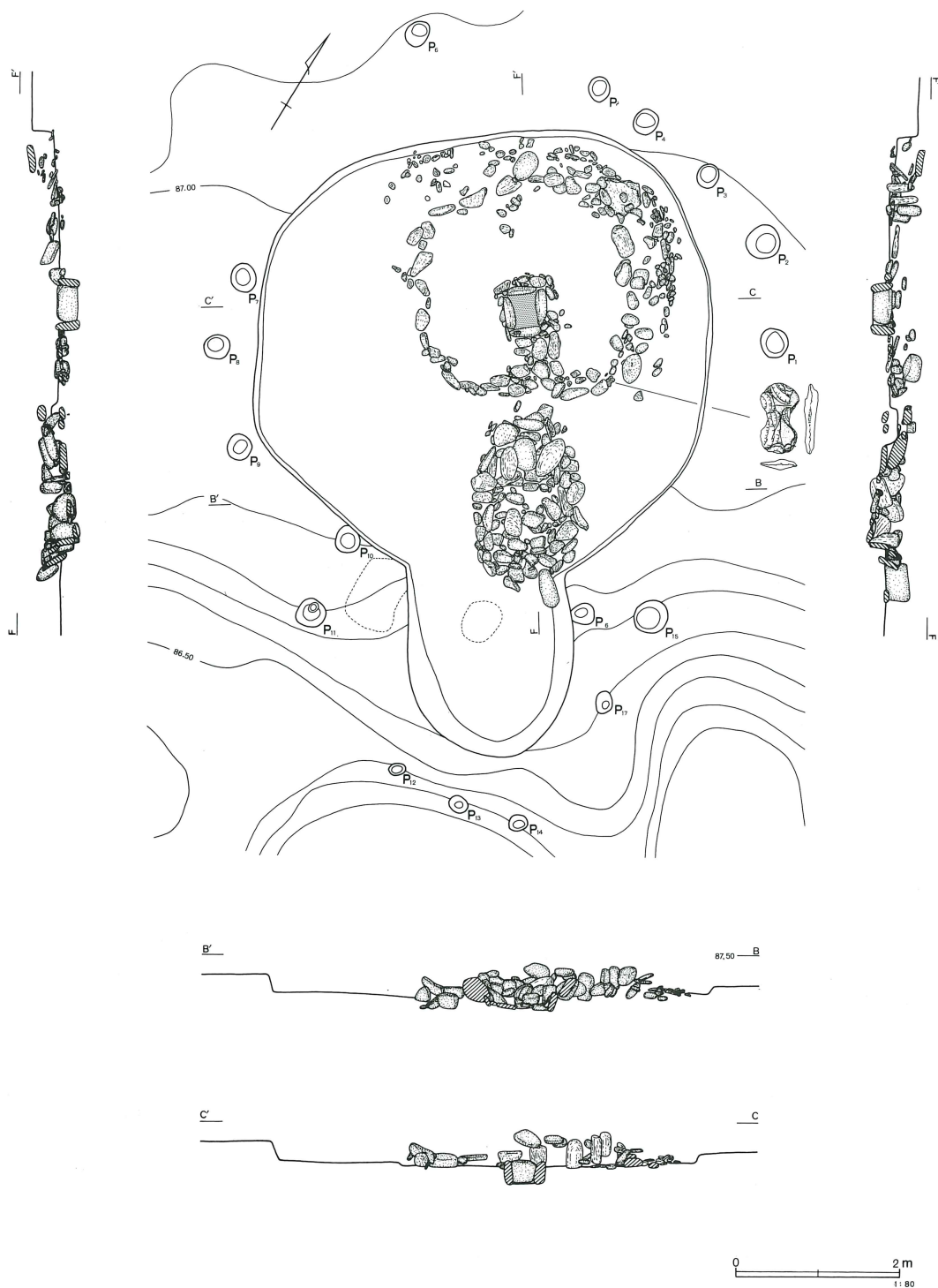
炉跡は主体部の南北主軸線上にあり、中央部からやや南壁寄りに位置している。張り出し部を含めればほぼ中央部といえよう。石囲い炉で、板状の砂岩を埋設して壁としている。南北62cm×東西52cm、深さ24cmで、第31号住居跡の炉跡に比較して、一回り小型である。

張り出し部は隅円長方形で、住居主体部と分離している。縁石には縦長の河原石が埋設されており、覆土内から拳から人頭大の礫が多く出土したことから、埋設された縁石の上部にさらに礫が積まれていたものと考えられる。敷石面は南側に緩く傾斜しており、石を除去して精査したところ、端部には楕円形の掘り込みが検出された。主軸方位は、炉と前方敷石がN-40°-W、張り出し部がN-32°-Wで、両者には若干のズレが認められた。

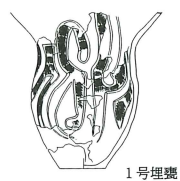
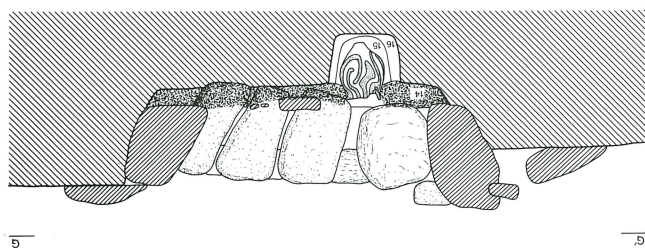
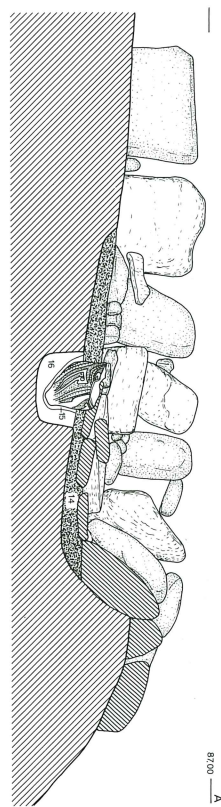
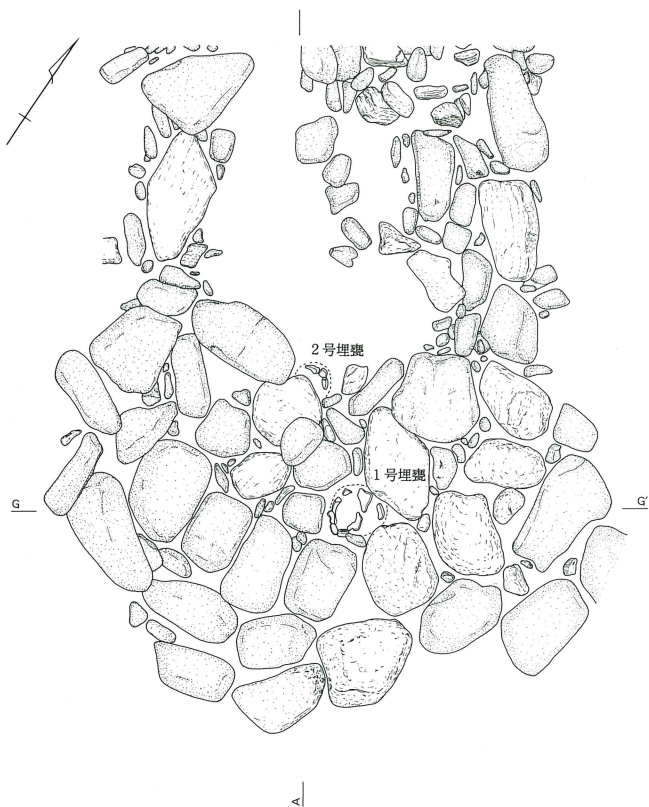
住居跡からは主体部・張り出し部を含めて殆ど遺物が出土しなかったため、時期決定を下し難いが、住居の形態から称名寺式から堀之内式期にかけてとするのが妥当であろう。



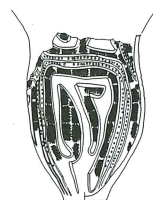
第51图 第30号住居跡敷石面



第52図 第31号住居跡敷石面



1号埋喪



2号埋喪

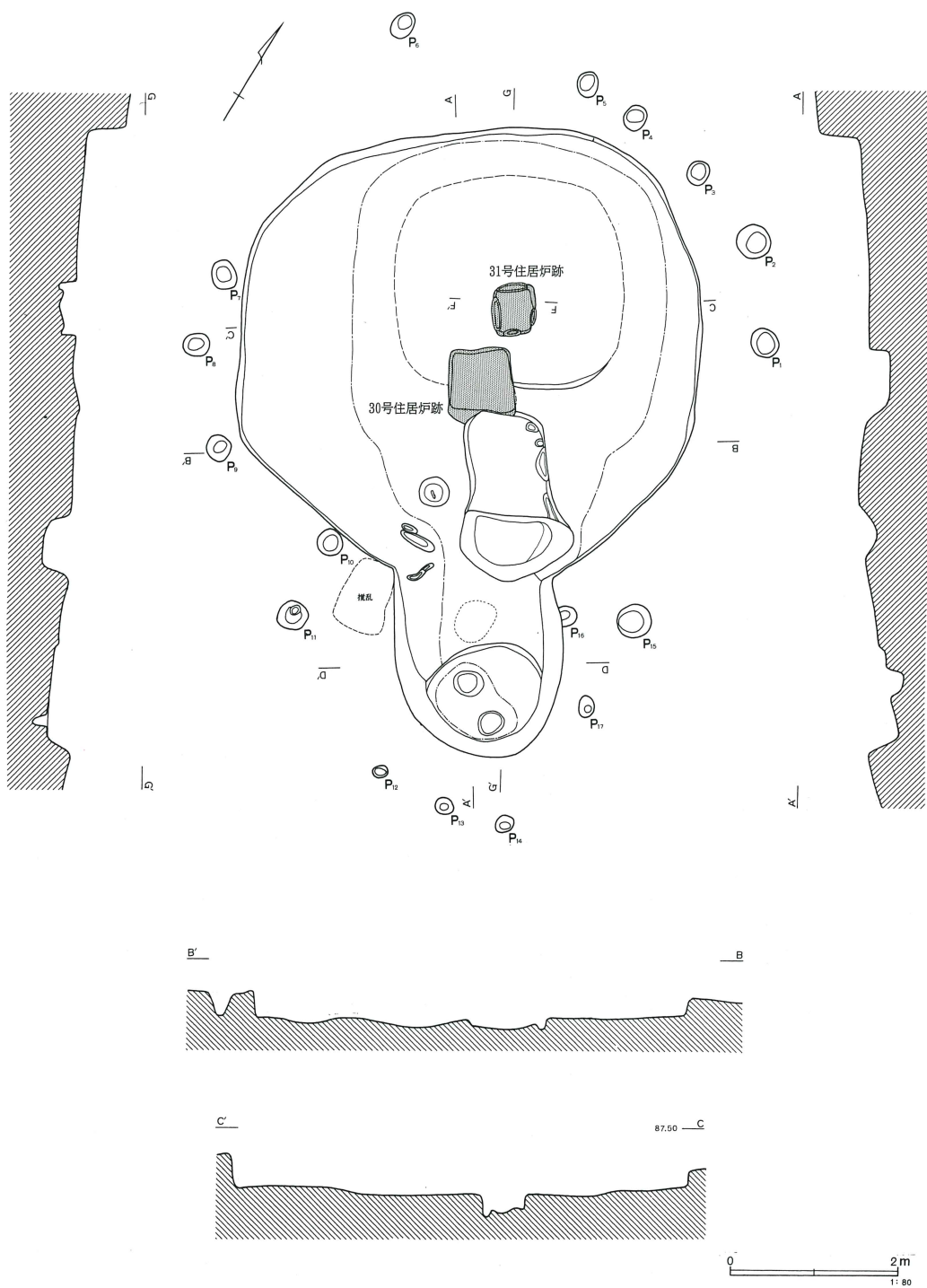
埋喪

15 暗灰褐色土 細粒砂主体。微量の焼土粒含む。

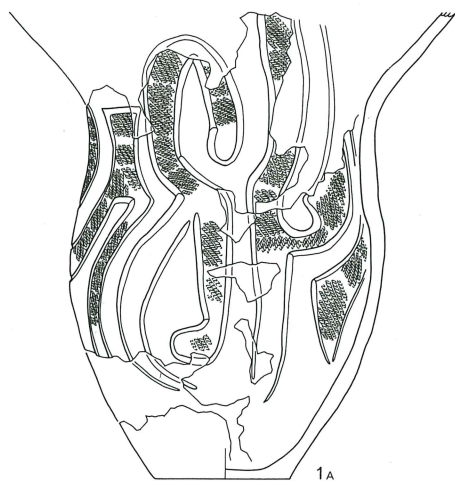
16 暗褐色土 中粒砂主体。ややしまった砂層。微細骨片出土。

0 1 m
1:30

第53図 第30号住居跡埋喪埋設状態

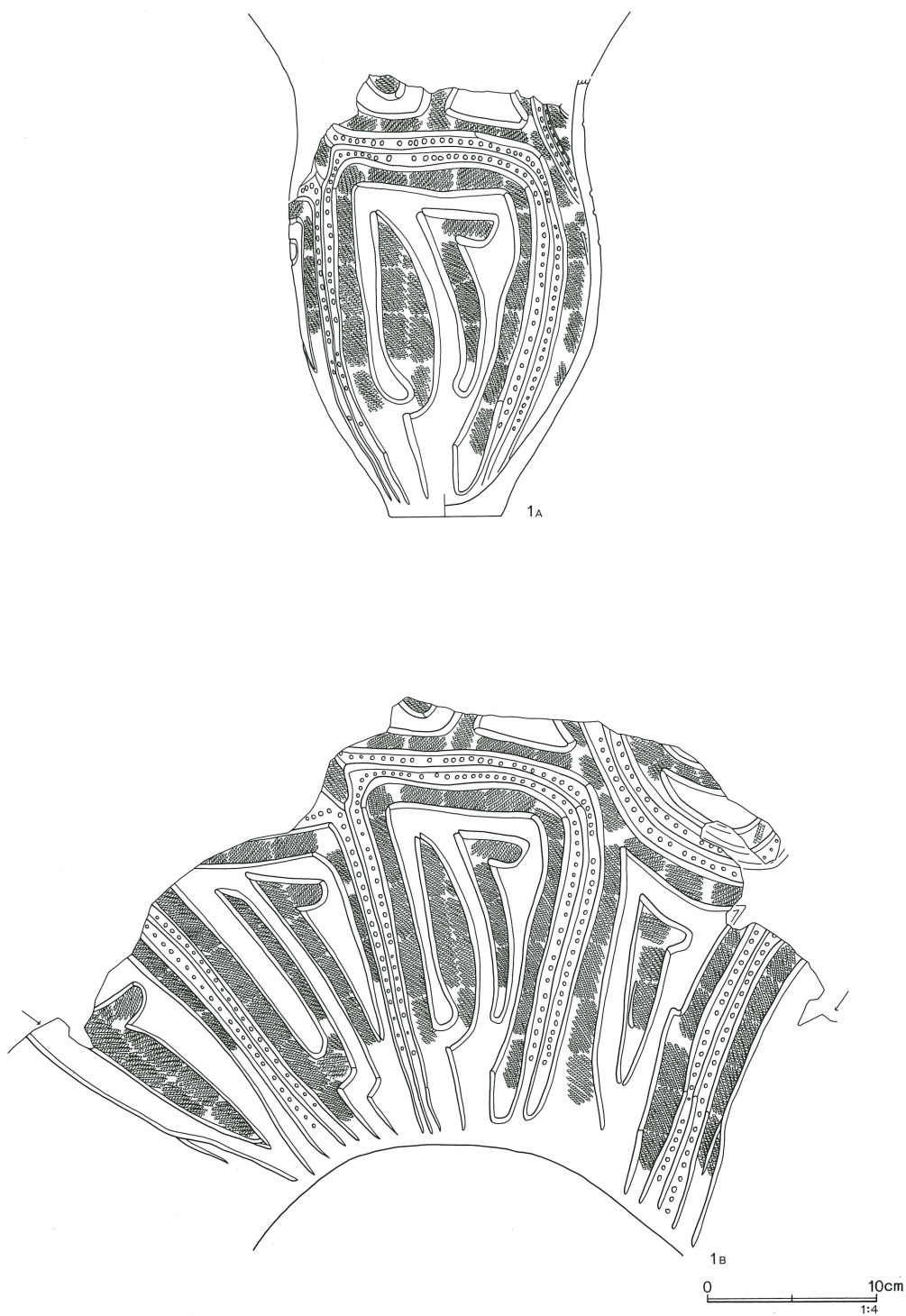


第54図 第30・31号住居跡掘り方



0 10cm
1:4

第55図 第30号住居跡出土土器（1）



第56图 第30号住居跡出土土器（2）